
その者の拳は滅殺の拳

ハジケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その者の拳は滅殺の拳

【NZコード】

N5695Y

【作者名】

ハジケ

【あらすじ】

リリカルなのはの世界に降り立った一人の格闘家・・彼はこの世界にどのような変化をもたらすのか・・・

リリカルなのはの世界に舞い降りし格闘家（前書き）

この作品は思いつきで書いたんですけどよろしくお願ひします。

リリカルなのはの世界に舞い降りし格闘家

俺は今少しだけ困っていた・・・

「参つたな何故かは分からぬが俺の中の殺意の波動が揺らいでいる・・・」

これでは次元転移ができるない・・・この世界の環境では修業の質が高まりそうにないから早く何処か別の世界に行きたかったのだが・・・。

「ここの世界・・・実は何か特殊な物でもあるのか?」

でなければ俺の殺意の波動は揺らぎはない・・・。

「少し探るか・・・ん?。」

俺は足の下に違和感を感じたどつやら何か踏んだよつだな・・・。

「何だこれは・・・?」

俺が踏んでいたのは石だったしかしこの石ただの石ではないな・・・。

フェイト Siad

私とアルフがジュエルシードを探していると一人の男の人人がいた・・・あれは!?
あれは!?
ジュエルシード・・・まさかあの人ジュエルシードを狙つてるの?

「おいセシのアンタその手に持つてゐる者を渡しな！」

私が思想に浸つてゐる間にアルフが男の人にジュエルシードを渡すよう言つていた素直に渡してくれればいいけど……。

「嫌だと言つたら？」

「力ずくで奪つよー！」

「ちよつ、アルフ！」

「大丈夫だよフェイトあいつ魔力を感じないしちゃんと加減してすぐ終わらせるさー。」

「それならいいけど・・・。」

男の人S·i·ad

すぐに終わらせるか・・相手の実力も分からんようではこの世界の奴らの実力もたかが知れでいるな。

「すぐに終わるといいがな。」

「心配しなくともすぐに終わるさー。」

あのアルフとか言つ奴が攻撃を仕掛けて来た・・この世界ではあのスピードを早いと言つのだらうが・・。

「遅すぎる。」

シャツ、ビツ。

「あ・・あれ?あの男は・・。」

「後ろだ・・。」

「なつ、いつの間に!-?」

「貴様では俺に勝てん・・。」

「何でそつ断言できるのや!-」

「貴様は俺に魔力が無いと言ひ理由で勝てると思つたみたいだが・・。
。」

「普通そう思うだろ!-」

「普通か・・戦いにおいては多くの要素が入り交じる・・魔力が無いそれだけで相手を甘く見るのはどうかと思うぞ。」

「うつ・・それは・・。」

「それとその金髪の少女・・ファイトと言つたな何故、攻撃をして来ない今の俺はお喋りをして隙だらけだと思わなかつたのか?」

「え・・そつ、それは・・。」

「考えられなかつたのか？俺の話しが聞くのに少し集中してしまつて？」

「はい、はいそうですか・・・。」

「ふむ・・・そつか相手の話した耳を傾ける事は別に悪い事ではないがな。」

素直な子と言う所か・・。

「アンタ何者だい・・・？」

「俺は・・・」

「よつしゃーーー！」からばじまるぜーーー！」

「なつ、何だい！？」

「むつ・・・（大きめの気が現れた・・・）」

転生者 Siad

いたよいたぜフェイントちゃんがそれにアルフも・・・なんかしらねー男もいるが無視だ。

「ねー彼女達ちよつといいー！」

「何だいアンタ？」

「ジュエルシード集め手伝つてあげるよー。」

「何でジュエルシードの事を！？」

「ジュエルシード・・？（もしかしてこれが・・。）」

「大丈夫、俺さあ君たちの味方だから・・・あ、それと俺の田さあ二人ともちょっと見てくんない。」

魅惑の魔眼発動！これで一人は俺の・・
グサ。

「イツテエー目が目があああーーー！」

「ちよつ、アンタ何いきなり田潰ししてんのー？」

「！」いつが変な術を発動しようとしたからだ。

「変な術！？」

「あれは恐らくチャームの類だな。」

「チャームだつてー？」

「田イテエ・・・くそテツメエよくもやりやがつたなーそれにばら
しゃがつてーこうなりや力ずくだ！」

男の人 Si ad

力ずくか・・確かにこの世界のレベルでは尋常ではない氣の量だがな・・。

「戦うのか?」

「何だびびつてんの! だろうな、なんたつて俺は巨大な魔力と魔法以外にも超サイヤ人並みの氣を持ったハイブリッド転生者びびつてもしゃーねえよギャハハツ・・」

ドゴン!

「隙だらけだ・・。」

「いっ、いつのまに・・しゃべつてる最中にきつ、きたねえぞ・・。」

「

「戦いの最中に喋る奴が悪い。」

「あ・・ぐつ。」

びつやうり気絶した様だなそれにしても転生者とは・・。

「あつ、あの助けてくれてありがとう。」

「別に礼を言われる様なことせしていない。」

「いや・・あの変なの魔力は実際巨大だったアタシたちじゃ勝てなかつたと思つ。」

「確かにな。」

「何かアイツ、アタシ達狙つてたみたいだしそれを倒したアンタには礼を言ひよ。」

「やうか・・。」

「あつ、あのジユヌルシード・・。」

「んつ？」れか・・」んなの別に要らんしな・・やる。」

「あつ、ありがとウ・・。」

「わ行くか・・。」

「え!」
「んだけ?」

「わあ・・?」

「わあつて・・。」

「あつ、あのよかつたら家に泊まつてこあせんか?・・・

「いいのか?」

「はい、助けてもらつた恩もありますし。」

「やうかありがとう助かつたよ、この世界にはまだ不慣れでね。」

「この世界？アンタ別の次元の人間かい。」

「ああ、やうだ。」

「あの一つ聞いていいですか？」

「なんだ？」

「名前なんですか？」

「そりかさりきは言えなかつたな・・俺の名前は、キルアだ。」

「キルア・・キルアさんですね。」

「フヨイトへ早く家帰ろつお腹減つたよー。」

「うんそりだねアルフ帰ろうか・・キルアさんもほら一緒に。」

「ああ分かつた。」

しかしあのジュエルシード言いつ口ただの石では無いようなんだが何故あんな少女が集めているんだ・・それに転生者とは・・まあ今考えても仕方ないな・・・。

リリカルなのはの世界に舞い降りし格闘家（後書き）

フェイト「小説どうでしたか？できれば次も見てくださいー。」

キルア「よろしく頼む。」

キャラ紹介（前書き）

キルアのキャラ紹介です。

キャラ紹介

キルア

次元を渡り歩く旅の格闘家、旅の目的は「」の中の殺意の波動を完全に克服する為である。

能力

殺意の波動（次元転移の為に使用はしているが戦闘では滅多に使わない。）

技

暗殺拳をベースに強化した技を使う。

性格

人に厳しく自分に厳しい性格、戦いにおいては非常に冷静。

見た目

黒い胴着に身を包んでいる。

髪は少し跳ねつ毛の黒髪。

目の色は青色。

身長は178cmである。

荷物袋を持っている（ストリートファイターのリュウのものと見た目は同じ）

バカな転生者

こいつ今後でるかな・・・。

リリカルなのはの世界でハーレムを主論む・・・こいつだけじゃないけど

技

正直どうでもいい。

性格

バカ

能力

キルアにとつてはたいしたことなし

見た目

別にこいつの見た目なんか読者様も知りたくないと思う。

転生者「おい俺の紹介いいかげんだぞー!?」

作者「だつてただの字数稼ぎだもん。」

転生者「テツメエ!」

作者「キルアさん黙らせてくれさい。」

キルア「分かつた。」

ガン!

転生者「ひでふうー!」

作者「読者の皆様これからもよろしくおねがいします。」

キャラ紹介（後書き）

作者「本当はキルアの紹介だけでいきたかったんだけどな。。」

キルア「ネタに影響がでるから出せないものがあった。。。だからどうでもいい奴で字数稼ぎ。。。と言う所か。。。」

作者「うんそうだね。」

フェイド「キルアの語られない部分。。。気になる。」

作者「それは物語でおいおいね。。。読者の皆様これからもよろしくお願いします。」

意外にも料理が出来る格闘家（前書き）

作者「今日は少しほのぼの系かな？」

意外にも料理が出来る格闘家

「ふむ・・・」レは良い所に住んでいるな。」

フュイト達の住んでいる場所は明らかに高級マンションだった・・。

「キルア、『飯の用意するね。』

「ああ・・・頼む。」

「もぐもぐ・・・。」

「ん?」

アルフはすでに何か食べてこりみつけた見ると・・

「・・・・・ドックフード?」

「何?キルア?」

「いや・・・何でも・・・。」

「そう?」

アルフは狼の使い魔だと思うのだがな・・まあ狼でもドックフードを食べる」とはあるだろ?な・・。

「キルアー!『飯出来たよー。』

「ん？ 隨分早いな・・カツ麺？」「

「え・・嫌いだつた？」「

「いや、 そうでは無い、 いつも食べてるのか？」「

「うんそうだよ？」「

「そつなのか・・育ち盛りにカツ麺を毎日・・これは悪いな・・。」

「仕方ない・・俺が作るつ・・。」

「えつ？」

「育ち盛りにこんな物ばかりではいかんからな・・。」

「キルアって・・料理できるの？」「

「出来るわ。」

「意外だねえキルア、 アンタ見た目からして格闘家だろ？、 ただ焼いて食うしかできない」と思ったよ。」

「かつてな格闘家のイメージを付けるな。」

確かに調味料が無い場合が多いから大方単純な食べ方になるだろ？が・・。

「さて・・冷蔵庫の中は・・・空だな・・。」

「『』ハ、『』めんなさい。」

「いや・・別にいい、無ければ探つて来ればいい・・。」

「アンタ・・今、買つてくるじゃなくて探つて来るって言つた?」

「言つたが?まあ狩つても来るが。」

「じゃあ、お金渡すね。」

「ああ米と調味料の分だけでいいぞ。」

「え? それだけ・・?」

「他のは金がかからんからな。」

「なんで?。」

「たぶんキルアの奴、自然にある奴探つてくる氣だ・・。」

「それって大変じゃあ・・。」

まずはスーパーで米と調味料だ・・次に野菜だな・・山菜なら山に
あるだらつ・・次は海で魚でも狩るか・・。

「行つて来る・・。」

「うして俺は材料をとつに行つた・・すぐに戻るが・・。」

「行つちやつたね・・・。

「やうだね。」

「戻つたぞ。」

「早つ！？」

「別に驚かなくともいいだらう・・・。」

「いや、驚くよーてか何その巨大な魚！？」

「マグロだが・・・。」

「マグロつて・・何か本当、凄いねアンタ・・・。」

「早速作るか・・しばらく待つていろフュイト」

「う・・うん。」

「一体どれほどのものが出来るんだらうねえ・・・。」

「楽しみにして待つてよアルフ。」

「さて・・マグロは切り分けて使わない分は冷蔵庫に入れよう・・・。
マグロは軽く醤油で煮付けるかな・・・。」

山菜は・・味噌汁にでもするか・・では始めるか・・。

「まだかねー。」

「 もうすぐだと思つよアルフ。」

「出来たぞ。」

「うわあ・・凄い。」

「 『J』つや 美味しそうだ。」

「 いただきまー!」

「 『J』の煮付け美味しいねぇ。」

「アルフ・・せつせつドックフード食べてなかつたか?」

「 『J』んなの見てたらお腹減っちゃたんだよ。」

「まあ・・多めに作つたし別にいいが・・。」

「 『J』のお味噌汁も美味しい。」

「 せつか・・それは良かつた。」

「 誰かの作つたものつてあつたかいね・・。」

「 ん? 何か言つたか・・フュイト?」

「ううん・・何でもない。」

「やうか・・では俺も食べよ。」

「うして俺達は三人で食事を楽しんだ・・。」

意外にも料理が出来る格闘家（後書き）

フェイト「キルアの料理、美味しかったね。」

アルフ「そうだねフェイト。」

キルア「喜んでくれてなによりだ・・。」

作者「次回もどうか読んでくださいねー。」

石集めを極力する事にした格闘家（前書き）

今回プレシド登場です！

石集めを協力する事にした格闘家

フェイト Sade

「あの・・キルア、ちょっとといいかな？」

「何だ？」

「お願いがあるんだけど・・。」

「う・・キルア、お願い聞いてくれるかな？」

「ジユエルシード集め手伝ってくれる・・？」

「あの石集めか・・分かった手伝おう・・。」

「本当ー。」

「ああ・・本当だ。」

「やつたあ！」

「えへへ・・キルア、手伝ってくれるんだ。

「何を喜んでいるんだいフェイト？」

「キルアがジユエルシード集め手伝ってくれるってー。」

「本当に！確かにキルアは凄まじい力を持つてるから協力していく

れると嬉しいね！」

「うん、だよね。」

「・・・でもキルア本当にいいのかい？」

「何だ？」

「アンタ見たところ旅の最中みたいだけど・・何か目的があるんじゃないかな？」

「あつ。」

確かにキルアは旅の最中みたいだ・・私のお願いで足をひきとめるのは・・。

「その事なら気にしなくていい、目的はあるが・・それは急がなくてはいけない」とではない。」

「本当ー。」

「うつや頼もしい仲間が出来たね。」

えへへ・・キルアが一緒にジュエルシード集めしてくれる・・嬉しいな。

キルア Sade

ジュエルシード・・あの口は明らかにこのよつな少女・・フロイト

が欲しがる物ではない・・では誰が・・

「キルアに協力してもいい事、母さんに報告しなきゃ。」

「フレシアの所に行くのかい・・?」

むつ・・アルフの表情が暗くなつたな・・それに母さんに報告・・
フレシアの所・・そういう事か・・。

「キルア、ちょっと一緒に来てくれる?」

「ああ・・分かつた。」

「じゃあ・・行くよ、次元座標876C4419・・。」

・
転移の魔法か・・ジュエルシードを欲しがつてているのは・・恐りく・・

「『時の庭園』テスターの主の下へ!」

時の庭園・・・

「少し変わつた空間だな・・。」

高次元空間・・と書つ所か・・

「キルア、行くよ。」

「ああ・・分かつた。」

「母さん・・失礼します。」

「何かしら・・フロイト・・あら、その男は?」

何だ・・あの日は・・娘を見る日じゃないぞ・・いや・・冷たいものとは別のものも感じられるな・・

「あの・・ここにいるキルアにジュエルシードを集めを手伝つてもらう事になりました。」

「こんな魔力を全然感じない男に・・?」

「この世界は魔力基準だな・・

「キルアは魔力が無くても凄い強いんだよ!」

「本当にやうかしら・・。」

「なら自分の納得の行く試し方をすればいい・・。」

「そう・・分かつたわ。」

杖を向けて来たな・・魔法か・・

「えつ!・?母さん、待つて!」

「避けられるかしり？」

雷の魔法を奴は放つて来た・・普通に避けられるな・・

ビッ、ビッ

「一歩も動いてないのに無傷…？」

「何を言つている・・ちゃんと避けた・・まあ攻撃を受けたとして
も無傷だが…。」

あれぐらいではな・・

「動いたと言つの・・全く分からなかつた…。」

「どうこれがキルアの実力だよ…」

「…・分かつたわ、フロイトの男に協力してもうござなさい。」

「あつ、ありがとうござります。」

「プレシアのあんなに驚いた顔なんて初めて見たね…。」

「あつ、アルフ！」

アルフ・・お前も初めは驚いていたよな・・。

「じゃあ帰ろうか、キルア。」

「そうだな…。」

「ちょっと待ちなさい……キルア、貴方に話しがあるわ。」

「何だ？」

「フロイトとアルフは部屋から出なさい。」

「はっ、はい。」

「一人きりで話し……奴は俺に何の話しがある……？」

「キルア、質問いいかしら？」

「別にいいが……。」

「貴方、何者？」

「俺はキルア……旅の格闘家だ……。」

「そう言う事を聞いてるんじゃないわ……貴方の力についてよ。」

「あれは修業で培つた力だが?」

「修業ですって……!？」

「それにあの位の動き……俺の知つてゐる世界の奴は大体できたぞ……？」

「貴方……一体どんな世界を生きて來たの……?」

「そこ」まで答える義務は無いな。」

「そり・・・分かつたわ。」

「今度はこちから質問していいか?」

「何?」

「あの壁の向こうから・・死んだ者の匂いがするのは何でだ・・?」

「・・・・!?」

「まあ・・余りにも言いたく無い事なら話題を黙っていていい・・。」

「そり・・ありがと!・・。」

「あと一ついいか?」

「何?」

「お前、病気だろ!・・。」

「・・・!?何で分かるの・・。」

「お前の氣の流れが乱れていたからな・・。」

「人の中に流れる生命エネルギーだ・・。」

「氣?」

「やうなの・・・。」

「お前にこれをやるの・・・。」

俺は袋から薬を取り出し「フレシアに差し出した。

「これは・・・?」

「薬だ・・飲め・・良く効く奴だ。」

「あつ、ありがとづ。」

「病気を治したら、フロイトに対する・・自分で押し殺していく感情に・・素直になるんだな。」

「・・・!?

「では俺はフロイトの所に行かひ・・・。」

フレシア Sadie

あのキルアという男・・何なのまるですべてを見透かしてゐようつ・・。

「フロイトに対する気持ちが・・。」

確かに私の心の中にはあの子を・・フロイトを・・道具ではなく・・もう一人の娘として見ようとした気持ちがあるのかもしけない・・

「だつて・・・」

あの子の私に対する感情が余りにも純粋なのだから・・・

「でも・・・。」

今更考えたつて無駄よね・・・。

「私の体はもう長くない・・・。」

そつと言えばさつきキルアから薬をもらつたわね・・・本当に効くのか
しら・・私の体の病はそう簡単に治るものじゃ・・・。

「騙されたと思って・・・飲んでみるかしら。」

「ゴクン・・・あれ・・・これは・・

「か、体が軽くなつた・・。」

まつ、まさか治つたつて言つのー??

「こんな薬を持つてるなんて・・・キルア・・貴方、本当に何者なの・
・?」

「むつ・・。」

キルア S a d e

「どうしたのキルア？」

「いや・・・何でもない・・・」

「せうへじやあ家に帰れ。」

「わうだな・・・。」

プレシアの気の流れが正常になつた・・・むやんと薬を飲んだよつだ
な・・

「明日からはキルアも一緒にジュークエルシード集めだね、がんばれ。」

「ああ・・・そうだな。」

明日からジュークエルシード集めか・・・フュイトの鳥をむやんと行うね
ばな・・・そんな事を考えながら俺はフュイト達とともに帰路につい
た・・。

石集めを協力する事にした格闘家（後書き）

キルア「次からはジュエルシード集めか・・・」

作者「一応そうですね。」

フェイト「キルアがいるからとつても安心だよー。」

作者「確かにキルアさんチートですからどんなことあつても対応してくれますからね。」

キルア「世の中には俺より強い奴もいる・・・。」

フェイト「謙虚なんだね、キルアは！」

作者「あのお一人さんようしぐれ願いします。」

フェイト「はーー！」

キルア「では次回も・・・」

フェイト「どうかこの小説を見てくださいー。」

欲深き者には破滅のみ。（前書き）

重要なオリキヤ「^ワ登場！」

欲深き者は破滅のみ。

「はああ・・・。」

今キルアは気を高め練り上げていた。己の体が鈍らぬようになり・・・それをかれこれ朝の三時から四時間は続けている。

「ふう・・・これがいいで良いか・・で・・戻るとこよ。」

アルフ Side

「ふあー・・・ん?」

キルアがいないねえ・・・。

「ど」いつたんだい・・トイレかな?」

「トイレじゃ無いぞ。」

「わつー!?

「いつか、」

「急に現れないでおくれよ、心臓に悪いじゃないか!・

「次から『氣』をつけよつ・・・。」

「まつたく・・。

「わい・・朝飯でも作るつか・・。」

「ふあ・・ねはよつ、アルフ、キルア。」

「おはよつ・・フロイト、今から朝飯を作るから待っていてくれ・・。

」

「うん、分かった。」

「食べたらジユエルシード探しだね。」

「そうだな・・。」

このあと私とフェイドはキルアの作った朝じょんを食べた。やつぱり美味しかったね。

キルア Side

「わい・・行くか。」

「そういうやキルアって飛べるのかい?まあアンタなら走つてもついてこれそつだけど・・。」

「飛べるわ・・。」

「魔力もないのにびりせつて飛んでるの?」

「それは気の力だな・・・。」

「気?」

「簡単に言えば生命エネルギーだ・・・。」

「ふーん・・・アンタの強さの秘密はそれかい?」

「まあ・・・そうかな・・・。」

まあ・・・別の力も俺は持っているが・・・それは戦いでは滅多に使わないしな・・・

「氣があ・・・私も使えるかな?」

「修業をすればな・・・。」

まあ・・・フロイトは魔力の資質が高いから氣よりも魔力を高めた方がいいだろうが・・・。

「さて・・・話はこれぐらいにしてジュエルシード集めを開始しよう。」

「うんそうだね。」

俺達はジュエルシードがあるのかまだ探索されてない場所に向かった。

「『I』の辺りはまだ探していないんだよね。」

「では探すとしようつ・・・。」

「あつ、キルア、ジュエルシードに衝撃とか『えちやダメだからね。』

」

「分かつた・・・。」

大方・・暴走でもするのだろうな・・。

「さて・・あの石の力を探つてみるか・・。」

ふむ・・・感じないな・・。

「力が発動してる状態ならすぐ『見つかるのだろうがな・・。』

神経をもつと研ぎ澄ますか・・。

フュイト Side

「んー反応ないなー。」

ジュエルシードが発動していいのか、それともただ無いだけなんか・・

「もつと頑張つて探さないと・・。」

お母さんの為にも・・。

「フロイトちゃんみーつけた・・・プリヒ。」

「えつ、何!?」

「ジユエルシード探してるんでしょ・・・ぼくちん持ってるよ、しかも原作じゃ見つからなかつたのをね・・・プリヒ。」

「・・原作?」

「ジユエルシード欲しいんでしょ、ぼくちんのお嫁になるならあげるよ・・・プリヒ。」

「な、何言つてるのこの人・・。」

何か・・怖い。

「まあ、嫌つて言つてもお嫁にするけどね・・・プリヒ。」

「ひつ、せ・・サンダースマッシュヤーー!」

バチイ!

「やつ、やつた・・?」

「だめじゃないか~未来の旦那様に攻撃しかけちゃ~それにぼくちゃんはURURランクの魔力を持つてるんだからここんなのきかないよ~

「あ・・ああ・・・。」

「ちよっとおしおしなきやいけないかな。」

「ひつ・・・。」

怖い・・助けて・・キルア！

「おこ・・フエイトに向をじょりとじてこる・・。」

「ピヒヒー。」

「キルア！」

キルア Side

ジユノルシードの力を感じて、その場所にフエイトと知らない奴の氣を感じ、何かと思い・・来てみたらこんな事になつてゐとはな・・。

「ピヒヒ・・なんだお前は？」

「それはこいつの台詞だ・・貴様は何者だ・・。」

「ぼくちんは転生者わ。」

転生者・・会うのは一人目だな・・。

「そつか・・転生者か・・。」

「ピヒヒそれよりもお前は誰かつて聞いてんだよ、ぼくちんをおこらせる怖いよ。」

「別に貴様が怒つても怖くはないが……まあ……答へやる、俺はキルアだ……」

「キルアだつて？そんな奴原作にいたかな？」

「キルア、助けに来てくれたんだね、ありがと……」

「ああ……無事のようだな……フュイト。」

「ブヒヒーーお前何フュイトひきんと仲良くなつてんだぶつ殺すぞー。」

「殺れるものならな……。」

「なめやがつてーーーへりたーーーSUVILANKUMA・・・・・

ドガッ。

「ブヒヤフー？ いたいよーお前なにしゃがつたー。」

「普通に殴つただけだが？」

「うそつカーお前がなぐるとこなんか全然みえなかつたぞー。」

「貴様に目視できない速さなだけだらつ……。」

「くそーお前も転生者だつたんだなー『リラコンボール基準の力もら』やがつてーするいぞー！」

「俺は転生者じゃない……。」

「うそつくなー！転生者でもない奴がこんな力、もつてるわけないだろ！」

「それより・・貴様、ジュエルシードを持っているな・・大人しく渡せ・・。」

「嫌にきまつてんだるうがー！くそこいつたうじゅエルシードの力を使つー！」

「えつー！？」

「ピヒヒ・・・ピヒッ、力がみなぎる～。」

「確かに魔力が上がったみたいだな・・。」

「くたばれー！..」

「キルアー！」

「・・。」

シャツ、ドゴオ！

「ブビイー！？」

「ジュエルシードは賣つた・・。」

「簡単に倒しちゃった・・やつぱりキルアは凄いー！」

「さて・・ジユエルシードも一つ手に入つた事だし・・フュイト、アルフを呼んで帰るぞ・・。」

「うん、そうだね。」

俺とフュイトはアルフを呼びに向かつた・・。

キルア SideOUT

「ぐぞー壊れチート転生者め・・・。」

「彼は転生者では無い・・・。」

「…? 誰だ・・・お前。」

「私はある御方の使者だ。」

「神の・・・か?」

「・・・力が欲しくはないか?」

「な・・・に・・・?」

「素晴らしい力をあげよつと言つてゐるんだ、君の知つてゐるドラゴンボールとかいう漫画のキャラとやらの力を遥かに越える力を・・。」

「ほんとかー?」

「本当だとも。」

「どのキャラより強い力だ！？」

「計測では超一星龍とかより遥かに強いな。」

「何！？くれ・・・いますぐ、くれ！」

「焦らなくとも、すぐに渡そう・・・受けとれ！」

ある御方の使者は転生者の胸に光る玉を押し込んだ。

「ブヒッ？ブヒィー！..」

「力は与えてやつたぞ。」

「ミナギ・・ル、チカラガミナギルゾ。」

「・・・（精神が壊れかけているな）二つの精神力はこんなものか・
・・。）」

キルア Side

「むつ・・。」

何だ・・・」の巨大な氣は・・。

「キルア、やつぱアンタ凄いねえ、SSSRランクの魔力のうえにジユエルシードの力使う奴あつさりやつちやうなんてね・・・どうしたんだい？」

「巨大な氣が」ちらに向かってくる・・・」

「何だつて!?」

「キルア・・・」ロス

「な、何だいコイツ。」

「この人・・さつきの転生者とかいう人に少し似てる・・・」

「しかし・・氣の性質は全くの別ものだがな・・・」

「ウガガ・・・シネッ!キルア!」

ブオン!

ガツ。

「ウケトメタ、ダト!?」

「こ」の位では俺を倒せん・・・」

だが・・どうやって、この短い時間の間にこんな力を身に付けたん

だ・・?

「ヴ・・ベボラ・・ガギグヤヂヤベ・・・。

「・・・・・フェイト！アルフ！目を閉じろ！」

「えつ、何で？」

「何で閉じなきやいけないいんだい？」

「いいから早くしろ！」

「この技は・・見られたくないからな・・。

「わ、分かつた・・・。」

「閉じるよ・・・。」

「それでいい・・・。」

「ヴグオアエ！」

「久々に使うな・・この技を・・」

今は殺意の波動なしで使えるとはいえ・・使えば殺意の波動に響く
からな・・。

「くらえ・・・瞬獄殺。」

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガツ！キイン！-

「ガ・・・・ガ・・・・ガ・。」

ボシュツ！

「もう開けていい？」

「ああ・・・。」

「ありや？ セっきの奴は？」

「消滅させた・・・。」

「え・・・殺したの。」

「奴は精神が崩壊して力を暴走させ爆発しそうだつたからな・・・人殺しと言うならそう呼んでも構わん・・・事実そうだからな・・・。」

「ううん・・・言わないよ・・・だつて仕方なかつたんでしょう・・・私たちを守るために・・・。」

「そうだよ、キルア、アンタが気にすることはないよー。」

「そうか・・・」

「だが・・俺が人殺しなのは間違いない・・なぜなら・・

「それよりもキルア、早く帰ろー！」

「そうだよ、帰つてゆっくり休もうじやないか。」

「そりだな・・・。」

それにしても・・・奴はどうやってあんな力を手に入れたんだ・・・。

キルア SideOUT

「ふむ、やはりじつはなつたか・・・それにしてもあの男の力は・・・
あの御方に報告しておおくか・・・。」

この謎の使者は何者なのか・・・そしてあの御方とは・・・？

欲深き者には破滅のみ。（後書き）

作者「いやー、みー」とオリ展開フラグたつたな。」

キルア「大丈夫なのか・・・？」

作者「頑張ります・・・。」

フェイト「それにしても私キルアに全然ついていけないな・・・。」

作者「一応、フェイトもパワーアップさせよつかとは思つたんだけど・。」

フェイト「本当ー。」

作者「でもキルアには結局は全然及ばないと思つたけど。」

フェイト「だよね・・・。」

キルア「人には可能性というものがいる・・・フェイトが俺より強くなる可能性もあるだろ？・・・すぐには無理だが。」

フェイト「そつと言つてくれると嬉しい・・・ありがとうキルア！』

キルア「・・・普通の事を言つただけだが・・・。」

作者「では読者の皆様どうか次回もこの作品を見てください。」

フェイト「次回もどうかよろしくお願ひします！』

キルア「次回もよろしく頼む・・・」

転生者再び！（前書き）

バカな転生者再び！

転生者再び！

キルア Side

「・・・フロイトちょっと昨日、転生者から手に入れたジュエルシー
ドを見せてくれ・・」

「うんこよ?」

「・・・。」

「どうしたの?」

「いや・・何でもない・・。」

「もう?・・そつ言えばこのジュエルシード原作では見つかってな
いジュエルシードとか言つてたな昨日の転生者つて人。」

原作? それにしても・・昨日の違和感は確かに物だったか・・この
ジュエルシード最初に見た物とは、何か違う・・ほとんど同じなの
だが・・。

「では、ジュエルシードは返すぞ。」

「うん。」

「さあ今日も、はりきつてジュエルシード探そつかね。」

「そうだね、アルフ。」

「いや・・・今日は俺だけで探しに行こう・・・。」

「えつ、何で？キルア。」

「フュイトにアルフ、お前らは俺と余つ前から休まずにジュエルシードを探してんんだろ？・・・たまにはゆっくり休め・・・。」

「えつ、でも・・・。」

「分かったよ・・・キルア、アタシとフュイトは今日は休むよ。」

「アルフ！？」

「フュイト確かにキルアの言つ通りだフュイト特にアンタは無茶してるじゃないか。」

「で・・・でも・・・。」

「フュイト、休息も時には重要だ。」

「わつ、分かったよう・・・キルアと一緒に探したかったのに・・・キルアのバカ・・・。」

「何か言つたか？」

「なつ、何でもない！」

「そつか・・朝飯と昼飯は冷蔵庫に作り置きしてあるのがあるからそれを食べてくれ・・夕方までには帰る・・では行って来る。」

「気をつけたね、キルア！」

「ああ・・分かった。」

俺はフェイトがまだ探してないと黙っていた場所に向かった。

「ふむ・・では神経を研ぎ澄まして・・。」

「見つけたぜえ！」

「お前は・・最初に会った転生者。」

「覚えていたか！」

「まあ・・一応・・。」

「ムツカツツクなテツメエ・・。」

「ジユエルシード探しで忙しいんだ・・相手にしてる暇は無い。」

「「」にゃジユエルシードはねえよー原作にこんな場面はなかつたからなあー！」

「原作？」

フェイトが言つことは昨日の転生者も原作がどうとか言つていたらしないな・・情報を引き出すか・・。

「おい、原作ってなんだ・・・？」

「それや！」の世界のアニメだろー！」

「アニメね・・・。」

「もしや・・・」の世界は知り合この科学者が書いた漫画とやらによく似た世界・・・そんな所か・・・？」

「おい・・・原作で見つかってないジュエルシードってのはあるのか？」

「はあ？何言つてんの？全部見つかってんだろお前、にわか転生者なの？」

「俺は転生者じゃない・・・。」

原作ではジュエルシードは全部見つかっている・・か・・では昨日の原作にはないジュエルシードと書つのは一体・・・？」

「転生者じゃないて・・じゃあお前のその力なんだよーー？」

まあこの世界はあくまでもよく似た世界・・原作とやうじと違つ所もあつて当然だな・・

「テツメヒ・・何者だ！？」

「ただの・・旅の格闘家だ。」

「そんな答えで納得できると思つてんのか！パワーアップした俺の力でぶつ・・・。」

トンッ

「情報提供・・礼を言つ・・無駄に戦つのは好みないんでな・・気絶してもひりつ。」

「あ・・・あが。」

「さて・・・」

色々気になる事はあるが・・ジュエルシード探し・・再開だ。

「ふむ・・」の辺りには無によつだな・・・

あれだけ探したのだから間違いないな・・・。

「そろそろ、夕方だ・・帰るか。」

今回の収穫は無しか・・

フェイント Side

「キルア・・そろそろ帰つてくるかな？」

ガチャ

「今戻つたぞ・・・。」

「あつ、お帰りキルア！」

「んで？ジユエルシードは？」

「すまないな・・見つからなかつた・・。」

「きつ、気にしなくていいよー明日、私と一緒に見つければいいんだからー。」

「ねえ・・・フェイト、私とつて事はアタシ抜きかい？」

「あつ、アルフをついう事じやないよー。」

「ごめん・・ちよつと忘れてた。」

「そう・・ならいいんだい。」

「今日はジユエルシードを見つけられなかつた詫びに特別な料理を作ろう・・。」

「特別な料理？」

「何だひづ・・・気になるな。」

「ウヤパマチョスだ。」

「ウヤパマチョス！？」

全然聞いたことないよそれ！？

「それ・・美味しいのかい？」

「ああ・・美味しい。」

キルアがあんなに笑みをこぼすなんて・・どれだけ美味しいんだろう？

「では・・作るのに取り掛かるつ。」

「楽しみにしてるよ、キルア。」

料理中～～～料理終了。

「出来たぞ。」

「凄いこんな見たことない！」

「いいにおいだねえ～いただきますー。」

ガブツ・・もぐもぐ

「どうだ？アルフ。」

「これは！？説明できなきけど美味しい～すつじく美味しい！～」

「じゃあ、私も。」

パク・・ もぐもぐ。

「美味しい・・これすつ」く美味しいよー!」

「そりか・・喜んでくれて何よりだ。」

「これ、 材料何なの?」

「チムウマムとウラパラルにカリマミナグだ。」

「聞いた事ない食材だね?」

「まあ・・貴重だからな。」

「これ・・母さんにも食べさせてあげたいな・・。」

「そりか・・では届けて来よう。」

ブン・・・

「えつ・・・?」

キルアが・・・急に消えた!?

プレシア Side

「・・・・・。」

「どうした、そんなに驚いた顔をして？」

「普通、目の前に人がいきなり表れたら驚かないかしら？」

「ふむ・・それもそうか・・。」

「と・・言つよつぱうやつてこの場所に来たの？ フヨイテは一緒にやないみたいだし。」

「俺の力を使って來た・・このぐらいの移動なら大丈夫なんでな・・。」

「本当・・貴方す”ごいわね・・ああ、それと礼を言わなきゃ・・病氣、調べた所完全に治つていたわ・・ありがとう。」

「別に礼を言われる事はしていない・・。」

「所で何しに來たの？」

「これを渡しに來た。」

「これは・・？」

「これ・・いい匂いはするけど・・。」

「ウヤパマチョスと言つ料理だ。」

「ウヤパマチョス？ 聞いた事ないわね・・で、何でこれを私に渡しに來たの？」

「フュイトがこれをお前に食べさせてあげたいと言つたからだ。」

「…？ そう…。」

「じゃあ…俺はフュイト達の元に帰るぞ…。」

「待つて…。」

「何だ？」

「フュイトに今度一緒に…・・・」飯食べましょうって云えて…。

「…・・・分かった。」

ブン・・

「・・・・言つちやつたわね私・・・以前なら絶対あんな言葉考えられないわ・・・。」

私の心が病がなくなつた事で変わつてゐるのかしら・・・。

「とつあえず頂ひつかしらウヤパマチヨス。」

パク・・もぐもぐ。

「美味しい・・!?

それに何かお肌のツヤが良くなつてる…?

「これは素晴らしいわ・・・。」

キルア Side

「戻つたぞ・・・。」

「ビニに行つてたのキルア?」

「フレシアの所だ。」

「母さんの所に!?」

「フュイトが母さんこの料理食べさせこと言つたからな届けて來た。」

「やつなんだ・・・ありがと!キルア!」

「礼を言われるほどの事ではない・・・それよりも、フュイト・・・近々良い事があると想つや・・・。」

「えつ、何?」

「さて・・・何だらうな?」

全て伝えるよりも・・・こちらの方が分かつた時に嬉しいだろう・・・。

「わい・・俺もウヤパマチヨスを食べるか・・・。」

「あー『メン、キルア。』

「何だ・・アルフ?」

「アンタの分まで食べちゃった・・・ウヤパマチョス。」

「何・・!?

「ごめん・・キルア私は止めたんだけど・・・。」

「いや・・・いい・・俺は別の物を作つて食べよう・・・。」

ウヤパマチョス・・楽しみだつたんだがな・・。

転生者再び！（後書き）

フェイト「ウヤパマチヨス美味しかったね。」

アルフ「本当あの味は忘れられないよ。」

キルア「あの料理が喜んでもらえて何よりだ。」

フェイト「それにしてもキルアは大人だよね、自分の好きな食べ物取られても怒らないもん。」

キルア「そうか……？」

アルフ「アタシだつたら怒るね。」

フェイト「アルフ……自分の怒る事、人にしちゃ駄目だと思つよ……。」

アルフ「う、つ、そうだね……。」

キルア「怒るって、どのくらいだ？」

アルフ「何とつてんだい！……ぐらいかな。」

キルア「何だ、軽い方だな……俺の知ってる奴は食べ物取つたらクレーター何個も作るぐらい暴れるぞ……。」

アルフ「それ……異常だと思つよ……。」

作者「読者の皆様これからむじの小説をどうかよろしくお願いします！」

フュイト「次回も見てね！」

アルフ「よろしく頼むよー！」

キルア「どうか・・この小説を見ててくれ・・。」

白き魔法少女との出会い（前書き）

リリカルなのはの主人公高町なのは登場！

丘の魔法少女との出会い

「キルア・ジュエルシードの反応があったよー。」

「ん? 何処だ?」

「ちょっと遠いけど海鳴つて所。」

「では・・すぐに向かうか・・。」

「アタシは別のジュエルシードを捜索するよ。」

「転生者とか言う奴等がいるからな・・『氣をつけろよ・・。』

「分かつてゐつて。」

キルアとフロイトは海鳴のジュエルシードの反応がある場所に向かった。

「ん? 何だ・・あの辺り、空間が灰色になつてゐるぞ・・。」

「あれは・・・広域結界! ?」

「見た所、辺りの空間との時間軸をずらす結界術か・・。」

「でもこれが発動してるとこは・・・私以外の魔導師がいる。」

「そ、うか……では、ジュエルシードの元に向かうぞ、フェイト。」

「うん。」

キルアとフェイトはジュエルシードの元へと向かう。そしてその場所には巨大な猫と白い魔法少女とフェレットがいた。

「でかい猫だな……。」

ジュエルシードの気配を感じるな……あの猫。

「何だろ? あの人たち?」

「あれは……! ?」

片方の格闘家風の男はともかく、もう一人の少女は僕と同じ世界から来た魔導師! ?まずい! 今のはじや勝てない!

「フェイト、さつさとジュエルシードを回収しよう。」

「うん、そうだね!」

「ちょっと、何を言つてるのあなたたち! ジュエルシードはユーノ君なんだよ!」

「証拠は？」

「えつ、証拠はユーノ君がそう言つたから……。」

「そう言つたからか・・果たしてそれは本当の事なのか？」

「えつ？」

「巨大な力を持つジュエルシードを自分の手に置くための嘘だつたら？」

「なのは、僕は嘘なんか言つてない！」

「・・・私は・・・私はユーノ君を信じる！』

「なのはー」

「信じるか・・迷いのない、いい目をしてるな・・だが・・周りをよく観察する目はまだまだだな。』

「えつ？」

「キルアー！ジュエルシード封印完了したよー。』

「えつー?』

キルアがなのはとユーノと会話している間にフホイトがジュエルシードを封印していた。

「喋つてる間に・・・卑怯だぞ！」

「喋つて、隙だらけなのが悪いんだよ？」

「なにー？」

「貴様は格闘技の試合中に余所見をした選手がやられて、相手の選手に卑怯だと言つたらどう思う？」

「え、それは余所見した方が悪いんじゃ……。」

「そりだ・・余所見した方が悪い・・だからフロイトの行為を卑怯だと言つるのは間違いだ。」

「ぐつ。」

「キルア、あの子・・ジュエルシードいくつか持つてるね。」

「ああ・・だな。」

「茶髪の少女・・なのはとか言つたな大人しくジュエルシードを渡せ・・無駄な争いは好まん。」

「嫌ですー！」これはユーノ君のなんですかー！」

「君たちはジュエルシードを集めて何をしようとしているんだー？」

「・・・知らん。」

「知らんって・・。」

「何をするかは本当に知らん。」

「母さんの研究に必要って事は聞いてるけど・・私も何をするかは知らないや・・。」

「ジュエルシードの危険性が分かっているのか!?」

「いや・・正直、手に終えん物では無いと想つた。」

「魔力も無い人間が何を言つているんだ!」

「魔力が無くてもキルアには氣があるんだよ!..」

「氣?」

「生き物に流れる生命エネルギーだよ!..」

「生命エネルギーって・・それは一体どれほどのものなんだ・・?..」

「別に貴様に見せる必要はない。」

「なつ。」

「それよりもそこのあなた・・ジュエルシードを渡して。」

「嫌です!」

「じゃあ力づくでも。」

フュイトはバルディッシュを構えた。

「……戦うしかないんだね。」

なのはもレイジングハートを構える。

「フュイト。」

「キルアは手出しぜないで……こは私だけやるから。」

「そうか……分かった。」

今二人の魔法少女が激突しそうと・・・

「お、いたいたフュイトちゅわん！」

「えっ、何！？」

「お呼びじゃない、なのはもいるぜー。」

「あなたもしかして・・・転生者！？」

「え、何で分かったの？もしかしてあったことすでにあんの？」

「・・・まあね。」

「てか、そここの格闘家風の男も転生者？」

「これで言つのは何度目だろ？俺は転生者じゃない・・・」「

「ふーん、まあいいや……とつあえず、なのは死んどきなー」の
白い魔王め！」

転生者3はなのはに向かつてアラランクの魔法を放とうとした・
・だが

ガツ

「へ・・こつの間に？」

キルアが転生者3の腕を掴んでいた。

「おー・・貴様、いきなり」のような少女に向かつて白い魔王と言
う発言と殺そうとするのはいけないんじやないか？」

「か、彼いつの間にあの転生者と言う奴の腕を掴んでいたんだ！？」

「あの人、私を助けてくれたの？」

「つぎ、放せ！」

「分かつた・・。

パツ

「たく、いてえじやんよ・・・さて、なのは殺そ。」

「何を勘違いしてるんだ？」

「へ？」

「俺は腕を放しただけで貴様を倒せんとは言つていなーぞ・・・？」

「なんだとー?」

「心配するな・・死なんぐりこの力加減でやつてやる・・・。」

「んだとー。」

「羅刹旋風脚ー！」

ギュオオ！

「ぐばあー!？」

「黒龍拳ー。」

ドガツ、ガツガツガツガツガツ！

「あべしー!？」

「業・波動拳ー。」

ドンッ！

「つばあー。」

「ふう・・久しづりにこれらの技を使つたな、たまには使わんとな
・。」

「何が起こったんだ・・・？」

「技を使ってこいつを倒しただけだ。」

「技を使ったのか！？』

「フュイト、余計なちやちやが入った事だし今日はもう帰らう。・
ジユノルシードを集めていればまたいざれこいつらとは会つだらう。」

「

「うん、そうだね。」

キルアとフュイトは帰ろうとするが・・

「待つてー！」

なのはが呼び止めた。

「何？」

「私、高町なのはーあなたの名前は。」

「・・・」

「フュイト、名を語られたら返すのが礼儀だ。」

「うん・・私はフュイト・テスターロッサ。」

「フュイトちやんだね・・・あのそちらの私を助けてくれた人は・・

？」

「キルアだ。」

「キルア……さんですね。」

なのはは顔を赤らめながらキルアの名を呟いた。

「？・・・行くか、フュイト。」

「・・・。」

「どうした? フュイト。」

「なつ、何でもないよ。」

あのナもしかしてキルアの事……。

「む・・・」の転生者はこんな所に置いておけんから山奥に捨ててくれる。

「えつ?」

「こんな奴をこんな所に放置していくと悪いとか? フュイト。」

「思わない。」

「だりづつ・・。」

そう言つとキルアは転生者を抱えて消えた。

「あつ、消えた！？」

「すぐ戻つてくるよ。」

「戻つて来たぞ。」

「早つ。」

「まだ遅いほうだ・・。」

「あれで遅いのか！？」

ユーノは凄く驚いた。

「じゃ、キルア帰ろ。」

「そりだな。」

キルアとフロイトは家に戻るのだった。

「・・・。」

「なのは？」

「あの人かっこよかつたな・・。」

「え？ 今なんて？ なのは。」

「なつ、何でもないよー。」

一人の少女は恋に芽生えたようだつた・・・。

丘の魔法少女との出会い（後書き）

フュイト「……。」

キルア「フュイトはどうしたんだ？」

作者「乙女には色々あるんですけどキルアもさ。」

キルア「やつが？」

フュイト「（恋のライバルが増えたやつだよ……。）」

作者「（そもそもキルアさん恋愛事、興味無しだけどね……。）」

アルフ「私、出番少なかつた……。」

作者「すいません次回ちゃんとけり出ますよ。」

アルフ「やつ?」

作者「では読者の皆様どうかこの小説をこれからもよろしくお願ひします。」

フュイト「次回もどうか見てください……。」

アルフ「次回もよろしく頼むよ……。」

キルア「こんな小説だが次回もどうか見てくれ。」

溢れる思ひ・・・嬉しい涙（前書き）

フレシアが本当にいい母親って感じです！

溢れる想い・・・嬉しい涙

「プレシアにジュールシードを今どねぐらで集まつたか報告しに行つてみたらいどうだ?」

キルアはフロイトにジュールシード集めの報告書を提案した。

「うーん・・・そうだね行こうか。」

「何言つてるんだいキルア!まだ報告しに行く必要なんかなよー。」

アルフは怒り気味に反対した。

「アルフ・・・でも報告は必要だと黙つよ。」

「でも・・・。」

「とにかくプレシアの所に行くぞ。」

「何でキルアが妙に行く氣があるんだい?」

「・・・。」

プレシアがフロイトと共に「」飯を食べようと黙つていたからなど今は言えんな・・それではサプライズにならんからな・・・。

「少しプレシアに聞きたい事があるだけだ。」

「ふーん……なんかい。」

「じゃあ……行くよ。」

フロイトは転移魔法を展開した……そしてプレシアの元へ。

「よく来たわね……フロイト。」

「？・・・。」

母さん……霧園氣が違つ……？

「それで、何をじて?」

「あつ・・・ジユヘルシード集めの報酬を……。」

「そりゃ……現在、幾つなの?」

「みつ、三つです……。」

「ねべり二じせりぱり怒りられるかな……。」

しかしフロイトの予想とは違つ行動が返つてきた。

「もう……まだ全部には程遠いけどよくなかったわね、次からも

頑張りなさい。」「

「えつー・?」

フェイトは予想とは違つ答へに驚いていた・・・その横でアルフも思わず口を開けて驚いていた・・・。

「フェイト、この前、」飯と一緒に食べまじょつて伝えていたわよね。」「

「え・・・ー?」

プレシアの言葉を聞いたフェイトはもの凄く驚いた顔をした。キルアがちゃんと伝えていないから当然である。

「えつー・?何を驚いた顔をしてるのフェイト・・・私はちゃんとキルアに伝えてつて・・・」「

「えつー・?聞いてないよー!?キルア!。」「

「ん・・伝えたぞ?近々良いことがあると・・・」「

「え?あれがそつだつたのー?」

「キルア、何でちゃんと伝えなかつたのー?」

「そちらの方がフェイトの喜びも大きいだろ?サプライズと言つ奴だ。」「

「・・・意外ね貴方、眞面目そつだからサプライズなどと言つものには興味無さそうなのに・・・。」

「・・・仲間から学んだ事だ。」

「仲間？キルアの仲間ってどんな人達？」

「面白い人達だ・・・。」

あの人達は元気だらうか・・・。

「それよりもプレシア、フェイトと一緒に、ご飯を食べるんだろう。」

「そうだつたわね・・・アルフ、それにキルア貴方達も一緒にどう？」

「へつ！？アタシもかい！？」

「いいのか？」

「だつて貴方達はフェイトの大変な人でしょ？」

「俺は一緒にいた期間が短いが・・・。」

「一緒にいた期間なんて関係ない！キルアは大事な人だよ！」

フェイトは力を込めてそう口にした。

「大事な人か・・・そう言わると嬉しいものだな。」

「えっ！？嬉しつつて・・・」

フェイントは頬を赤く染め、キルアを見た。

「俺もフェイントは大事な人だと思っている・・・」

「え・・・！」

フェイントは今の言葉で顔を真っ赤に染めた・・・しかし・・・

「そう・・・大事な妹の様なものだと思っている。」

「え・・・？」

なんだ・・・妹の様なものか・・・。

フェイントはがっくりと頭を下げた。

「何を落ち込んでいるんだ？フェイント。」

「何でもない！」

「？・・・。」

「・・・クスッ。」

「母さん？」

「いや・・・フェイントの反応を見てたら可笑しくて・・・つい笑っち

やつた。」

「え・・母さん、笑つたの！？」

「だつて貴方がキルアの前で表情を豊かに見えるんだもの・・その貴方の反応が面白くて。」

「もーー・母さん！」

「！」めん！」めん、フュイト。」

フュイトとフレシアは笑いあつていた仲のよい親子のよつこ。。。

「あんなプレシア見た事ないよ。。。

「フュイト・・幸せそつだな。」

「えつ、本当だ・・フュイトす！」くいい顔で笑つてる。。。

「あはは、母さんつたら。」

「つふふ、『めんフュイトでも反応が面白かったのよ。』

二人が笑いあつてる所にキルアが口を出した。

「さて、そろそろ楽しい会話は食事をしながらにしないか？」

「あつ、それもそつね。」

「ねえ、『』飯を食べながらキルアの旅の話をしてよ。」

「それは私も知りたいわ、キルア、是非聞かせてほしいわ。」

「別に構わないが……。」

「母ちゃん、キルアの旅の話し楽しみだね。」

「うふふ、そうね。」

「俺の旅の話しながら盛り上がれるのか?」

「アタシも気になるし盛り上がると想つよ。」

「だといいが……。」

「どうかしら?」

「す、」く美味しそう。」

フェイントは田を輝かせながら言った。

「いただきまー!」

フェイントは田を輝かせながら言った。

テーブルの上にはフレシアの作った手料理が置かれていた。

「どう? フェイト。」

「もぐもぐ・・・うひ、うひ・・グスッ。」

フェイトは急に泣き出した。

「どうしたのフェイト? 口に合わなかつたの? 」

「ううん・・美味しじよ・・・ただ嬉しくて・・とつても嬉しくて、つい涙が出ちゃつただけ・・・。」

「フェイト・・そんなに泣く程、嬉しかつたの・・・ありがとう。」

フレシアはフェイトを優しく抱きしめた。

「おかあさんー! う・・うああん! 」

「フェイト、」めんね・・・んな寂しへせひ・・・。」

私が自分の気持ちに蓋をしたがために・・・。

貴方が私のもう一人の娘・・・アリシアの大切な妹と四つ輪に気づいていたのに気づかないふりをして・・・。

プレゼントは何が欲しいアリシア?

んーとね・・妹が欲しい!

えつー?

だつてそれなら、おかあさんがお仕事が忙しくて家に居なくとも寂しくないもん！

「ごめんねアリシア……今まで貴方の大切な妹に酷い事をしてきて……でもこれからは愛情をちゃんと注ぐわ……そして出来れば貴方も一緒に注いで欲しいわ……アリシア。

「フュイト……」

「なあに母さん？」

「ジユエルシード集め続ける？貴方がしたくないならしなくていいわ。」

「えっ！？」

「だつて危険な事もあるし……。」

「続けるよ……だつて母さんの研究に必要なんじょ？私、母さんの役に立ちたい。」

「フュイト……でも……。」

「それに危険な事なら大丈夫！だつてキルアが守ってくれるもん！」

「フュイト……うんそつね、キルア……フュイトを絶対に守つてね。」

「当然だ。」

フェイトを守る事はすでに心に誓っているからな・・・。

「アンタら話すのもいいけど料理食べなよ。」

「あつ・・・そうだねアルフ。」

「キルアの旅の話を聞かせてもらおつかしく。」

「・・・本当に聞くのか?」

「聞く!」

「聞きたいわ!」

「本当に親子だな・・二人は・・。」

このあとキルアはくたくたになるまで旅の話をさせられた・・・。

溢れる想い・・・嬉しい涙（後書き）

キルア「話すところのは疲れるな・・。」

フェイト「でもキルアの旅の話しつて凄かつたよ！」

アルフ「本当にねえ・・・てかアンタが次元を越える事ができたのも驚いたよ！」

キルア「俺がフレシアの所に一人で行った時点ではづくべきじゃないか？」

アルフ「えつ！？」

フェイト「私、気づいてたよ。」

アルフ「あ、アタシだって気づいてたさ。」

フェイト「せつき驚いたって・・・。」

アルフ「あればジョークだよ。」

キルア「（嘘だな・・・。）」

フェイト「それにしても凄いよね傷付いてもすぐに傷が燃えて直る人がいるなんて。」

キルア「実際、あの回復力は凄まじかった・・。」

作者「あの三人ともそろそろ…。」

フロイト「読者の皆さん次回もこの小説をよろしくお願ひします。」

アルフ「読んでおくれよ!」

キルア「楽しんでもらえれば幸いだ…。」

氣を使える様になりたい金髪の魔法少女（前書き）

フェイトがキルアから氣を学びます！

「氣を使える様になりたい金髪の魔法少女

「ねえ、キルア。」

「何だ? フェイト。」

「私、氣が使える様になりたい。」

「…しかし、フェイトには魔法があるだろ?。」

「でも氣が使える様になりたいの!」

「…分かった…しかしそうして使える様には、なれんぞ。」

「うん…」

「ひじてキルアによるフェイトの氣の修行が始まった。

「…ねえ、キルア。」

「何だ?」

「立て、じつとしてるだけで氣を使える様になるの?。」

フェイトは不安げにキルアに問いかけた。

「いや、ならないが?」

キルアは真顔で使える様にはならないと答えた。

「えつー…じやあ」れの意味は?」

「意味ならある…これは自分の中の氣を感じれる様になるための修行だ。」

「自分の中の氣を…。」

「せう、まずは自分の中の氣を感じられなければ氣を使える様になる事を教えられん。」

「て、事はこれはキルアも通った道なの?」

「まあな…。」

「ふむ…では、まずは三時間…頑張れよフュイト。」

「じやあ頑張るよ!」

「わっ、三時間!…?」

フュイトは三時間もこの体制でいる事に驚いた…しかしこれもキルアが通った道だと頑張る事にした…。

三時間後・・・

「どんな感じだフュイト?」

「自分の中になんかいつポワッとするものを感じる・・・」

「それが氣だ・・それにしてもポワッとか・・感じ方は人それぞれだしな・・。」

「ねえキルア、私もう氣を使える?」

「いや、まだだが?」

「えー、まだなんだ・・。」

「氣はそんなにいきなり使えるものではないからな・・。」

まあ個人差もあるが・・何より戦闘一族なら生まれてからすぐに使えるだろ?がな・・。

「次は昼飯まで組手をしようか。」

「組手?」

「軽く戦うだけさ。」

「あつ、キルアと?」

「 せうだが、こいつは一切攻撃はしない・・するのフュイトだけだ。」

「 そつ、そつなんだ良かつた・・。」

「 しかし、ただ攻撃をするんじゃない・・氣を集中して攻撃するんだ。」

「 氣を集中・・・。」

「 自分の中の氣を攻撃する時の拳に集めたり・・といつ感覺だ。」

「 うん、分かったよキルア。」

「 ひじてキルアとフュイトの組手が始まった!」

「 はああー。」

フュイトは真っ直ぐキルアに向かって拳を突きだした!

パシッ

しかしあつたり止められる。

「 気を全然集中出来てないぞフュイトーあと拳を突きだす時はもつと脇を閉めるんだ!」

「 はつ、はーー。」

「しかし今の突きは中々良かつたぞ。」

「ほつ、本當ー。」

「ああ、まあ次だ！」

「はーー。」

二人の組手が始まつてしばらくたち・・。

「いいぞフェイトー驚きだ！今日だけでここまで氣を集中出来る様になるとはな。」

「そつ、そうなの？」

「それに格闘技の才能もあるかもな・・拳の打ち方や蹴りの放ち方が中々うまくなつて来た。」

「それはキルアがどう直せばいいか教えてくれたから・・。」

「しかしそれを早くにも学んだのは紛れもないフェイトの才能だ。」

「そつ、そつかな・・。」

フェイトは照れながら頬を指でかいた。

「さて・・そもそも組手は終わりにするか。」

「私、まだ続けたいー！」

「せうか、なら続けよつ。」

「いくよー・キルアーはああー！」

ガツ！

「また筋がよくなつたなー！」

「まだまだー！」

ヒコツー・シャツー・ビツー！

「いい動きの流れだー！」

「まだまだ良くなるよー！」

「その調子だフュイトー！」

ヒュツー・ガツー・ドツー！

「いいコソビネーションだー！」

「えへへ・・次いくよー！」

「来いー！」

フュイトはキルアとの組手に夢中になつていた・・特にキルアに誉められるのが嬉しいようだ。

「一人の組手の時間がじばりへ経つとアルフがやつて來た。

「ちよつと一人とも毎の時間はもつ過ぎてゐるよー。アタシはもうお腹ペコペコだよキルア！」

「それは済まなかつたなアルフ。」

「「あんね、ちよつと夢中になつたやつだった。」

「まつたぐ・・。」

「では・・大急ぎで飯を作るか。」

「私もお腹ペコペコだから早く食べたいー。」

「まあ・・あれだけ動けばな・・今日の飯はちよつと豪華にするか。」

「

「わーい、やつたー！」

「次も頑張るー。」

「今日はフュイトが気の鍛練を頑張つたからな・・。」

「つむ、毎日の積み重ねが大事だからな。」

「早く氣を自由自在に使える様になりたいな・・。」

「使える様になるさ・・フュイトなら。」

「キルアにそう言わると嬉しいな。」

「何で俺にそう言わると嬉しいんだ？」

「・・・キルアの鈍感！！」

「何で急に怒つたんだ？ フェイトは。」

「鈍いねえ・・キルアは。」

「感は鋭い方だと思うが・・？」

「戦いとかのはね・・・。」

「・・・？」

「ソレのことは自分で気づくしかないよ。」

「努力しよう・・・いつたい何の感が鈍いんだ・・？」

「はあ・・・」

フェイトも大変な恋をしたねえ・・・と思い悩むアルフだった・・・。

氣を使える様になりたい金髪の魔法少女（後書き）

作者「フェイトが氣を学びましたね・・格闘魔法少女誕生か！？」

フェイト「格闘魔法少女があ・・いいかも！」

キルア「だが、今のフェイトでは氣を使った戦闘はまだ厳しいな。」

フェイト「う・・うだよね・・。」

キルア「フェイト、俺は今のフェイトではと申つただけだぞ。」

フェイト「それって・・成長した私ならできるってこと？？」

キルア「そうだ・・フェイトは才能があるからな。」

フェイト「私・・早く氣を自由自在に使える様に頑張る。」

キルア「魔法の鍛練も怠つてはいけないぞ。」

フェイト「うん分かつてるよ、キルア。」

作者「では読者の皆様こんな小説でしがどうか次回も見てください！」

フェイト「次回もよろしくお願ひします！」

キルア「次回もできれば読んでくれ・・。」

謎の存在・・・

とある場所・・・ある御方の使者はそのある御方に報告をしにきていた。

「？？？様・・・報告したい事があるのですが。」

「報告しなくとも分かりますよ・・・ヒュプノ。」

「御存じでしたか・・・。」

「あの格闘家の事でしょ、う・・・。」

「はは、その通りでござります。」

「あの格闘家と金髪の魔法少女の出逢い・・・それは数奇な運命かもしだせん・・・。」

「リリカルなのはのアニメとやらの原作とは違う方向へ向かわせるからですか？」

「それなら転生者もわほじ変わらないでしょ、う・・・そもそもあの世界はリリカルなのはとやらのアニメと似ているだけ・・・必ずしも原作とやらと同じ道を歩むとは限りません・・・。」

「はは、その通りであります。」

「私達が手を加えたのもありますかね・・・。」

「左様ですね。」

ガシャ、ガシャ。

「おや・・・閃光の騎士ではないですか・・・閃華はどうしたのです？」

「いえ、閃華はまだ？？？様にお会い出来る様な身分ではないかと・・・」

「そうですか・・・私は別に気にはしませんが・・・。」

「ありがたい御言葉、感謝致します・・・？？？様。」

「ところで閃光の騎士・・・私に何か用があるのではないか？」

「私にあのキルアと言つ男に接触する許可をくださいませんか。」

「別に構いませんよ・・・。」

「はは、感謝致します・・・？？？様。」

ガシャ、ガシャ。

「閃光の騎士は、あの格闘家に接触してどうするつもりでしょうか？」

「気にしなくていいでわないですか・・・閃光の騎士が何を行うにしても・・・それもまた彼等にとつて試練なのです・・・。」

「はは、左様ですね。」

「人々が力（光）を求めた先にあるのは破滅の未来か、それとも・・・」

格闘家、温泉旅館へ（前書き）

キルア達が温泉旅館にタイトル通り向かいいます！
あとフェイトがさらにパワーアップ。

格闘家、温泉旅館へ

フェイトの氣の修行を始めてから数日……。

海鳴のとある温泉旅館の近くでジュエルシードの反応が見つかったらしい。

今日その温泉旅館に行く予定だ。

そして現在……俺は早朝からフェイトのある事をしていた。

そのある事とは……。

「いくよー! キルア!」

「ああ……来い! フェイト!」

俺とフェイトは早朝から組手をしていた。

毎日の鍛練……それは強くなるために必要だからな……。

それにしてもフェイトの成長率には本当に驚いたな……。

まさか短期間でここまで成長するとは、確かに才能があるとは思つたが……。

ヒュウ、ガツ。

「……キルア、集中しないでしょ?」

「ん？ すまないな、フェイト。」

「でも、攻撃全然、当たらないんだよね・・・。」

「反射的に体が動いているからな。」

考え方をしている時にあの人達はよくイタズラで攻撃を仕掛けてくれるからな・・・。

そんな経験をしたためか体の無意識のつけの反応が異常に良くなつたんだよな・・・。

「フェイトは、だいぶ氣が大きくなつたからな・・・。」

そろそろ氣弾や武空術を学んでもいいかもしれない・・・。

「フェイト、そろそろ組手は終わるつか。」

「えー、もう終わるの？」

「結構長い時間したと思つが・・・それよりもフェイト、最後に氣弾と武空術を学んでもらひ。」

「氣弾？ 武空術？」

「武空術は俺が飛ぶときに使つてはいるもので、氣弾は自分の中の氣を外に撃ち出すものだ。」

「なるほど。」

「じつは『氣』を使った戦いにおいては基礎となる重要なものだ。」

「はーー。」

「まあ、な『氣』弾からこいつか。」

「『氣』弾……どう放てばここんだらいいへ。」

「自分の掌に『氣』を溜めるより意識するんだ。」

「うん分かった、はああ・・・。」

フロイトは自分の中の『氣』を掌に溜めるより意識した。

「いいぞ、掌に『氣』が集まつて來た。」

「あつー光の玉みたいのが・・・。」

「フロイト、そのまま撃ち出すんだ。」

「うん・・・はあー。」

フロイトは掌から『氣』弾を撃ち出した。

そしてそれは・・キルアに当たった。

ボンッ！

「えつーー。めん、キルアー！」

「いや別にいい、ダメージは無いからな。」「

「それって私の氣弾が弱いって事なのかな・・・。」

自分の氣弾は弱いのかと落ち込んでしまうフェイト。

しかしキルアは言った。

「フェイトの氣弾は氣を学び始めた者にしては中々だぞ、ただ俺がフェイトよりも遙かに強いから効かないんだ。」

「確かにキルア、私よりも遙かに強いよね効かなくて当然か・・・。」

「だがそのうち効くようになるかもしない・・・強さと言つものは常に変わっていく、フェイトが俺より強くなる可能性だつてある・・・そう、しゅ・・・」

「修行を頑張ればでしょ?」

「ふ・・その通りだフェイト。」

「えへへ・・私頑張るよ、いつかはキルアの隣に立てるべからう。」

「いつかは隣にか・・頑張れ、フェイト。」

キルアは軽く笑みを作りフェイトにそう言った。

「あつ・・(キルアのあの顔、反則だよ!あんなに格好いいなんてー)」

「どうした? フロイト。」

「なつ、何でもないよー。」

「アリカ・・ならいいが。」

「ああキルア、次は武空術の修行だしょー!」

「やうだな・・武空術は自分の全身の氣をコントロールする事で、できる術だ。」

「全身の氣をコントロール・・・。」

「フロイトなら、すぐに少し浮く位は出来る様になるはずだ。」

「よーしー頑張るわー!」

このあと少し時間が経ち・・・。

「キルアー飛べる様になつたよ、魔法で飛ぶのとは少し違う感じがする。」

「やうか・・それにしても凄いな、フロイトはここまで自由に僅かな時間で飛べる様になるとは・・・。」

キルアはフロイトの事をまじめ天才だなと心の中で想つのだつた・。

彼もその天才の中でも最上級に値するのだが・・・。

「うむ、これで今日の修行は終わりだ・・温泉旅館に向かう準備をしようかフュイト。」

「うん、そうだねキルア・・でも本当によかつたのかな、温泉旅館の近くにあるジュエルシードの探索をキルアだけに任せて・・。」

「別に気にする事はないフュイト、俺にはジュエルシードの封印が出来ないからな・・探索に駆り出すのは当然だ。」

「早く見つけて戻つて来てね、封印は夜に行つつもりだから・・。」

「分かっている・・早く見つけて戻れば温泉旅館を満喫出来るしな・・。」

「私、キルアと一緒に長く居たいし・・。」

「何か言つたか・・?」

「何でもないよ!それより温泉旅館に行く準備しよう。」

「そうだな。」

俺とフュイトとアルフの三人は温泉旅館に向かつた・・。

「さて・・ジュエルシードを探すか・・。」

「気をつけてね。」

「まつ、アンタなら何があつても大丈夫だろ？ね。」

「ふ・・そこまで信頼されると嬉しいものだな・・では行つてくる。」

「

俺は温泉旅館の近くにあるジュエルシードの力を感じて場所を探つた・・。

ジュエルシードの力を探るのにも慣れたので存外簡単に見つかつた。

「さて・・場所は覚えたし、戻るか。」

俺がジュエルシードを見つけて旅館に戻ると前に会つた事がある高町なのはと言う少女にアルフが絡んでいた。

なのはの側にいる少女らは、なのはの友人だろ？・・。

「何をしている？アルフ。」

「あつ、キルア早かつたねえ・・いやちょっとね、こいつはこの前聞いた高町なのはって言うジュエルシードを集めてるもう一人の魔法少女なんだろ・・だから。」

「ジュエルシード集めから手を引け・・そつ言つていたんだろ？？？」

「その通りさ。」

「だが今、言つ事でもないだつた。・・・」
「アルフは無じてよ。」

「うー、分かつたよ。」

「うーの連れが迷惑をかけて済まなかつたな。」

「あー、はいキルアさん。」

「今は普通にやつへつしてること。・・・。」

「あの・・キルアさん。」

「何だ?」

「フハイテヤモモリで来ていろんですか?」

「ああ・・来ているだ。」

「そうですか・・。」

「だが今はジュエルシーードを儲けて戦うとかは無じだ。」
「はー・・うですね。」

「では部屋に戻るアルフ。」

「分かつたよ、キルア。」

キルアとアルフは自分達の部屋に向かつて行った。

「ねえ、なのはあの人と何話してたの?」

「はあ・・・キルアさん。」

「なのはちやん?」

「おーい、なのは。」

「やつぱり、格好いいなあ・・。」

「・・駄目だこりゃ。」

キルア達の部屋・・・

「フロイト、ジュエルシードのある場所は見つけたぞ。」

「本当ー! ありがとうキルア。」

「あとでちが高町なのはに会つた。」

「・・と書つ事ば。」

「まあ夜に間違いなく対辞するだらうな。」

「うん……だね。」

「さて……俺は少し温泉に浸かって来るか。」

「あつ、私も行く。」

「アタシも行くよ。」

三人は温泉に浸かりに行つた。

「ふう……いい湯だ。」

しかしこいつ温泉に浸かるとあの入達の事を思い出すな……。

悪ふざけで湯に浸かってる時に足に凍結魔法を仕掛けてきたり、電撃を流してきたりか……。

湯の中で急に勝負を始めたりもしていたな……。

女湯……

「アルフ、やめようよ。」

「何でだいフホイト。」

「やつぱり覗くのは良くないよ。」

「でも見たいじゃないかキルアの裸、フロイトだって見たいんだろ
う。」

「確かにあの筋肉の引き締まった体は気になるけど。。。

「だひひ~..」

「でもお。。。

「ちょっと見るだけ、ちょっと見るだけ。」

アルフは覗くのですなが。。

「アルフ、覗くとしているのは分かつていろ。」

「えつー!..?」

「フロイトに悪影響を与える行動をするな。」

「あつ、悪影響だなんて。。」

「覗きは悪影響じゃないのか?」

「あつ、悪影響です!メンナサイ。」

「分かれば良い。」

「ほり、アルフ怒られたでしょ!」

「キルアのケチ。」

「いや、それおかしいよアルフ。」

なんやかんやで三人はのんびり湯に浸かった……。

そして夜・・・ジュークエルシードのある場所へ。

「あそこだ、フュイト。」

「うふ、じゃあ封印を始めるよ・・お願いバルティッシュ。」

『 yes - si - 』

フュイトはジュークエルシードの封印を始めた・・そして封印は無事に成功した。

封印が終了した直後、なのはとゴーノがやってきた。

「へへ、一足遅かったか。」

「また会つたねフュイトちゃん・・。」

「うふ、そうだね。」

「やつぱり戦わなくちゃいけないのかな?」

「ジュークエルシードを集めてる限りはね。」

「話しあいでどうかならないかな?」

「じゃあ、ジユエルシードを全部渡して。」

「それはできないよ。」

「じゃあ戦うしかないね……ジユエルシードを賭けて、お互に一つずつ。」

「やるしかないんだね。」

「バルディッシュ・・今日は私だけで戦つてみたいの・・悪いけど今日は一緒に戦えない、ごめんね。」

フェイトはバルディッシュに謝る・・しかしバルディッシュは別に気にしなくてもいいですよと呟つ。

「ありがとう・・バルディッシュ。」

「デバイス無しで戦う…何を考えているんだ彼女は…?」

「今のフェイトは、デバイス無しでも相当強いんだよ、フレット。」

「

「そんなわけ…でもこれでなのははの勝ちは決まりだ!」

フェイトがデバイス無しと呟つ事でなのははの勝利を確信するユーノ・・しかしその考えは直ぐにひっくり返られる。

「フェイト、前にも言ったが氣と魔力は相当の鍛練がなければ同時に使える反発する…だから氣を使う戦闘をする時は魔力を押さえ

るんだ。」「

「うん、分かつてる。」

「じゃあいへよフュイトちやん。」

「私は負けない！」

フェイトとなのはの二人はお互に戦闘体勢に入った。

「この勝負すぐに終わるね、なのはの勝ちで。」

何故か自信満々にそう発言するコーノ・・・しかしにその言葉にキルアは・・・

「おい・・貴様、フェイトを讃めすぎだ。」

「いや、でもデバイス無しで勝てるわけ・・・

ドガツ！

「がつ。」

「隙が多いよ貴方。」

なのははフェイトの拳を受けて怯んでいた。

「なつ、何だ！？あの子魔法無しで飛んでるー？それに何でただの拳がバリアジャケットを貫通するほどの威力があるんだ！？」

「フェイトの拳はただの拳じゃない気が」もつていてるのや。」

「氣ー？」

何だそれはと驚くユーノ。

しかしそんな驚いているユーノはほつといて、キルアはフェイトと
なのはの戦いをじつと見ていた。

「油断したようだな・・なのは。フェイトがデバイスを使わないと
言つ事で心に隙ができたか。」

冷静に分析を行うキルア。

このままいけばフェイトが勝つな・・そうキルアは考えているが、
なのはが何か逆転の秘策を思いついたりしてフェイトが劣勢に陥る
可能性もあるかもしれない・・そもそも考えていた。

ユーノとは違いキルアは楽観的にはならなかつた。

「くっ、デイバインシューター！」

なのはは桜色の魔力弾を放つた、しかし・・・。

「これぐらいなら、氣を集中すれば弾けるー。」

フェイトは手に氣を集中し魔力弾を全て弾いた。

「なつー？なのはの魔力弾を素手で弾くなんてそんなバカなー？」

「くっ、ならこれなりだつ！」

なのははレイジングハートに魔力を溜めている、大技で来るようだ。

「砲撃魔法がくる！？・・・なら今考えた技だけこれで・・・」

フェイトは両手を後ろにやり頭上後方に巨大な光の玉を作りだした。

「む・・あれは。」

「何だ！？あの光の玉は！？」

「フェイト・・氣弾の撃ち方を教えたばかりだと言つのに・・あれ
ほどの技を生み出すとは・・凄いぞフェイト。」

「いくよフェイトちゃん・・ディバインバスター！..」

ドウッ！

なのはは桜色の直射砲撃魔法、ディバインバスターを放つた！

そしてフェイトも・・

「食らえーーー！」

ポヒュウ！

フェイトは頭上後方に作った巨大な光の玉を両手を前に突きだし放つた！

そしてその光の玉は「ティバインバスター」を撃ち破りなのはに直撃した。

「ドーン！」

「さやあー？」

「なのはー！」

「勝負・・ありだな。」

フェイトとの戦いはフェイトの勝利によって幕を閉じた。

「さあ、ジュエルシードを出しちゃ。」

「私は・・・まだ・・。」

なのはが何か言おうとした時、レイジングハートからジュエルシードが出てきた。

「れつ、レイジングハートーー？」

「主人思いの優しい子だね。」

フェイトはレイジングハートから出でてきたジュエルシードを手にいた。

キルアは戦いが完全に終了したのを感じるとなのはに近づいた。

「お前…なのに何をするつもつだ!」

「これ飲め…。」

キルアは丸薬の様な物を取り出すとなのはに渡した。

「は、はい。」

ゴクン。

「あ、あれ?」

なのはがキルアから渡された薬を飲むとなのはの傷が全て癒えた。

「彼は何をしたんだ!?!?」

「回復薬を飲ませただけだ。」

「こんなに一瞬で傷が治る薬があるのか!?!?」

「なのは、出来れば他のジュエルシードも渡して欲しいんだが…。」

「

「それは出来ません…・・・ジュエルシードはコーノ君のだから。」

「せつか…だがジュエルシードを集めている限りはまた激突する事になるわ。」

「キルアさんは何でジュエルシードを集めているんですか?..」

「フュイトと約束したからだ。」

「ちうですか・・・一つ聞いていいですか?」

「何だ?」

「フュイトちゃんの田・・・最初に会った時と変わっている気がするんですけど・・。」

「確かに変わったな・・・まあ、フュイトだけでは無いが・・。」

変わったのはプレシアもだな・・。

「キルアさんには助けられた事があるけどジュエルシード集めは譲
れません。」

「それはこいつらもだ・・。」

「キルア!何でそいつの傷を治しちゃたのセー!」

「いいんだよアルフ、私もあるの子が傷ついたままなのは嫌だし・・。」

「

「フュイト、アルフ・・旅館に戻って寝るか。」

「こんな戦いのあとに僕らと同じ旅館にいるのか!?」

「一つ言つておくれレット・・・俺の知つてゐるある人の言葉に
こんな言葉がある。」

「何？」

「それはそれ、これはこれだから関係ねーよ・・・だ。」

「わ、訳がわからなこよ。」

「なのほも戻つてゆつべつ休むとこ。」

「あつ、はい。」

「それにしてもフロイト、戦いの中で生み出したあの技は中々凄かつたぞ。」

「そつ、そつかな。」

「で・・技名は何なんだい？フロイト。」

「技名か・・・考えてないや。」

「そのうちおかけばいいださう・・・。」

「やうだよ。」

「それにしても・・・。」

フロイトの成長は楽しみだ・・そうキルアは考えながらフロイトとアルフとともに温泉旅館に戻るのだった。

格闘家、温泉旅館へ（後書き）

作者「いやーフェイト強くなつたな・・もうこれは時空管理局のあいつより強いんじやないかな。」

フェイト「時空管理局のあいつ？」

作者「こいつの話しだから気にしないで。」

キルア「それにしても氣を使つた初めての実戦であそこまで戦えるとは・・本当に凄いなフェイト。」

フェイト「キルアの指導が良かつたからだよ。」

アルフ「それにしてもあのフレッシュは物事を甘く見すぎじゃないかい？」

作者「確かにそうかもしませんね。」

フェイト「魔力と氣を同時に使えたるどんな感じ何だらつ・・・？」

作者「（感想であった・・・ネギまのタカミチのあの技・・・いいかもしけない。）」

アルフ「んじゃそろそろ。」

フェイト「読者の皆様これからもこの小説をお願いしますー。」

アルフ「次も見ておくれよー。」

キルア「次回もよろしく頼む・・・」

格闘家、遊園地に行く（前書き）

今回は再びほのぼの系！

格闘家、遊園地に行く

「フェイト、遊園地に行こいつか。」

「えつ！？そ、それってデートの・・・」

「アルフとプレシアも連れてな。」

「あっ、何だそう言う事か・・・。」

家族で行こうって事かと少しガッカリするフェイト。

「何だ遊園地は嫌か？フェイト。それではこのもらった遊園地のチケットも無駄になってしまうな・・・。」

「全然嫌じやないよキルア！・・・あれ？そう言えばキルア何で遊園地のチケットを持つているの？」

「これはだな一人で外に修行に行つた帰りに人を助けたら礼に貰えたんだ。」

「そりなんだ。」

「礼などいらなかつたんだが押し付けられてしまつてな・・・。」

「でも母さんと一緒に遊園地か・・・楽しみだな。」

キルアと二人きりも良かつたけどね・・・。

「フレシアを呼んでくれ。」

ビッシュ・ビッシュ

「連れて来た。」

「フロイト、ジュノルシード集めで怪我はしないっ。ちやんと寝れ
てる?」

「だ、大丈夫だよ母ちゃん。」

「本当、凄い変わりよつだねえフレシアは。」

前までは考えられないあのフレシアの姿だと想つアルフ。

「セー・・遊園地に行く準備をしよう。」

キルアは遊園地で食べる皿のために弁当を作り始めた。

「おや? どんな弁当にするんだい?」

アルフはどんな弁当になるんだろうとキルアが弁当作るのを見に來
た。

「アルフ、見たら楽しみが減るぞ。」

「それもそうだね。」

キルアに楽しみが減ると想われアルフは弁当作りを見るのをやめた。

「キルア、私もお弁当作るのを手伝つわ。」

「やうか、プレシアよろしく頼む。」

遊園地に持つていいくお弁当はぜひやらキルアとプレシアの合宿になるようだ。

「キルアとプレシア、仲良く料理してるねえ・・あれが夫婦の姿つて奴かね。」

「えつー? キルアと母さんは年が離れているから夫婦はないと思うよー?」

「でも年離れた夫婦もいるし・・・。」

「でもキルアと母さんが夫婦とか絶対ダメ!」

「力を込めて言つねえ・・・そんなにキルアが好きかい?」

「えつー? あつ・・・。」

顔を真っ赤にするフエイト。

「隠さなくとも分かるよ同じ男を好きになつたんだから。」

「えつー? 同じ男つて・・・。」

「アタシもキルアの事が好きになつたのさ、強いし頼りがいがあるしね。」

「うふ・・あと、ひとつでも優しい。」

「もうだね。」

「恋のライバルだねアルフ。」

「これは譲れないよフェイト・・・てかライバルはプレシアもだね。」

「

「えつー!？」

「プレシアも明らかにキルアに好意を抱いているからね。」

「かつ、母さんもキルアが好きだなんて・・・。」

「準備出来たぞ、フロイトにアルフ、遊園地に向かうぞ。」

「フロイト、お弁当頑張ったから楽しみにしてね。」

「う、うん・・母さん。」

「どうしたのフロイト?」

「なつ、何でもないよー。」

「それなら良いけど・・・。」

「それよつも早く行け!」

キルア達は遊園地向かつた。

遊園地・・

「うわあ・・色々な物がいっぱいだ。」

目を輝かせながらフェイトは遊園地のアトラクションを見ていた。

「うふふ、見てるだけで楽しそうね。」

「そうだな。」

それにしてもこりこり場所に来ると異常なまでに頑丈な人と小さい動物を思い出すな・・・。

「ねえあれ乗る?」

「メリー・ゴー・ランドか。」

「良いわね乗りましょう。」

キルア達はメリー・ゴー・ランドに乗った。

「ふむ・・始めて乗るがこんな感じか。」

「何かある意味新鮮な気分ね。」

「馬さんが上下に動く。」

「ん~アタシには合わないね。」

キルア達はメリー・ゴーランドを乗り終えた。

「楽しかったね。」

「次は何をするのフュイト?」

「ん~・・・じゃあ、あれに乗る!」

フュイトが指差したのは「一ヒーカップだった。

「一カップに一人までの様だな。」

「じゃあ私キルアと乗る!」

「するによフュイト!アタシだつてキルアと一緒に乗りたいよ!」

「何故、一人は俺とそんなに乗りたいんだ・・・?」

「こういつ時はジャンケンで決めればいいんじゃないの?」

フレシアがそう提案する。

「そうだね、母さん。じゃあ行くよアルフ。」

「分かったよフュイト。」

「待つて私も一緒にいいかしら。」

「母さんもキルアと一緒に乗りたいの？」

「いや、私はちよつとジャンケンがしてみたくなっただけ。。。」

しかしフレシアも心の中ではキルアと一緒に乗りたいと思っている。

「・・・いこよ母さんも一緒にやれり。」

「行くよジャンケン・・・」

「「「ポンッ。」「」」

フェイト グー

プレシア グー

アルフ パー

「やったーーアタシの勝ちだーー！」

「まつ、負けた・・・。」

「残念ね・・・。」

「アルフ、何故そこまで喜ぶんだ？」

「全くキルアは鈍感だねえ・・・。」

「ん? 何か言つたか?」

「何でもないよ、まあ乗ろい。」

「一ヒーカップに乗るキルア達。

「母さんもつと回すよ。」

「ふふ、まだまだ」れぐらに平氣ね。」

「おひおひおひんどん回すよーー!キルアー!」

凄い早さで「一ヒーカップを回すアルフ、しかしキルアは凄く平氣そつな顔をしている。

「風が気持ち良いな・・。」

「これだけ回したのに平氣な顔してるー?・・・と聞いつ何かアタシが氣持ち悪くなつて来た・・・うふつ。」

「どうしたアルフ? 気分が悪くなつたか?」

「うん・・・ちょっと・・・。」

アルフは「一ヒーカップから降つたあとキルアに背中を擦つてもらつた。

「気分は良くなつたか?」

「うん・・・何とか。」

「調子に乗つて回しちゃあからだよアルフ。」

「反省してるよ・・・。」

「次のアトラクションに行つたらそのあと両御飯にしよう。」

「やうだねキルア。」

「次は何処に行くの? フロイト。」

「お化け屋敷!」

「お化け屋敷・・分かったわ行きましょ。」

お化け屋敷に向かうキルア達・・・しかしセイである人物と鉢合わせする。

「あつー! ?」

「どうした、なのは知り合いか?」

「あつ、貴女は高町なのはー! ?」

「なのはでいいよフロイトちやん。」

「あつ、あつ・・・なのは貴女もここに来ていたんだ・・・。」

「うん、お兄ちゃんと一緒に・・・その初めて見る女の人はフロイトちやんのお母さん?」

「うん・・・そうだよ。」

「優しそうだね。」

「私の母さんだもん。」

「ねえ、キルアあの子が例の？」

「ああ、わうだ。」

「本当にフュイトと変わらない年ぐらこの子ね。」

「だがジュエルシードを集めると云ひ意思は強い。」

「やうなの・・・私はフュイトにジュエルシードを集めさせるためにあの子を傷付けさせてるのね・・・。」

「フレシア・・・。」

「今更こんな風に善人ぶつてもね・・・私はフュイトに貴方と出会い前は酷い事をした悪女なのに・・・。」

「自分に罪悪感を感じる人間と感じない人間は違う。」

「え? どう言つ事?」

「自分に罪悪感を感じるなら自分の中の罪に向かい合つている・・・しかし感じないなら目を背けている・・・お前は向かい合つている人間だらう? フレシア。」

「そう言われると少し胸が楽になるわ・・・私はちゃんと向かい合つて居るのね・・・。」

「ああ……それにジユノルシードはなのは達には手に余るかもしれん……。」

「えつ？ それはどういつ……。」

「あのキルアさん、一緒にお化け屋敷に入りませんか？」

「別に俺は構わないが……フロイトは？」

「私も別に構わないよ。」

「そうか。」

「待て、俺が構うぞ胴着を着た男と一緒に、なのはをお化け屋敷に入らせるか！」

「お兄ちやん、何で胴着を着てたら駄目なのー。」

「いや、胴着を着てなくとも駄目だが胴着を私服にしている変な奴を妹と一緒にお化け屋敷に入らせる兄はいない！！

「お兄ちやんー！ めんなさいキルアさん。お兄ちやんが失礼な事を言つて。」

「いや、別に気にしてない。」

「キルアさんは心が広いですね。」

頬を赤く染めながらキルアにそういつなのは……それになのは兄が反応した。

「はつーまさか・・・妹をたぶらかしたなクソ野郎ーー！」

キルアに襲いかかるのはの兄・・・しかし。

チヨン。

「がはつー？」

キルアが軽く拳を当てるとき絶した。

「ちやんと軽くやつたんだが・・・氣絶したな・・・済まないな、な
のは。」

「いや、いいんです・・・お兄ちやんには少しのままでいてもら
います。」

「放つて置いていいのか？」

「はい、いいんです。」

笑顔ながら怒氣を込めた声でなのはは言つた。

「じゃあお化け屋敷に入るか。」

キルア達は氣絶したなのはの兄を放つて置いてお化け屋敷に入った。
・。

「む・・意外にリアルだな。」

「アンタらしさアトラクションだよ。」

「ん？」

キルアが声のした方に行くと・・・

「ヴァアア・・・オマエノタマシイヨコセ。」

スッゴいリアルなゾンビの作りものが出てきた。

「うわ、気持ち悪つ。」

フヨイト、なのは、ブレシアが叫んでアルフはゾンビの見た目を気持ち悪がつた。

「ふ・・これぐらい何とも無いな・・・それよりもフュイト、プレシア、なのはそろそろ離れてくれないか?」

フェイト、プレシア、なのはは怖がつてキルアに抱きついていた。

「あつ、じめん。」

「すみません。キルアさん。」

「こ、怖かつた。」

「怖がつたふりして抱きつぐ、その手があつたとはー。」

「何を言つてゐるんだ? アルフ。」

「『君の話だから氣にしないでこよ。』

「やうか・・とりあえず先に進もう、じゃないとお化け屋敷から出られなじや?」

「『君まで怖いなんて・・・早く出たい・・・。』

「あつ・・・怖がつた時に思つゝやつて君握つちやつた・・・。

「

「（ひつ、酷いよなのは・・・）」

「『君のお化け屋敷何でこんなにクオリティ高いのよ・・・。』

「『こんなもの本物に比べたら全然大したことねなこと。』

「キルア、アンタ本物にあつた事あるのかい・・・。
「まあな。」

「ほつ、本物つてどれくらい怖いんだろ・・・。」

「かつ、考へない方がいいわ・・・フュイト。」

キルア達は怯えながらもお化け屋敷を進む（キルアとアルフは怯えていない。）。

「そ、そろそろ終わりかしら・・・。

תְּבִ�ָה - בְּנֵי

「このお化け屋敷本当に怖かつたよ・・・。」

「リリに来るまでにユーノ君何回も握り閉めちゃつたし……。」

（何か・・・うつすらと川が見えてきた・・・）

「早くお腹食べたい。」

出口を前に気を抜く者達・・・しかし大抵お化け屋敷と言つものは安心しきつた時に一番怖いものがくる。

ガシツ

「あれ？足を何かが掴んでる……。」

アモイドが恐る恐る陛下を見るも・・・

冥界ノ世界ニ才不元

ウヌケテケテキモモサイイミ

地面からソンビが大量にでてきた。

走つて逃げるキルアとアルフを除いた三人。

「・・・そんなに怖いか？これ？」

「アタシは平氣だね。」

「俺達も出るか・・・。」

「やうだね。」

キルアとアルフも二人に続いて出ていった。

「はあ・・・はあ・・・怖かった。」

「心臓に悪いわ・・・。」

「ゴーノ君、握り締めたまま走つちやつた・・・。」

「（・・・それに乗ればいいんだね・・・。）（・・・。）

「わて・・・やるやうにしてよしひが。」

「どんなお弁当かね。」

「お弁当じきの作ったの母さん？」

「見てからのお楽しみよ。」

「お弁当かあ・・・。」

「多めに作ったから、なのはも一緒に食べるか?」

「良いんですか!??」

「フロイト、構わないか?食事は大勢で食べる方が美味しいと思つが?」

「うん、別に良いよ。」

「ありがとう!フロイトちやん!」

「さて・・・では、場所を移動しよう。」

キルア達はお弁当を食べれる場所に移動した。

「うわあ、凄く美味しそう!..」

「どれが母さんが作つたのでどれがキルアが作つたのだろ?..」

「食べて、当てるみて。」

「うん! いただきます!..」

パクッ・・モグモグ。

「これは・・・母さんが作つたの?」

「いや、それは俺が作つたのだ。」

「酷いわフュイト、私が作ったの分からなかつたの・・・。」

「えつー・?」・・・

「冗談よ、フュイト。」

「えつー・? もう歯を立つたらー。」

「ふふふ、じめんねフュイト。」

「何かいいですね・・・。」うひうひ。

「そうだな・・・。」

バクバクモグモグ

「うん、本当に美味しいねこれ。」

「俺達も食べようか・・・。」

「そうですねキルアさん・・・あのちょっとこいですか?」

「ん? 何だ?」

「あーん。」

なのはは箸におかずを掘んでキルアに向けていた。

「何だ・・・?」

「あの口を開けてください……。」

「口を…」

「はい、口…」

「ちよつと、何せつてゐるのー! キルアにあーんだなんて私がやりたい

が…」

「フード、口から凄い事が出でるよ。」

「あーんつて何だ…?」

「フードとなのませで、ひと悶着あつたが基本食事は楽しんで終つた。

「おぬあつたといひやることある。」

「いえ、別に良いのよ。」

「ではわざわざ私はお兄ちゃんの所に戻ります。」

「せうか……所でそのフードレシピをからべつたらしくてねんだが…」

「あー、本当だ? ゴー! 疲れて寝あつたのかな?」

「…………。」

「フハイトやせん。」

「何?」

「次のジコホールシード渡さないよ。」

「私だつて譲れない。」

「じゅあね、フハイトやせん。」

「・・・うそ、なのは。」

「フハイト、次は何処へ行へ?」

「次はね・・・」

「このあとキルア達は色々なアトラクションに行つた・・・そして最後に・・・。

「観覧車からみる風景つて空を飛んでみる風景とは違ひね母さん。」

「そうね・・・フハイト。」

「母・・・さん。」

「じつしたのフハイトへ。」

「眠ぐ・・・なつぢやつた・・・。」

そう言つてフレシアの膝に頭を置くフェイト。

「遊び疲れたのね・・・。」

「ああ・・・アルフもだな・・・。」

アルフはキルアの膝の上に寝ていた。

「二人も寝た事だし今貴方にある事を話すわ・・・。」「何だ・・・？」

「フェイトは、クローンなの・・・私の娘アリシアの・・・。」

「そうか・・・。」

「私は最初はこの子をアリシアの変わりとして産み出した・・・でもこの子はアリシアの変わりにはならなかつた・・・。」

「それは当然だ・・・この世に全く同じ人間など産まればしない・・・。」

「そう・・・その通りよ・・・なのに私はあの子を失敗作などと思つてしまつた・・・あの子は失敗作などではなくフェイトとと言つもう一人の娘だつたのに・・・。」

「今はちゃんとフェイトを愛せているだらう・・・。」「貴方のお陰よ全部。」

「大した事はしていない・・・。」

「それと私がジュエルシーードを集める理由・・・それはアリシアを生き返らせるためよ・・・。」

「生き返らせるか・・・。」

「貴方は生命の理に反していふって言つ?」

「いや・・・大切な者を生き返らせたいと思つのは普通だらう・・・。」

「そう・・・普通なのね・・・。」

「ただその為に他の誰かを犠牲にするのはいかんがな。」

「そうね・・・私は貴方と会うまではフェイトを犠牲にしてたわね。
・・道具として扱っていたんだもの・・・。」

「今は違うだろ?」

「ええ・・・そうね・・・。」

「所で一つ良いか?」

「何?」

「ジュエルシードを全部集めて使つたら・・・全部壊して良いか?」「
「ロストロギアを壊すつて・・・貴方にならできそうねキルア・・・
ええ良いわ。」「了承確かにもらつたぞ・・・そろそろ下に着くな。
・・プレシアはフェイトを抱えてくれ・・・俺はアルフを抱える。
「ええ・・・分かつたわ。」

こつじてキルア達の一日は終わりを告げた・・・。

格闘家、遊園地に行く（後書き）

作者「今回の後書きはキルアさんとフレシアさんに出てもらいます。」

フレシア「キルアと一緒にだなんて……緊張するわ……。」

キルア「そんなに緊張する事は無いと思つが……。」

フレシア「今日の話、何か間を全然開けてない所があつたけどあれは……？」

作者「あー……あれば、お一人の会話にスピード感を持たせようとしたんでわざとです。」

キルア「読みにくい氣もするが……。」

作者「んー……そうですねでもあれでいきたかったんです。」

フレシア「それにしてもロストロギアを壊すだなんて……キルアは考える事が違うのね……。」

キルア「俺の知っているあの人の中の殆どはこんなもんぶつ壊すつて言つと思つが……。」

フレシア「貴方の世界が変わってるのね……。」

キルア「否定は出来んな……。」

作者「ではそろそろお一人さんお願ひします。」

フレシア「読者の皆様どつか」の小説をこれからもよろしくお願ひ致します。」

キルア「次回もどうか読んでくれ。」

金髪の魔法少女、新しい技を手に入れる（前書き）

作者「更新が遅くなつて申し訳ありません。早く更新できるよう頑張りたいと思います。」

金髪の魔法少女、新しい技を手に入れる

「キルア！私、新しい技が欲しい！」

フェイントはキルアに突然そんな事を言い出した。

「新しい技？フェイントには、あの時なのはを倒した技があるからまだいらないんじゃないかな？」

「気を使った技がフォトンバスターだけなのは、なんか寂しいよー。あの時の技の名前はフォトンバスターに決まっていたようだ。

「しかし、まずは一つの技の質を高めるのが重要なんだが・・・」「でも一つだけじゃバリエーションが少なすぎるよー。」

「ふむ・・・理あるな。」

「だから技を教えて！」

「分かった・・・しかし氣を使った技だけではなく魔法も教えよう。」

「キルア、魔法使えないのに魔法教えられるの？」

確かにキルアは魔法が使えない、そのキルアが魔法を教える事が出来るのだろうかフェイントが疑問を持つのは当然である。

「確かに俺は魔法を使えない・・・だが教える事は出来る。「え？何で？」

キルアの教える事が出来ると云つはつきりとした発言にフェイントは

頭に？マークを浮かべる。

「魔導書を持つているからな・・・使えなくとも理論などは理解している。」

「キルア、魔導書持つてたの！？」

驚くフェイト、当然だろうキルアは格闘家だ。
魔導書は普通に考えて必要ない。

「旅に出る時の餞別に貰ったんだ。」

「何で魔導書をあげたんだろう？」

フェイトがそう考えるのも仕方ない、だってキルアは格闘家だもの。

「戦いにおいてあらゆる技術を知るのは大事・・・この本を読めば
その知識が役に立つ事もあるだろうと言つ事でな。」

「なるほど魔法への対処法を知ると言つ事においては格闘家にも魔
導書は役に立つと言つ事何だね。」

「ああ、そう言つ事だ・・・だが。」

キルアは若干表情を崩し苦笑いをした。

「この本に書いてある魔法・・・高等な物が多くてな、中々この本
に書いてある魔法に通ずる魔法を使う相手には巡り会わなかつた。
「え・・・？それって・・・。」

「この本の知識は余り役立つてないな・・・魔法は経験で殆ど対処
法を覚えてしまつたな・・・。
「そつ、そつなんだ・・・。」

フェイトはこの魔導書を書いた人は高レベルの魔導士何だらうけど、自分基準で魔法のレベルを考えていたのかな?と思った。

「ちなみに……」これは初級偏だ。」

「ええっ!?

初級偏でキルアに高等とか言わせる事が出来るの!?と驚くフェイト。

「この魔導書の中からフェイトに合ひ魔法を覚えてもらひ。「覚えられるかなあ……。」

フェイトは魔法を覚えられるか不安になつた……それはそうだろう、初級偏なのに高等とか言われれば。

「フェイトなら修得出来るや。」

「そ、そつかな。」

キルアに自分なら修得出来ると言われ嬉しくなるフェイト。

「さて……誰にも迷惑のかけない場所に移動して修行を始めよう。」「うん、頑張るよー。」

キルア達は誰にも迷惑のかからない場所に移動した。

「アルフ、置いてきて良かったのかな……。」

「修行に巻き込んだら不味いだろ?……。」

キルアはアルフが修行の余波に巻き込まれたら不味いとフェイトに言つ。

「確かにそうかも・・・。」

「アルフはどびつきり美味しい飯を作つてやると言つたら機嫌を直したから気にするな。」

アルフは結構単純な事で機嫌を直していた。

「さあ、魔法を教えよう。」

「どんな魔法かな?」

フェイトはどんな魔法か期待を膨らませる。

「フェイトは雷系の魔法が得意だから当然、雷系の魔法だ。
「どんな雷系の魔法なの?」

フェイトはキルアに聞いてみる。

「天空より現れし雷の龍が敵を喰らう魔法だ。」

「それ本当に初級魔法!?」

確かに初級に思えない響きがする。

「・・・そうだな確かに初級魔法には思えないな。」

「これ書いた人どんな感覚何だろ?・・・。」

フェイトは改めてこの魔導書を書いた人は凄いけど感覚ずれてるな
と思った。

「悪い人では無いらしいんだがな・・・。」「でも、ずれている人だね・・・。」

「ああ・・・そうだな。」

「それで、その魔法どんな風に使うの?」

「詠唱を唱え指に魔力を集め魔方陣を描く事で発動するんだ。」「な、何かやつぱり難しそうだね・・・。」

フェイントは本当に出来るか不安になる・・・。

「とりあえず一回やってみよう・・・。ただ。」「ただ?」

「一回で魔力が空になるかもしれん・・・。」「そ、そつなの?」

フェイントは一回で魔力が空になると云つキルアの言葉に少し動搖した。

「『』の魔導書の中では魔力消費は一応少ない部類何だが・・・。「書いた人の基準が高かったんだよね・・・。」

これ書いた人、本当にどんな凄い魔導士何だろ?と思つフェイント。

「まあ・・・とりあえず俺に向かつて放つてみてくれ。」「い、いいの?」

「ああ構わない、詠唱と魔方陣の描く動きをするから真似てみてく
れ。」

「うん、分かつたよ。」

キルアは詠唱と魔方陣を描く動きをする。

「天空に集まれ雷よ・・・」

「天空に集まれ雷よ・・・」

「雷よ荒ぶる龍の形となりて・・・」

「雷よ荒ぶる龍の形となりて・・・」

「我が前に立ちはだかる敵を喰らわん・・・」

「我が前に立ちはだかる敵を喰らわん・・・」

「ドーラゴボルティアス！」

「ドーラゴボルティアス！」

カツ！-ドツツガツーン！-ゴロゴロ！バチツ-バチツ-ピシャアア
アツ！-バリツ！バリツ-グオオオオオ！-

天空より現れし雷の龍がキルアに直撃した。

「きつ、キルア！？大丈夫！？」

フェイトは魔法が直撃したキルアを心配する。

「大丈夫だ、フェイト。」

キルアはピンピンしていた。

「よつ、良かつた・・・。」

「それよりもフェイント、魔力はまだ残ってるか？」

「キルアの言つた通り空になっちゃたみたい・・・。」

フェイントは疲れた顔でそう言つた。

「そつか・・少し休むか？」

「休まなくとも大丈夫！次は氣を使つた技を教えてくれるんじょ。」

「

フェイントはやる気満々の表情になりキルアにそう言つた。

「そつか・・分かつた次は氣を使つた技だが知り合いのある技を教えよう。」

「キルアの技は教えてくれないの？」

フェイントは少し残念そうにキルアに言つた。

「俺の技は人にそう簡単に教えてはいけない技だからな・・・。」

何せ暗殺拳をベースに強化された技だからな・・・とキルアは思う。

「そつ何だ・・・キルアの技、覚えたかつたな・・・。」

「今から教える技もかなりの技だから落ち込むなフェイント。」

キルアはそうフェイントに言つがフェイントが落ち込んでる理由は技が凄いかどうかではなくキルアの技を覚えられないと言つ所である。

「今から教える技はブレイクジャベリンと言つ技だ。」

「ブレイクジャベリン・・・。」

「気を練り上げ、投げ槍を作り相手に投げつける技だ。」

「なるほど・・・。」

「今から俺が気を練り上げ投げ槍を作るからそれを良く見るんだ。」

「分かつたよ。」

「さて・・始めるか。」

キルアは気を練り上げ自分の手の上に投げ槍を作る。

「凄い気の練りだ・・・」の技を作った人この形状に合った気の練りをしてたんだ・・・。

「分かるかフェイト、さすがだな。」

「これを私がするんだ・・・頑張らなきやー。」

意氣込むフェイト。

「俺が見て駄目な所があつたら指摘するからさしそくやってみるんだ・・・フェイト、失敗を恐れるな。」

「うん、分かつてる。」

フェイトはブレイクジャベリンを修得する為に気を練り上げる。

「はああ・・・。」

「フェイト早く練り上げようとするのはいいが雑になつてはいけない・・・まずはゆっくりでいいんだ。」

「はいー。」

フェイトはキルアに言われゆつくり丁寧に気を練り上げる。

「ふむ・・いい感じだ。」

「そ、そう？」

「ああ・・ブレイクジャベリンが出来たら試しに俺に投げてみるんだ威力を確かめたいからな。」

「うん、分かったよ。」

フェイントは気を練り上げブレイクジャベリンを完成させた。

「や、やっと出来た・・・行くよ！キルア！」

「さあ来い！」

「ブレイクジャベリン！」

ビュオ！カツ！

「ふむ・・中々良い威力だぞフェイント。」

「でもキルアには全然効いてないけどね・・・。」

「それは、まだまだレベルが違うから仕方ないと思うが？」

「でもいつかはキルアに効くぐらい強くなるもんね！」

「ふ・・そうだなフェイント・・・次はもう少し気の練りを早くして今ぐらいのを作つて貰おうか。」

「うん、頑張る！」

フェイントのブレイクジャベリン修得の修行はまだ続いた・・・そして。

「これなら実戦でも大体いけるな。」

「そ、そうかな・・・。」

フェイントはブレイクジャベリンを実戦でいけるぐらいレベルまで修得したが疲労が溜まつていいようだった。

「フュイト、そろそろ帰るか？」

「うん・・・あとちょっとこの技に一工夫を加えたひ。」

「工夫？何か思いついたのか？」

「キルア、気も性質を変えて雷の力とか加えられるんじゃないかな？」

「まあ・・・確かに性質を変化させる事は出来ない事はないな。」

実際、キルアの技にも気の性質を変化させた技はある。

「じゃあ私やってみるよー。」

「挑戦するのは良い事だな。」

「はああ・・・。」

バチツ、バチツ。

フュイトは気を練り上げる・・・するとフュイトの作る気の投げ槍が雷を纏う。

「こきなりやつてのけるのか・・・凄いなフュイト。」

「で、出来た・・・やってみたら本当に出来た!」

フュイトは気の性質を変化させる事が出来て嬉しそうにする。

「あ・・・あれ?」

フュイトは急にふりうとして倒れてしまうが・・・キルアがフュイトを抱き抱えた。

「少し無理をしそうだな・・・。」

「うーめんキルア・・・。」

「謝る事は無い・・・よく頑張ったなフェイト・・・あれはもう別の技と言つてもいいものになつていていたぞ・・・。」

「そ、そつかな・・・じゃあ名前はボルテックジャベリンにしようかな。」

「良いんぢやないか?さあ・・・そろそろ帰ろうフェイト。」

「うん・・・でも魔法の方は一応一回成功したけど実戦ぢや不安だな・・・一回しか使えないし。」

「魔力向上の基礎練を頑張れば何回も使えるようになるさ・・・それに、あれはまだフェイトには早かつたかもしれんしな・・・。」

「そうだね・・・でもすぐに使えるようになるからね!」

「その調子だフェイト・・・さあ帰ろう。」

キルアはフェイトをお姫様抱っこで抱える。

「きり、キルア!?」

「フェイトは気と魔力を殆ど使い果たして飛べないから抱えて飛ぼうと思つたんだが・・・嫌だつたか?」

「い、嫌ぢやないよ!」

「そつか・・・ならちゃんと掘まるんだぞ。」

「う、うん・・・。」

フェイトは顔を赤くしながらキルアにしつかり掘まつた。

「(キルアにお姫様抱っこ)されてる・・・幸せだな・・・。」

そんな事を考えながらフェイトはキルアと共に帰路についた・・・。

フェイトは今日の一日で大きな成長を果たしたのだった・・・。

金髪の魔法少女、新しい技を手に入れる（後書き）

フェイド「私、新しい魔法と氣を使つた技を修得したよー！」

アルフ「おめでとうフェイド！」

作者「フェイドは順調に強くなつてますね。」

キルア「せうだな、これから成長も楽しみだ。」

アルフ「作者、更新遅くない？」
作者「はい、今回アタシ出番なかつた
！」

作者「更新遅かつたのは、色々あつて携帯を使えなかつたんです。。」

キルア「出番の方はスルーか。。。

作者「更新早く出来るように頑張りたい。」

アルフ「出番はー？」

作者「次回はちゃんとありますよ（たぶん。。。。）。」

フェイド「読者の皆様今回もこの小説を読んでくれてありがとうございます！」

キルア「出来れば次回も読んでくれ。」

作者「今後もこの小説をよろしくお願ひします！」

金髪の魔法少女と白き魔法少女 つきあわせた実力の差（前書き）

日付が変わる前に更新できなかつた・・・。

金髪の魔法少女と白き魔法少女 つきすきた実力の差

キルア達は今、ジュエルシードがある場所に来ていた。

「街中にあるとはな・・・ジュエルシード。」

「強制発動をさせて見つけようか?」

フェイトの出した提案にキルアは答える。

「いや、そんな事をしなくてもジュエルシードの力の感覚は覚えたから見つけられる。」

「アンタの探知能力つてどんだけ凄いんだい。」

キルアの探知能力に脱帽するアルフ。

「慣れれば簡単なものだ・・さて・・見つけてくるか。」

キルアはジュエルシードを探し向かう。

「キルアって本当に凄いねえ。」

「そうだね。」

フェイトとアルフが少し喋つてる間にキルアは戻ってきた。

「見つけたぞ・・ジュエルシードのある場所に連いてくれ。」

キルアはフェイトとアルフを街中のジュエルシードがある場所に連れて行く。

「あ、あつた。」

「フェイト、封印を始めてくれ。」

「うん。」

フェイトはバルティッシュを起動させジュエルシーードを封印した。

「封印終了!」

「やつたね、フェイト!」「だが・・・恐らく今回も。」

キルアは彼女達が来るだろうな・・・と考えた。

「くつ、また先を越されたか!」

「フェイトちゃん・・・。」

キルアの考え方通り、なのはとユーノがやつて来た。

「今回もジュエルシーードはアタシ達が頂いたよ!」「本当に君達はジュエルシーードがどれだけ危険な物か分かっているのか!」

「こちらにも集める理由があるからな危険でも譲れんな。」

「何だと!?!」

「ユーノ君、ちょっと落ち着こう。」

興奮気味のユーノを落ち着かせるなのは。

「フェイトちゃん・・・やつぱり・・・。」

「ジュエルシーードは渡せないよ。」

「そう・・・じゃあ、ジュエルシーードを賭けて戦うんだね・・・。」「なのは・・・ジュエルシーードを戦わずに渡して。」

「えつ!?!」

フェイトの発言に驚く、なのは。

「なのははと私じゃ実力の差がありすぎる・・・無駄に傷付けたくないんだ。」

「何を言つているんだあの子はー?なのはは前よりも実力が上がってるんだ、そう簡単に負けるものか!」

ユーノは成長したなのはの実力ならフェイトに勝てると思つている。

「フェイトちゃん・・・いくら何でも私を讃めすぎじゃないかな・・・」

「本当の事を言つただけだよ。」

フェイトは、はつきりとそれを語る。

「なら成長した私の力を見てみてよー。」

なのははレイジングハートを構える。

「ティ・・・あれフェイトちゃんはー?」

なのはは田の前にいたフェイトが急に居なくなつた事に驚く。

なのはは直ぐに後ろに振り向く。

「後ろだよ。」

「えつー?」

「かつ、彼女いつの間にー?」

「フュイト、すつ」早くくなつたねえ。」

「だが・・まだフュイトは本気じやない。」

「何だつて!?」

キルアの発言に驚くユーノ。

「そつ、そんなん・・・私あんなに練習頑張つたのに・・・。
「私だつて日々成長しているんだ・・・キルアのおかげでね。
「貴方は彼女に一体どんな訓練をつけたんだ!?」
「普通に修行しただけだ。」

キルアはユーノの質問にそつ答える。

「普通にって・・・。」

「まあ普通つて言つても師匠のレベルの桁が違うナビね。」

アルフがユーノに向かつてそつ言つ。

「フュイトの飲み込みが早かつただけさ・・・。」

「いや、実際私がここまで強くなれたのはキルアのおかげだよ。
「ふ・・そう言つてもうらえると嬉しいな・・・。」

フュイトの言葉にキルアは軽く微笑む。

「私、フュイトちゃんといんなに差が出来てたんだ・・・。」

フュイトとの差に落ち込むのは。

「まあ、キルアがフュイトの師匠何だから、仕方ない事だよ。」

落ち込むなのはに對してそつまつアルフ。

「貴方は一体何者だ！」

ユーノはキルアに対しそう問う。

「ただの旅の格闘家だ。」

キルアはそう答える。

「あの子の成長率はただの旅の格闘家が師についただけじゃ説明がつかない！」

「本当に俺はただの旅の格闘家さ……。」

ユーノにあくまでただの旅の格闘家と言つキルア。

「フュイトちゃん……今日は私の負けだね。」

「なのはー？」

なのはが血ら敗北を認めた事に驚くユーノ。

「今回は私の負け……でも次は負けないよー私、もっともっと強くなるー！」

なのははフュイトに対しそう言つた。

「強くならないとあなたの良い事だと悪いよ……なのは、ジュエル
シードを。」「負けちやつたし渡せなきやね……。」

「負けちやつたし渡せなきやね……。」

「なのはー!?」

「ごめんねゴーノ君……でもこれは決めてた事だから。」そう言ってなのははフェイトにジュエルシードを渡そうとするが……。

「ひやつぼーい! 原作通りの場所になのはとフェイトがいるぜー……・原作にやいねー奴もいるぞ? 転生者か?」

転生者が現れた。

「転生者ー?」

「なに? なに? 転生者の事じつてこのへじや、やつぱりこの奴転生者?」

キルアを指差しかつて転生者。

「俺は転生者ではない。」

「じゃあ何なんだよおめえ……でも、まつ、俺のなのはとフェイ

トと一緒にいるから死にな。」

「キルア、私に戦わせて。」

急にキルアに向かつて魔法を放とつとする転生者……キルアは軽く氣絶させて終わらせるか……と考えるが。

フェイトがキルアにさつ言つた。

「フェイト?」

「私、自分の力が転生者相手に通じるか確かめたいの。」

「……やうか、やってみると良いフェイト。」

「うん!」

「おこおこフロイトちやん君、俺に勝てる気でいるの?俺、原作キャラに絶対負けない強さよ?」

転生者はフロイトに向かってそう言った。

「原作キャラとよく分かんないけど……私を嘗めないでね?」

「嘗めてんのはそつ・・・」

ヒコツ!バキッ!

フロイトは転生者に素早い蹴りを放った。

「うぎやあー? いってえ!?. 魔法障壁軽く破りやがつただと・・・こんな強さ聞いてねーぞ!?!?」

フロイトの強さに流れる転生者。

「・・・簡単に勝てちやつかも・・・ 瞬間だ油断しちゃ戦いは何が起るか分からないんだから。」

フロイトは油断する事なく転生者と戦つ

「ぐつ、ぐわあーぐらえー俺のスーパー・ウルトラ・ジャー・ジャスな魔法を!-!」

転生者はうるさい魔法を放つた・・・だが。

「私の新技いくよー・ボルテックジャベリン!」

フロイトは雷の槍を氣で作り出し転生者に投げつけた。

「うー、こんな技フュイトが使えるなんてしらねーぞー!?」

驚く転生者・・・そして技が当たつた。

カツ！バリツ！バババツ！ピシャアツ！

「つわやぐぼげええええーーー？」

転生者はフュイトにあつたり倒された。

「手加減したから死んでないよね?」

「ああ・・ちゃんと生きてるな。」

「よつ、良かつた・・・。」

死んでなくて良かつたと安心するフュイト。

さすがにあれな転生者と言えど殺すのは不味いと言つ事だらけ。

「あれぐらいの相手では今のフュイトの相手にはならんな・・・。」

「えへへ・・・ありがとうキルア。」

自分を評価してくれたキルアにお礼を言つフュイト。

「思つた事を言つただけ何だがな・・・。」

お礼を言われる事だらうか?と考えるキルア。

「キルア、帰ろつか。」

「フュイトー?あの子からジュエルシードを渡してもらわないでいいのかい!?」

「うん、今日は転生者が突然横に入つて来たしね……それになのはとほまた会つことになるよ。」

フュイトはまた会つことになるから今回はいことアルフに言へ。

「フュイトがやつたら仕方ないねえ……。」

「ふ・・では帰るとするか。」

キルア達は「」の場から去つて行つた。

「……行つたね彼等。」

「私、強くならなきや……。」

強くなるといつもことをなのはは胸に強く秘めるのだった……。

金髪の魔法少女と白き魔法少女 つきすきた実力の差（後書き）

作者「転生者が見事にフェイトに破れました！」

フェイト「新技で決める事が出来たよ！」

キルア「技、実戦でちゃんと出来てたなフェイトさすがだ。」

フェイト「えへへ。」

アルフ「ねえ作者、アタシ全然戦つてないねえ・・・。」

作者「そのうち戦闘描写があるよ・・・では皆やんやうやる。」

フェイト「読者の皆様、今回もこの小説を読んでくれてありがとうございます！」

アルフ「次回もちゃんと読んでおくれよ！」

キルア「これからもこの小説をよろしく頼む。」

作者「では読者の皆様また次回で！」

気になる格闘家の悲しき日（前編）

今回はキルアの出番がすくないです。

気になる格闘家の悲しい目

「ねえ、キルア……時々悲しきな目をしてない?」

「いや……別にしていない……それよりも今日は一人で修行に出かける……御飯の用意はしておいたから暖めて食べててくれ。」

そう言ってキルアは外に出かけた。

「フェイト? 何でいきなりあんな事をキルアに聞いたんだい?」

「うん……キルア時々凄く悲しい目をするんだ……本当に悲しそうな目を……。」

フェイトは暗い表情でそう言った。

「何か過去にあったのかねえ……あつ! ? キルアいつも持ち歩いてる袋を持って行つてないね。」

「あつ、本当だ。」

アルフはキルアの荷物袋を見て閃いた。

「中を見ちゃおつよフェイト、過去の事とか分かるんじゃないかい?」

「駄目だよーそんな事をしちゃー見られたくないものだつてあるかもしれないし……。」

フェイトは怒り氣味にアルフにそう言った。

「で、でも気になるじゃないか……フェイトだって本当は気にならんじやないかい?」

「さ、気になるけど……。」

「恥ずかしい物何で入っちゃいなによ、だから見ちゃねつよフロイト。」

「で、でもお……。」

フロイトの自分の中の見たいと言つ悪魔と見たら駄目と言つ天使が戦っていた……しかしフロイトが悩んでいたばかり……。

「もう開けちゃったよ。」

「ア、アルフ！？」

「何が入ってんだろうねえ……あ、何か変わった石が出てきたね、でもこれはキルアの過去は関係ないねえ……。」

「アルフ止めようよ……。」

「もう開けちゃったしアタシは最後まで突っ走るー！」

力を込めてアルフはそんな事を言つがやつてる事は結構あれな事である。

「えーと次は……薬袋かこれも関係ないね。」

「アルフ～。」

フロイトはおひおひしてアルフを見る。

「フロイトもチラチラ目をやつてるじゃないか……ここまで来たら一緒に見よつよ、好きな男の過去を知るのはアドバンテージだと思つよ。」

けどやつている行動はディスアドバンテージである。

「……キルアには内緒だよ？」

「分かつてゐるつて。」

フェイトの心の中の天使と悪魔の戦いは悪魔の勝ちのようだつた。

「次は……おっ、何だらうねこのケース？」

「開けてみよひ。」

「そうだね……手紙とペンダントが入つてるよ。」

「手紙を読むのは、まずいよね……。」

誰かがキルアに贈つた手紙を読むのはさすがにまずいと思つフェイト。

「アタシは読む……。」

意気込むアルフ、人の手紙を読むのに氣合を入れるのはおかしいと思つ。

「えーと何々……。」

『キルアさんへ……長い修行の旅に出ると聞きました。

私は忙しく見送る事が出来ないのでこの手紙とペンダントを贈ります』

「これ女からの贈りものだ！？」

「い、恋人なのかな……？」

「続きを読むよ！」

アルフは手紙の続きを読む。

『キルアさん、このペンダントは身に着けると安らぐ闇の力を込め

ておきました。

疲れた時に身に着けてください。

でもキルアさんが身に着ける事は少なそうですね。

キルアさんは強いですから。

キルアさん修行頑張つてください！

そしてできればたまに帰つて来てくださいね私達の世界へ。

皆もきつと喜びます！

アルマより『

「こりゃ恋人つて言つよつ友達だね・・・。」

「何かこの人に悪い事をしちやつたよね・・・。勝手にキルアに贈つた手紙読んじやつたし・・・。」

「ちゃんと手紙はケースに戻さなきゃね・・・。」

アルフは手紙をケースにちゃんと戻した。

「キルアの過去にに繋がる物は、まだ出ないねえ・・・。」

「もしかしてキルアの荷物には入つてないんじやないかな？キルアの過去に繋がる物。」

「そうなのかなえ・・・んつ？これは魔導書初級編？」

「あつ、それキルアが私に魔法を教える時に使つた奴だ。」

「中級編と上級編つてのもあるね・・・でも上級編は封印が、かかつてゐみたいだ。」

「上級つて言うぐらいだからとつても凄い魔法何だろつね。」

「だらうねえ・・・んつ？未完編つて言つのも出てきたよ・・・封

印の強さが異常だね・・・。」

「危険な魔法が書いてあるのかな？」

「でも未完つて書いてあるけどね。」

「未完・・・気になるよね。」

魔導書未完編に興味を示すフェイト・・・人間見たらいけないものに興味を示すものである。

「まあ、今はこれよりもキルアの過去に繋がる物だよ。」

「そうだね、アルフ。」

フェイト達は再びキルアの過去に繋がる物を探し始める。

「ん」と・・・またケースだ。」

「また手紙と何かが入ってるのかな?」

「開けよ。」

ケースを開けるアルフ、中には手紙と茶色い籠手（ストリートファイターのリュウが着けてる物と見た目同じ）が入っていた。

「手紙を読むよ。」

「ごめんなさい手紙を書いた人とキルア・・・。」

アルフは手紙を読む。

『キルア、長い修行の旅に出るんだってな俺はちつとな修行が忙しくて見送りに行けねーんだ。』

悪いな俺とお前は兄弟みたいなものなのにな。』

「キルアの兄弟みたいな人だつて。」

「何か感じのいい人みたいだね。」

『お前もう籠持つてるけどよ予備として贈つとくぜ、それにしても長い修行の旅か・・・お前と手合わせする機会も結構なくなっち

まうんだな。

まつ、永久に会えねーわけじゃないかキルア修行頑張れよー・スゲー
強くなれよ！俺もスゲー強くなるからな！
俺達の世界にたまには帰つて来い！絶対だ！

剣舞より

『

「何か勢いのある手紙だったね。」

「うん、そうだね字に凄い力込もつてるし。」

「この手紙もちゃんとケースに戻さないとね。」

アルフは手紙をケースに戻した。

「にしてもキルアの過去に繋がる物まだ出ないねえ・・・。

「やつぱりないのかな？」

「いや、まだアタシは諦めないよ。」

そういつてアルフはキルアの荷物を再び探る。

「おっ？これは・・・絶対関係ないね・・・。」

アルフが取り出した物は『天才科学者発明セット』と言つ物だった。

「これ中身何が入つてるんだろう？」

「開けようー・・・あれ？開かない？」

「あつ、ここパスワード入力つて書いてあるよ。」

「じゃあこれを開けるのは諦めよつ。」

アルフは開けるのを簡単に諦めた。

「さあ次探そう。」

「もう止めた方が・・・」

「何言つてんだい、フェイター。」「まだきたらとんでもないよ。」

「つづ・・分かつたよ。」

「次は何が出るかな・・・これは布切れ?」

「キルアは旅の格闘家何だから野宿の時に自分にかける物じゃないかな?」

「多分そうだろうね、他には何か・・・これはマフラーだ。」

「字が縫い込まれてるね。」

その縫い込まれてる字は。

「『お兄ちゃん大好き 桃花』。」

「キルア、妹が居るんだね。」

「一生懸命さがにじみでる気持ちの込もったマフラーだね。」

「うん、このマフラーとつても暖かそう。」

「これで荷物は最後みたいだね。」

「アルフ・・・キルアが帰つて来たら謝るわ。」

「うん・・・そうしようかフェイト。」

二人はキルアが帰つてくるのを待つた・・・キルアに謝る為に。

そしてキルアが帰つて來た。

「ただいま・・・フェイトにアルフどうした?」

キルアは二人の様子が変な事が気になつた。

「『めんなさい!』

「『めんよー!』

二人は泣きながらキルアに謝った。

「一体どうしたんだ?」

「キルアの袋の中の荷物勝手に見ちゃったの・・・。」

「どうしてだ?」

「キルアが時々悲しそうな目をして・・・過去に何かあつたのかなつて気になつて・・・『ごめんなさい!』

「最初に見ようつて言つたのはアタシ何だ・・・だから叱るならアタシだけにしておくれよ!」

「別に俺は怒つていないぞ?・・・過去に囚われてる俺が悪いんだ氣にするな・・・だが他人の荷物は勝手に見てはいかんぞ。」

「過去に囚われてる・・・?じゃあやつぱりキルアは過去に・・・

「すまない・・・それは聞かないでくれ。」

「うん・・・キルアが話したくないなら。」

「ねえキルア、アルマと剣舞つてどんな人だい?。」

アルフは手紙の一人が気になつてキルアに聞いてみる。

「ああ・・・一人の事が、アルマは一言で言えば心の優しい分け隔てなく人を見る女性だな・・・剣舞は俺の兄弟みたいなもので強さを求める日々鍛練を怠らない奴だ、どちらも俺の大切な仲間だ。」

「大切な仲間・・・。」

フェイトはキルアのその言葉を聞きキルアが一人を大事に思つてゐんだなと思つた。

「そう言えばキルア妹がいるんじゃないかい?その子はどんな子だい?」

アルフはマフラーの事からキルアに妹が居ると思いついた。

「ああ・・妹は優しく兄思いの良い子だ・・・。」

「良い子何だねえ。」

「キルアの仲間や妹会つてみたいな。」

「会つたら仲良くできると思うぞ・・・良い人達だからな。」

「今日はキルアの仲間の人達の事にふれる事ができたね。」

「そうだねフェイト。」

「二人とも俺だから怒らなかつたが人の物を勝手に見ては駄目だぞ。」

「は、反省します・・・。」

「アタシも、もうしないよ・・・。」

「ふ・・それなら良い。」

フェイトとアルフはキルアの荷物を勝手に見たがキルアの心が広かつた為に怒られなかつた。

人の荷物は勝手に見てはいけないと言つ事をフェイトとアルフは心中に深く刻むのだった・・・。

気になる格闘家の悲しい目（後書き）

作者「やつと小説書けたよ・・・携帯使えない時が多くて大変だ・・・」

フェイト「今回キルア主人公なのに出番が少ないよね。」

アルフ「今日はアタシとフェイトがメインだったねえ。」

キルア「アルマに剣舞・・・元気にしてるだろうか。」

作者「してるでしょ・・・あの一人強いし・・・そろそろ皆さんよろしくお願ひします！。」

フェイト「読者の皆様今回もこの小説を読んでくれてありがとうございます！」

アルフ「今回はキルアの出番が少かつたけど次回は普通に多田だよ！」

キルア「次回もこの小説をよろしく頼む。」

作者「この小説をこれからもよろしくお願ひします。」

接触、閃光の騎士！（前書き）

謎の存在に出た二人が登場！

接触、閃光の騎士！

キルア達は現在とある公園に来ていた。

この場所にジュエルシードの反応があつたからである・・・そしてジュエルシードは現在木の中に入り魔物となっていた。

「グオオオオ！」

「木の魔物か・・・」

「あの木の中にジュエルシードがあるね。」

「倒せば出でくるよ。」

「分かった、じゃあ倒す。」

ビッ、バキイツ！

キルアは一瞬で木の魔物を倒した。

すると倒された木の中からジュエルシードが出てきた。

「フェイト、封印を。」

「うん分かったよキルア。」

フェイトはバルディッシュを起動させジュエルシードを封印した。

「キルアが居るとあつさりおわるねえ・・・。」

「そうだね、アルフ。」

「来るな・・・。」

キルアはまた今回もなのは達が来ると考えていた。

そして考え方通りなのは達はやつて來た。

「くそつ、また先を越されたか！」

「フェイトちゃん・・・。」

「なのは・・・。」

二人の少女はお互に田を合わせデバイスを構える。

「フェイトちゃん・・・私強くなつたよ。」

「なのは・・・うん確かにね、でも私だつて強くなつてるよ。」

「なのはは死に物狂いで訓練をしたんだ！君に負けるものか！」

「・・・。」

キルアはなのはをじつと見ていた。

「おい、フェレット死に物狂いとはあくまで合間に休みを加えてか
？」

「いや、休みなしで・・・僕は少し休んだ方が良いと言つたけどこれぐらいしなきゃフェイトちゃんには勝てないってなのはが言ったから・・・でもなのははあの通り気合に充分疲れなんて感じさせないよ！」

「指導者失格だな・・・なのはは確実にフェイトに負ける・・・普通の奴が見ればとても疲れてるよう見えないだろうが・・・俺には分かるなのは体に尋常じゃない疲労が溜まっている・・・そのまま戦わせるのは危険だ。」

「えつ！？何だつて！？」

「最悪体に障害が残るかもしけん・・・。」

「と、止めないと！？」

しかしフュイトとなのはは既にぶつかり合ひとじていた。

「（止めるー）」

ガツ。

キルアはフュイトとなのはがぶつかり合ひの止めた。

「キルア、どうして邪魔するのー？」

「キルアさん邪魔しないでくださいー。」

「なのはー！何故そんな体で戦おうとした下手をしたら体に障害が残る所たつたぞー！」

キルアは真剣になのはを叱る。

「わ、私はこの通り元気ですよ。。。。」

「俺の目は誤魔化せん！なのはお前の体には尋常じゃない疲労が溜まっている！」

「それでキルアは戦いを止めたんだ。。。。」

「フュイト、今回の戦いは。。。。」

「うん。。。無しにするよ。」

「キルアさんは何でそこまでして戦いを止めるんですか。。。私はいくら頑張つてもフュイトちゃんに勝てない。。。つまり弱いからですか？」

「キルアは貴女の事を心配してー！」

「なのは。。。お前は家族の事を考えたか？」

「家族。。。の事？」

「お前が無理をした結果、体に障害を残し苦しむお前の姿を見る家族の姿をー！」

「あつ。。。ー？」

「フロイトに圧倒的に差をつけられて悔しかったんだらう・・・だが無理をしてまで訓練をし体を壊しかけてどうする・・・家族が悲しむじゃないか・・・。」

「わ、私・・・私は・・・。」

なのは自分のした事を悔いて涙を流しかけた時・・・

「僕は時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。
君達、ジユエルシードの件に関わってるね事情を聞かせてもらおう
か。」

空気を読まないでクロノとか言つ奴が現れた。

そしてそのクロノは・・・

ヒュン！バキヤッ！

突然、ぶつ飛ばされた。

「がつ！？」

「一人の少女が己の行動を悔い家族の為に涙を流そうとする時にいきなり割って入るとは・・・なんたる愚。」

「左様で」ござりますね閃光の騎士様。」

「きつ、君達は何者だ！？」

「貴様ごとくに名乗る必要はないＫＹ。」

「閃華ＫＹとは何だ？」

「黒くて弱いと言つ意味の言葉でござります。」

「空氣読めないと言う意味だろー！」

自分で言つてしまつたクロノ。

「何？空気を読めないと言う意味だったのか。」

「そう言えればそんなもう一つの意味もありました。」

「一つの意味がある言葉だったのか。」

「明らかにそこの君がつけ加えただろ！」

クロノは閃華を指差しそう言つ。

「言いがかりをつけたな。」

「閃華に自分の無知を擦り付けるとは・・・ますます愚だな。」

閃光の騎士は閃華の事を信じきっていた・・・黒くて弱いは閃華がつけ加えたものなのだが・・・。

閃光の騎士達が話していると別の誰かがやつて來た。

「見つけたぜ格闘家！」

「貴様は・・・最初に会つた転生者。」

キルアはちゃんと彼の事を覚えていた様だ。

「ちゃんと覚えてたみてえだな！」

「一応な・・・」

「あいつかわらずムカツク野郎だな・・・ん？何だテッメエ？」

バカな転生者は閃光の騎士を見てそう言つた。

「貴様あ・・・今、閃光の騎士様に向かつてめえとか言つたな・・・

・。」

「だから何？お嬢ちゃん？」

「貴様を殺す。」

閃華はレイピアでバカな転生者を切りつける・・・バカな転生者が追いきれないスピードで。

「イツテエ！？いつ切られたんだ！？」

「楽には死なさんぞ・・・。」

「閃華やめなさい私は彼の言葉は気にしていない・・・それにこれ以上やるとあの格闘家・・・キルアと言う者が彼を助けに入るだろう。」

「こんなどうでもよさそうな奴を？」

「それでも命ではあるからね。」

「転生者この場からとっとと離れる・・・死にたくないならな。」

「な、何かヤバソーだから逃げるぜ！」

転生者はさつやとこの場を離れて行つた。

「さて・・・旅の格闘家キルア、君に私は勝負を挑む。」

「キルアに勝負を挑むだつてアイツ負けにいく気にかい？」

「貴様！閃光の騎士様に向かつて！」

「閃華、落ち着きなさい。」

「はい。」

閃華は閃光の騎士に言われるとすぐに大人しくなつた。

「で・・・戦いは受けてくれるかね？」

「周りを巻き込まんならな。」

「分かつた閃華、私と彼を結界の中に入れてくれ。」

「はい分かりました閃光の騎士様。」

閃華は閃光の騎士に言われ結界をはる。

「きつ、キルア！？」

「アンタ！キルアを結界に閉じ込めてどうする気だい！？」

「閃光の騎士様の戦いの舞台を整えただけだ。結界でどうこうしようとしない。」

「本当だろうね・・・それにしてもこの結界、中が見えない！」

「キルア、大丈夫かな・・・。」

「キルアさん・・・。」

「それにも何て高度な結界何だ・・・。」

ユーノは閃華の結界を見てそう呟いた。

「僕を無視して事が進んでるな・・・一体何なんだ！」

クロノは急に現れた存在のせいでの自分の仕事ができなくてイラついていた。

結界の中・・・

「（）は頑丈だ思う存分戦つてくれたまえ。」

「分かった・・・では行くぞ！」

キルアは閃光の騎士に向かつて行く！そして攻撃を繰り出すが。

「その程度では私には勝てんよ！光輝神鳴斬！」

ヒュパツ！ヒュヒュヒュ ヒュツ！ザン！！

「くつ。」

キルアは閃光の騎士の攻撃をガードした。

「見事な防御だ。」

「なるほど貴様の実力は分かつた・・・三割の力を使って倒す。」

「三割の力で私を倒すか・・・ハッタリではないね。」

「それが分かる貴様はやはり強いな。」

「相手の力を理解するのも実力のうちだからね。」

「では行くぞ！黒龍拳！」

ドガツ！ガツガツガツガツガツ！！

「ぐああああ！」

閃光の騎士はキルアの技を受け倒れた。

「俺の勝ちだな。」

「ああ・・・私の負けだ・・・私もまだ鍛練が足りないね。」

キルア対閃光の騎士の戦いはキルアの勝利でかたがついたのだった。
そして結界の外では・・・。

「閃光の騎士様が負けた！？結界解除！」

閃華の意思により結界が解除され中からキルアと閃光の騎士が出てきた。

「キルア！無事だったんだね。」

「アタシはキルアが勝つって信じてたよ！」

「キルアさん私もう家族に心配をかける様な無茶はしません・・・。
考えてみて分かりましたから・・・。」

「そりか・・それでいいんだ・・・・・なのは。」

キルア達が会話している中で閃光の騎士達が話しかけて来た。

「私達は帰らせてもらひうとしよう・・・キルア、私が強くなつたら
もう一度戦おう。」

「閃光の騎士様は次は負けない！」

「では・・・さらば！」

閃光の騎士達は光に包まれ消えて行つた。

「奴等は一体何者だつたんだ・・・？」

「普通の人達でない事だけは確かだよね。」

「でもキルアの相手じやなかつたね。」

キルア達が閃光の騎士達を何者かと考えていると忘れられてそうなくロノが話しかけてきた。

「おい、君達ジュエルシードに関わってる参考人として事情を聞きたいんだが。」

「時空管理局とか言つてた奴だつたな・・・大方警察の様なものだろうな。」

「分かつてるなら話が早い事情を・・・」

「フェイトにアルフは先に帰つていってくれ俺はなのはと話があるから・・・すぐには帰れないかもしけないからジュエルシード探索を頼む。」

「うん分かつたよ、残りのジュエルシードもちゃんと集めるよ今の

私なら大丈夫だよ。」

「キルア、帰つたらちゃんとご飯を作りなよー。」

「分かった。」

フェイトとアルフはキルアと話すと先に帰つて行つた。

「ちょ、ちょっと待て！」

「事情聴取なら一応俺が受けけてやる・・・フェイトとアルフを追う
といつなら俺は貴様を倒すぞ?？」

キルアは凄まじい威圧をクロノに与える。

「わ、分かった・・・。」

「私も行くんですか?」

「ああ、そうしてくれると助かるよ。」

突如モニターが現れた。

『クロノ、二人逃がしちゃったみたいね。』

『ですがその一人の仲間が事情聴取に応じる様です。』

『ええ、じゃあクロノ早速一人をアースラに連れて来て。』

『では連いてくれ。』

『分かった。』

『はい、分かりました。』

キルアとなののは共にクロノに連れられアースラに向かうのだった。
・。。

接触、閃光の騎士！（後書き）

作者「読者の皆様・・・」の小説もクライマックスが近くなりました・・・あくまでリリカルなのは無印のですが・・・A・S編に普通に続けようと思います。

読者の皆様！これからもこの小説をよろしくお願ひいたします！」

全て集まるジユノルシード（前書き）

今回はページが多めです。あと後書きをおまけ小説をひとつだけ書きます。

全て集まるジュエルシード

キルアとなのはは現在クロノに連れられアースラに来ていた。

先頭を歩いていたクロノが振り返りなのはの方を見た。

「バリアジャケットとデバイスはもう解除してもいいよ。」

「あっ、はい。」

なのははバリアジャケットを解除しレイジングハートを待機状態にした。

クロノはユーノの方へ視線を向ける。

「君も元の姿に戻つたらどうだい?」

「あっ、忘れていました。そうですね。」

ユーノは光に包まれその中でフェレットの姿から人間の姿へと変わつていく。

光が収まるとそこに居たのは、なのはとそう対して年の変わらない少年だった。

「ふう・・・なのはにこの姿を見せるのは久しぶりかな?」

「えつ?・・・ええーーー? ユーノ君つて人間だったの!?」

なのははユーノが人間であつた事に驚くがキルアは無反応だった。

「あれ?なのはと最初に会つたのはこの姿じゃなかつたっけ?」

「フェレットの姿だったよ!?」

「あ・・・。」

ユーノは思い返していた・・・。そういえば確かに最初に会った時はフレットの姿で、なのはには「」の姿を見せていなかつた事に気づいた。

「」の姿を見せるの今回が始めてだつたみたいだね。」

「お、驚いたよ・・・。ユーノ君が人間だつたなんて・・・。」

「君達・・・話すのは後にして連いて来てくれないかい?」

クロノがユーノとなのはにそつまへ、なのはとユーノはすみませんと言いくつまへに連いていく。

「艦長連れて来ました。」

キルア達は艦長の部屋に到着した。部屋の中に入るとキルアは顔をしかめた・・・。部屋の中は盆栽やお茶の道具に畳や獅子お齧しが置かれていた・・・。キルアが顔をしかめた理由は和の文化の物なのに何か和がとれていらない所だつた。

「(ただ和の物を置けばいいと言つものでは無いだろう・・・。)」

「とりあえず座つて楽にしてくださいね。」

笑顔でリンクティにそづ言われなのは達は畳に座る。

「私が時空管理局提督『アースラ』艦長のリンクティ・ハラオウンです。」

この後互いに自己紹介し、ユーノ達は今までの経緯を話した。

「まあ、あのロストロギアジュエルシードを発掘したのは貴方だつたんですね。」

話を聞きおえたリングディがユーノにそう言つ。

「・・・はい、だから僕が回収しようつと・・・。」

「立派だわ。」

「だがそれと同時に無謀でもある。」

「ひつ・・・。」

クロノの言葉に俯くユーノ。

「あの『ロストロギア』って何ですか?」

なのはがリングディに聞いた。

なのははリングディから聞いた。次元空間の中には幾つもの世界が存在する。その中には他の世界よりも進化しそぎた世界がある。その世界を滅ぼした危険な技術の遺産。それらを総称して『ロストロギア』と呼ぶ。使い方によつては世界どころか次元空間を滅ぼす程の力になると。

話を聞いた、なのはは自分がどれだけ危険なものに関わっていたか理解した。

「これからはロストロギア『ジュエルシード』の回収については時空管理局が全権を持ちます。」

「えつー!?

リンディの言葉になのはとユーノは戸惑つ。

「君達は今回の事を忘れてそれぞれ自分達の世界に戻つて元のよう
に暮らすといい。」

「でつ、でも・・・。」

「次元干渉レベルの事件にこれ以上民間人を巻き込むわけには行か
ない。」

戸惑つなのは達にせりにクロノは、そう言つた。

「まあ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。一晩た
つてからまた改めて話をしましょ。」

リンディのその言葉にキルアが反応した。

「何故考える時間を『えるんだ?本当に閑わらせたくないなら考え
る時間など『えなくともいいだろ?」

キルアのその言葉になのは達を送りうとしていたクロノも反応した。

「そう言えば確かにそうだ・・・艦長、何故考える時間を『えるん
ですか?」

「そつ、それは・・・。」

クロノにも考える時間を『える事について聞かれリンディは少し動
搖する。

「大方、時空管理局は人手不足だから協力を申し出てもうあつ・・・

そう考へていたんぢやないか？

「本当にですか！？艦長！？」

なのは達を今回の件から本当に手を引かせよつと考へていたクロノは驚いた。

「ええ・・・そうよ。」

「立場上、頼めないのかもしれんがやり方がくどいな・・・。」

キルアはリングディのやり方が気にいらなかつた。自ら頭を下げ頼まず相手から申し出でてくるのを待つと言つやり方に・・・協力してほしいなら頭を下げて頼むこれは当然の事なのだ・・・危険な事なら尚更の事だ。

「あ・・あの私・・・」

なのはが何か言おうとするがキルアが・・・

「すまない、なのは・・・俺から言わせてもらつても構わないか？」

「あつ、はいどうぞ。」

キルアの真剣な顔でリングディの方を向き言葉を発した。

「ジユエルシードは俺が事が終わつたら全て破壊する。」

キルアの発言にリングディ達は驚きの表情になる。

「ロストロギアを破壊！？そんな事が出来る筈がない！？」

「事が終わつたらと言つ事は何かに使用するのですか？」

クロノは驚き、リンディはキルアがジュエルシードを使用すると言う事に注意を向ける。

「使用すると言つても邪惡な事ではない・・・・。」

「邪惡な事では無いと言つ確証は?」

「邪惡では無いのは確かだが話せんな・・・。」

キルアは何に使用するかは話さなかつた・・・プレシアの心の部分に触れてしまうからだ。

「クロノ・・・。」

「はい。」

リンディはクロノに視線を向け、クロノがその意味を理解するとクロノはキルアにバインドをかけた。

「キルアさん!?」

「ジュエルシードを使用すると言つ人物は野放しにはしておけないわ。」

「(使用するのは俺では無いがな・・・。)」

「キルアさんは邪惡な事に使わないって言つてます!それに使用するのはキルアさんじやないと思います。」

「あの金髪の子と使い魔にジュエルシードの回収を頼んだ人物か?」

クロノは何となく推測しキルアにそう言つた・・・だがキルアは無言だった。

「黙秘か・・・。」

「クロノ、彼を連れて行きなさい。」

「はい。」

クロノはキルアを連れて行こうとするが・・・

「「」のぐらいで俺を捕らえたと思つていいのか?」

キルアは軽く力を入れバインドを破壊した。

クロノは驚愕の表情になる。

「魔力も持たない身でバインドを破壊!??あの時の威圧を感じた時普通の奴じゃないとは思ったが・・・化け物か君は!?!」「別にこれぐらいの捕縛を破つたぐらいで大袈裟な反応だな・・・。」

「あつ、貴方は抵抗する気ですか!?!?」

リンディは焦った表情でキルアにそう言つ・・・リンディのその言葉に対してキルアは・・・。

「別に攻撃は仕掛けない・・・だが連行される気はない。」

「くつ、ジュエルシードを利用使用とする者と繋がっている奴を捕らえておけないのか・・・。」

「悪用はしないと言つているんだがな・・・なのは、ちょっとといいか?」

「何ですか?」

「ジュエルシードを全て渡して欲しい・・・何に使うのかは話せんが決して悪用はしない。」

キルアは真つ直ぐな目をしてなのはに言つ・・・キルアの言葉に対してなのはは・・・。

「ユーノ君・・・ジュエルシード、キルアさんに渡していいかな?」

「なのは！？」

「キルアさんは悪用しないって言つてゐるし・・・それに封印して保管するよりも破壊してしまう方が絶対にいいと思うんだ・・・絶対に悪用されないためには。」

「・・・・・分かつたよこの人の力は僕も目にしてきた・・・この人なら本当に破壊できそうだしね。」

「君達！何を勝手に決めてるんだ！」

「封印して保管すればジュエルシードと言う力はこの世に残る・・・そしてその力がある限りいつかは悪用しようとするものが現れるかもしれない・・・違うか？」

「ぐつ・・・だが管理局の管理はそんなに甘くはない！」

「だがその管理局の中に力を欲する者がいたとしたら？」

「管理局にそんな人間は絶対いない！――」

クロノはキルアの言葉に激怒する・・・だがキルアはまだ言葉を続ける。

「絶対か・・・何故そう言いられる？」

「管理局の者は皆、次元世界に生きる人々の生命と財産を守つて平和な日常を維持しつづける・・・皆その為に戦つている！だから管理局の中に力を求め道を踏み外す様な者はいない！――」

クロノは管理局の中に道を踏み外すものはいないそうはっきり断言するが、キルアはまだ言葉を止めない。

「人々を守る心を持つていたとしても何かがきっかけでその心が変わってしまうかもしない・・・そう考えた事はないのか？」

「管理局の者の心が変わるわけが・・・。」

「ない・・・とは言い切れないな・・・人は簡単な事で変わってしまう。いい方向へも悪い方向へも・・・それぐらい分かるはずだ。」

「ぐつ・・・・・」

「貴方に管理局の人達の何が分かるのーー！」

クロノはキルアに言い負かされそうになるが、今度はリングディがキルアに対して怒りをぶつけてきた・・・しかし。

「管理局の人達の何が分かるか・・・確かに分からない俺には・・・だが貴様らは分かつているのか人間の事が?」

「分かつてるに決まって・・・。」

「では何故、管理局の者はその心が変わらないと言い切れる?自分達が特別な人間とでも思つてているのか?」

キルアは鋭い眼差しをリングディに向けそう言葉にする。リングディはキルアの鋭い眼差しに身を縮ませる。

「別に私達は自分を特別な人間なんて思つていまんせん!人には変わらぬ心があると私は思つて いるだけです!」

リングディはキルアに対して力を込めてそう言葉にする・・・だがキルアは鋭い眼差しを止めない。

「確かに変わらぬ心も人にはあるだろ?・・・だがそれが全て同じ心だと限らん。」

「うつ・・・でも管理局の者は・・・」

「全員が次元世界の人々の生命と財産を守り平和を維持しつづける変わらぬ心を持っていると言いたいのか?・・・それが自分達を特別だと思つてていると言つて いるんだ・・・何故全く同じだと言い切れる・・・違う人間だと言うのに。」

「ですが、この仕事は人々を守る仕事!守らうと思わないものがやろうとするはずが・・・」

「無い・・・と言いたいのだろうが人を守る仕事でも守ろうと言う気持ちが無くともやる者はいる・・・給料がいい、待遇がいい、人はそんな理由で人を守る仕事につくこともある。」

「あつ・・・・くつ。」

キルアの言葉にリンクディは言い返せなくなる。

「貴様達は確かに人々を守ろうとする心を持っているだろう・・・だが他の者も全員が同じ心だと思うんじゃない。」

「だがそれと君がジユエルシードを壊す話は別だ！」

「俺がジユエルシードを壊す理由・・・それは俺の世界のレベルの事がジユエルシードに関わっているかもしれないからだ。」

「君の世界のレベルだと？」

「俺の世界のレベルの事では次元崩壊するぐらいの力は俺の知っているあの人達は個人が普通に持っている。」

「なつ！？」

「そんな力を持つ人達がいる世界があつたと言うのー？」

「でつ、デタラメだ！そんな力を持つ人間がいるわけがない！？」
「デタラメでは無いし実際にそんな力を持つ人間はいる・・・貴様達の目の前にだ。」

「あつ、貴方そんな力を！？」

「どうせハツタリだらう！」

キルアがそんな力を持つているのかと驚くリンクディだがクロノはハツタリだと信じようとしない。

「ハツタリではない。」

「口で言われるだけで信じられるか！」

「では見せればいいのか？」

「できるものならな！」

キルアとクロノが言ひ合ひ中、アースラ艦内に緊急アラームがが鳴り響いた。

「一体何事だ！」

「とにかくブリッジへ！」

「何が起こったんでしょつかキルアさん？」

「とりあえずついて行けば分かるだろう。」

キルア達はクロノ達に連れて行きブリッジへ来た。

するとそこににあるモニターには荒れ狂う海上の上でジュエルシードを封印しようとするフェイトの姿が映っていた。

「あの数のジュエルシードを一気に封印！？無茶だわ！？」
「個人の出せる魔力量を越えていきますね、間違いなく自滅します。」
クロノはそんな言葉を軽く口にする・・・だが。

「今のフェイトなら、あの数のジュエルシードを一気に封印する事はできない事ではないな。」

キルアは今のフェイトの実力が分かっていたのであれば無茶ではないと考えていた。

「そんなわけが・・・」

「あの少女がジュエルシードの封印に成功しましたー？」

クロノがフェイトがあの数のジュエルシードを一気に封印できるのを否定しようとするとオペレーターがフェイトがジュエルシードの

封印に成功した事を伝える。

「何！？」

「なのは、ちよつといいか？」

「え？ 何ですかキル……。」

なのはが言葉を言いおえる前にキルアがなのはを抱える。

「すまない。」

「えつ！？・・・ええーーー？」

急の事になのはは顔を赤らめ動搖した。キルアは、なのはを抱え空間転移する。

「なつ！？消えた！？」

海上・・・

「ふう・・・封印成功したねアルフ。」

「六個ものジュエルシードを一気に封印つて・・・本当に成長したねえ。」

ビッ！

フェイトとアルフが会話している所へ、なのはを抱え転移したキルアが現れる。

「あっ、キルア！？ 何でなのはを抱えてるのーーー？」

「これには理由があつてな・・・なのは、レイジングハートを起動させバリアジャケットに着替えてくれ。」

「あつ、はい。」

キルアは抱えていたなのはを降ろす。なのははキルアに言われるままレイジングハートを起動させバリアジャケットに着替えた。

「なのは・・・今からいつことを聞いてくれ。」

「は、はい！」

キルアはなのはにある事を囁つ・・・。

「えつ！？でもそれじゃあキルアさんが・・・。」「別に構わない・・・なのは、ジュエルシードを。

「は・・・。」

なのはジュエルシードをキルア達に渡す。

「これで全てのジュエルシードが集まつたんだ・・・母さんの所へ報告しに行かない」と――

フェイトはジュエルシードが全て集まつた事を喜びフレシアに早く報告しようと意気込む。

「なのは、やるが・・・」の後は囁つた通りに。

「は・・・。」

キルアは片手に氣を溜め海に向かつて放つ。

「よし、これで・・・フロイトにアルフ、プレシアの元へ行け。」

「うん！」

「あいよー！」

キルア達は場を離れプレシア達の元へと向かった。そしてこの後なのははクロノによつて保護されアースラへ。。

「君、大丈夫だつたかい？・・・それにしてもあの男はとてもないエネルギーを放つたな。」

「ジユエルシードを渡していくけどあの様子じや脅し取られたのでしょうか。」

「確かに君は彼に渡すとか言つていたがあの様子からして思いなおした君を脅しジユエルシードを奪い取つたのだろうな・・・酷い男だ。」

「酷い目にあつたわね・・・あの男、こんな子を脅す何てやつぱり悪人かしら。」

「・・・わないで。」

「何と言つたんだい？」

なのはが呟いた言葉が聞こえなかつたクロノは、なのはに何と聞つたかを聞く。

「キルアさんを悪く言わないで！あの人は本当にジユエルシードを破壊するつもりだよ！あの気弾つて言つのを海に向かつて放つたのは私が脅された様に見せる為だよ！」

「何故彼はそんな事を？」

「貴方達がキルアさんがジユエルシードを使つた後には破壊するつて事に賛成しなかつたから、そんな状態で私がキルアさんにジユエルシードを素直に渡せば私が罪に問われるからだよーー！」

なのはは涙を流しながらリンクディ達にそう言葉を口にした。

「彼、この子の為に自分の罪を大きくするきだつたの！？」

「キルアさんが本当に悪い人なら私を倒してでもジュエルシードを奪つていったはず・・・それにキルアさんは初めて会つた時に私を助けてくれた・・・そんな人が悪い人の筈がない！！」

「なのは・・・」

ユーノは泣いてるなのはを見て思い返す・・・確かにキルアは、なのはを助けたなのはを殺そうとする奴から・・・それにキルアはフエイトと戦い負傷したなのはに回復薬を渡したりしていた・・・そしてキルアは疲れを溜め込んでも元気なふりをしていたなのはに気づき止めてくれた・・・思えば彼は悪人と呼べる要素はなかつたと・・・

「なのは・・・彼は確かに悪人なんかじゃないね。」

「ユーノ君・・・」

「では彼はあるの事についても嘘をついていいと言つの・・・！？」

「艦長？」

「彼の世界のレベルの話・・・彼が魔力を持たないのに空間転移した事からも事実の可能性が高いのかもしない・・・だとしたら今回この件は私達では対応仕切れないかも・・・」

「次元崩壊を起こすぐらいの力を普通に持つ者達が対処する事か・・・

「。。」

クロノは想像してみるがレベルの話が飛びすぎていて全く想像できなかつた・・・ただ分かる事はとんでもなくヤバいと言う事だけ。

「艦長・・・僕は彼が言った事を少し考えてみたんです。」

「何かしらクロノ。」

「彼は管理局の全員が次元世界の人達が守ろうとする心を持つているわけではないと言つていきました・・・しかし彼は一人も持っていないや多くの者が持つていないとは言つていませんでした。」

「！？・・・そう言えば確かに。」

キルアは全員がは否定したが多くの者がは否定していなかつた。

「全員が全く同じ心を持つわけがないと言うのは同じ人間などないから当たり前の事で平和を守る心も色々あるのではないかと僕は思いました。」

「私達は管理局の者である事で少し自分達を特別と思つていたかもしないわね・・・。」

人は管理をする役職につくと無意識の内に自分を特別だと思つてしまふのもしれない・・・リンクティはそう思つた。

「僕の中には確かにある・・・変わらない次元世界の人々の平和を守ると言つ心が・・・。」

クロノは自分の中にある心を確かめた・・・次元世界の人々の平和を守る心を・・・。

もうすぐ大きな異変が起ころる・・・ジュエルシードが全て集まつたのだから・・・本来は、無い筈のジュエルシードを加えて・・・。

全て集まるジユノルシード（後書き）

「」はテキトーナ研究所・・・決して適当な研究所ではない。テキトーナ博士が住み様々な凄いが何か足りない発明を作っている。そしてそんなテキトーナ研究所に一人の男がやつて来る。

「テキトーナ博士ー！呼ばれたんで来ましたよーー！」

テキトーナ研究所にやつて来た男の名はGヒーロー「ゴキブリマン」。ヒーローである。名前からして間違いないゴキブリの姿でありどっちかと言えば怪人だろと思ったかもしねりが彼の心は立派なヒーローである。

「おお来たかゴキブリ。」ゴキブリマンに対しゴキブリ発言した人こそテキトーナ博士・・・凄い発明を作るのだがなんかが足りないのである。

「ゴキブリって・・・ゴキブリマンつくりませんと困んでくださいよ。」

「いや、一文字増やすとダリーじゃん。」

「二文字増やすとダリーッて面倒くさがりすぎですよ・・・。」

「しゃーねーな、ゴキブリマン実はお前に実験台になつて欲しい物があつてな。」

「それは一体何ですか？」ゴキブリマンはテキトーナ博士に何の実験になるかを聞く。

「それはこの次元越えもできる。テキトーナ携帯型転送装置のじやー！」

「次元越えもできるんですか！？凄いじゃないですか！」

「早速使つてみ。」

テキトーナ博士は「ゴキブリマンに転送装置を投げ渡す。

「ちょっと、受け取りそこねて床に落として壊したらどうするんですか！？」

「ぐちぐち言わないではよ転送装置使え。」

「全く……このスイッチを押せばいいんですね。」

ポチ。

ゴキブリマンはスイッチを押したそしてゴキブリマンはある事に気づいた。

「あの……博士？ 場所指定とかでないんですけど……。」

「だつてその機能つけてねーもん。」

博士の衝撃発言にゴキブリマンは驚きの表情を見せる。

「転送装置に一番必要なものが何でついてないんですか！？」

「作る途中で飽きて適当に仕上げたからな、自動修復機能と自己H
ネルギーチャージシステムはついてるから安心しろよ。」

「妙に凄いのつけてんのに何で最初につけるべきであり一番大切な
場所指定機能がないんだあ！！？」

ゴキブリマンは博士の適当さに驚くばかりであった。

「まあ、頑張れや石の中にいるとかならないといいな。」

「博士えええええ！」

カツ！

フラッシュの後ゴキブリマンはその場にいなかつた。

「さてと……寝よ。」

「あ……。」

私は今ここで死んじゃうんだ……魔女と戦っている日アマノはそう
思つた……魔女が彼女の頭に噛みつこうとするその時。
カツ！

ゴキブリマンが魔女の口の中に転移してきた。

「へっ……。」

ガブッ！

アマノは噛みつかれなかつたがゴキブリマンが噛みつかれてしまつ

た。

「私、助かったの……？でもあれは？」
マミは魔女に歯みつかれてこらるゴキブリマンを見る彼は抵抗していた。

「何だか知らんが私を食つなあ——！——！バキイツ！」

ゴキブリマンは魔女をその拳でぶつ飛ばす。

「今のは正當防衛だ悪く思わないでくれ。」

「うわ、ゴキブリ！」

マミはゴキブリマンを見て驚く・・・・・・。
。

「おやっ君達はっ。」

ゴキブリマンはマミ達の方を見た、ちなみにマミと一緒にいるが、まだかとせやかと叫んでいたのである。

「おっあこ、ゴキブリが喋った！？」

「怪人だ！？」

まどかとせやかはそれぞれゴキブリマンを見て発言する。まどかとせやかの言葉にゴキブリマンは少し傷ついて。

「うそ・・・・女の子には言われ慣れてるけど・・・・・・ひじはつ傷つくなあ・・・・。」

ゴキブリマンが落ち込こんでいたが、やがて彼はまた魔女が起き上がり再びマミに襲いかかるつとする。

「ひつ！」

マミは魔女が襲いかかってきた事に恐怖するが・・・・。

「少女を襲おうとするとは許せん——」のヒーロー、ゴキブリマンがお前を倒す！

ゴキブリマンは魔女に元の正義の拳を呑き込む。魔女は凄い勢いでふき飛び倒される。

「倒したか、君大丈夫かい？」

ゴキブリマンは襲われそうになつたマミを心配し声をかけるが。

「マミさんによらないで！ デカゴキブリ！」

「怪人め！ マミさんを助けたふりをして襲おうとする何て許さないよー！」

まどかとセやかはゴキブリマンが悪者だと想い攻撃を仕掛けた。

「ちよつ、私は怪人ではないって……いつなつたら仕方ないさらば！」

ゴキブリマンは羽を広げ羽ばたいて何処かへと逃げた。

「怪人は逃げたみたいだね。」

「大丈夫だったマミさん？」

「あの人、私を助けてくれた……ヒーローゴキブリマン……。」

「あんな変な生き物見た事がないよ一体何なんだろうね。」

白い生物キュウべえはゴキブリマンを見てそんな事を言っていたがお前にそんな事は言われたくはないと思う。

「巴マミ……生きていたのね……それとさつき羽ばたいていたのは何？」

羽ばたいていったのを聞いたこの子は、ほむり一言で言えばまどかを助けようとしている子である。

「……羽ばたいていった彼の名はゴキブリマン……私を助けてくれた人。」

「（ゴキブリマン……そんな奴は今までの世界にいなかつたわ？）

ほむりはゴキブリマンの存在を気にかけた……そのゴキブリマンはといふと。

「この世界はどうやら私みたいな見た目の者は馴染みのない世界の様だな……・・・それでも石の中にとかならなくてよかつた……寝床、どうじよつ。」

ゴキブリマンは今日の自分の寝床を考えながら羽ばたいていた。ゴキブリマンがこの世界にもたらす変化はどんなものなのか……この物語は続く……のか？

Gヒーロー、ゴキブリマン プロローグ 完

伝える真実・・・起る異変！（前書き）

ジュエルシードを全て集めた事で大きな異変が！？

伝える真実・・・起じる異変！

キルア達は全てのジュエルシードが集まつたためプレシアの所へ来ていた。

「母さん。ジュエルシードが全て集まりました。」

「よくやつたわねフェイト、偉いわ。」

フレシアは笑顔でフェイトにそう言つ。するとフェイトは照れた感じで頬を少しがく。

「母さん。早速ジュエルシードを渡すね！」

フェイトは元気良べりてジュエルシードを取り出そつとするが・・・。

「ジュエルシードを渡してくれるのは明日でいいわ・・・フェイト貴女は頑張つて疲れたでしょ？だからゆつくり休みなさい。」

「あ、うん・・・。」

フェイトは早く渡したいと思っていたがフレシアが明日でいい、今日はゆっくり休みなさいと言つのでジュエルシードを取り出すのを止めた。

「じゃあ、戻る？か。」

「そうだねフェイト今日はゆっくり休もう。」

「帰つたら飯を作るんだつたな。」

「美味しいの作つておくれよ。」

「キルアの作るものは何でも美味しいよ。」

フェイト達はそんな会話をしながらマンションに戻る。すると、がブレシアがキルアを呼び止める。

「キルアはちょっと残ってくれる話したい事があるの……。」「キルアはアタシ達のご飯を……。」「アルフ、ちょっとだけって母さんは言つてゐるでしょ？」「わ、分かったよう……。」「ちゃんと飯は作るから心配するな。」

そう言つてキルアはアルフの頭の上に手を乗せ優しく撫でた。そうするとアルフは機嫌をなおす。

「絶対だよ？ 後頭撫でるの上手いね。」「妹が機嫌を損ねた時にはこうやつて機嫌をなおしてたからな。」「うう～アルフずるい・・・・・アルフ、母さんはキルアと一人で話したいんだからそろそろ戻ろう？」

フェイトはアルフが頭を撫でられてずるいと思ったが気持ちを切り替えてブレシアとキルアを一人で話をさせるためにアルフを連れて戻ろうとする。

「分かったよ～。」「母さんじゃあ私達戻ります。」「ゆっくり休んでね、フェイト。」「・・・・フェイト。」「何？ キル・・・。」「

フェイトが言葉を言おえる前にキルアはフェイトの頭の上に手を乗せ撫でた。

「ジユエルシード全部集めるのよく頑張ったな……」フェイト。

キルアはフェイトが全部ジユエルシードを集めきった事を讃めた。フェイトはキルアに讃められて頬を赤くし照れた。

「う、うん……ありがとうキルア。」

「フェイト、戻らなくていいのかい？」

「あっ、そうだったね……キルア！母さんとの話が終わったらちやんと戻つて来てね！」

「分かっているさ……」フェイト。

フェイトとアルフはキルアとプレシアを一人で話をさせるため一足先にマンションへと戻つて行つた。

フェイト達が戻つたのを見てプレシアはキルアと話を始める。

「キルア……私が話したいという事は……」

「分かつていてる……」フェイトに真実を伝える事についてだらう？ジユエルシードが全て集まつた今真実は伝えねばならないからな……。

「お見通しと言う所ね……ええ、その通りよ……」フェイトには伝えなければならない……アリシアの事……フェイト自身の事を……。

プレシアはフェイトにフェイトがアリシアのクローンである事を伝える事について悩んでいた……そうフェイトが最初は何の為に産み出されたという事も伝える事になるから……。

「私……あの子に……フェイトに拒絶されるのかしら……。

プレシアは怖かつた・・・自分がフェイトを最初に産み出さした理由を伝えればフェイトに嫌われるのではないかと・・・。

「自分が最初にフェイトを拒絶したくなかったのに……勝手な女よね……」

「…………ナレシア、今のお前の気持ちをフヒトイで言えればフヒトイはお前を拒絶したりしないじゃ。」

「そう・・・ありがとう、キルア。」

だ。・。・。上

「貴方が勝手な人？・・・どうして？」

「俺はかつては何もかもを拒絶していた・・・自分の命をもな・・・

「どうしてそんなに全てを拒絶していたの？」

「フレシア……お前に話しておいた……そして俺の話を聞いてアヒートの魔力の俺を離さないで」

「何故そんな事を言つの……？」

聞けば分かる……俺は父と妹をこの手で殺した。

「俺はある奴の手により俺の中にある理由があるので」

覚めさせられた。・。・。
「

プレシアはキルアの言った『殺意の波動』と言つ言葉が気になつた。

「殺意の波動とは何なのかしら？」

「殺意の波动・・・それはまだ完全に詳しい事は分かつてはないが、それを持つものに巨大な力を与えるが・・・その力を持つものは殺戮衝動に刈られてしまう・・・殺戮衝動に刈られた俺を止めようとした父を俺は殺してしまった・・・。妹は俺に正氣を戻させる

為に自らの身をはつて・・・俺に正氣を戻させた・・・だが殺意の波動は尚も俺を蝕もうとした。」

「でもそれは悪いのは貴方じやなくて貴方の中のその力を目覚めた奴じゃない！！」

プレシアは怒りを覚えた・・・キルアの人生を狂わせた存在に対して。

「だが俺がもつと強ければ・・・殺意の波動に負けない強さを持つていれば父と妹は死ななかつた・・・父と妹が死んだのは俺が弱かつたからだ・・・。」

「そんな事はない！貴方のせいなんかじゃないわ！」

「あの人達も俺にそう言つてくれた・・・だが俺は自分が許せなかつた・・・だから俺は自分を殺してくれる存在を探した・・・俺が二度と殺意の波動によつて殺戮衝動に刈られ暴走する事の無いように・・・正気を保てるうちに死にたくて・・・。」

「キルア・・・。」

プレシアはキルアの辛い過去に胸を痛めた・・・。

「だがそれを絶対に許さない人がいた・・・その人は俺に言つた・・・『お前が本当に父と妹を殺してしまつた事を悔いてんなら死ぬな！生きて幸せに生きろ！それが本当の意味での償いなんだ！』と・・・だが殺意の波動に蝕ばまれていた俺はその言葉を拒絶した・・・俺に幸せになる資格などないと・・・それに殺意の波動はいつ俺を呑み込むか分からなかつたから・・・。」

「でも今、貴方はここにいるわ・・・。」

「その人が俺を救つてくれたんだ・・・殺意の波動の力に呑まれかけていた俺と本気で戦い・・・全てを受け止めてくれた・・・だから俺は今こうしてここにいる事ができる・・・。」

「貴方を救つてくれたその人には私は感謝しなくてはいけないわね。
・・貴方がいなければ今の私達はなかつたのだから・・・。」

キルアがいなければ自分はフェイトとあんなに仲良くなる事はなかつたとフレシアは思つた・・・。

「俺もあの人には感謝をしている・・・生きていたおかげでいい出会いが出来たと・・・。」

「私達との出会いは貴方にとつていい出会いだつた?」

「ああ、もちろんだ。」

「それは良かつたわ。」

「・・・・・フレシア、俺は今は殺意の波動を大体コントロールできる様になつてゐるが暴走を絶対にしない・・・とは言いきれない・・・だからフェイトの側から離れてほしいなら離れよう・・・だがジュエルシードを破壊した後にしてほしい・・・。」

なのはとユーノと約束してしまつたからな・・・と思つキルア。

「フェイトの側から・・・離れては駄目よ。」

「・・・いいのか?俺は危険な力を秘めているんだぞ?」

「今の貴方は殺意の波動と言うものに呑まれたりしないと私は思うわ・・・。」

「ありがとう・・・フレシア。」

キルアは今の自分を信じてくれるフレシアに感謝した。

「・・・キルア戻つてフェイト達にご飯を作つてあげてね。」

「ああ・・・分かつてる。」

「キルア・・・私、気持ちの整理がついたわありがと。」

「礼を言われる事など別にしていないさ・・・。」

そう言つてキルアはフェイト達の元へ行つた。

「礼を言われる事などか……いっぽんしてゐじやない……。」

「あつ、キルア戻つてきた。」

「話長いよ、キルア！早く、飯！」

「分かった、早く作るわ。」

キルアはキッチンに向かつて行く。途中でキルアは振り返りフェイト達を見た。

「フェイト、アルフ……お前達といふと楽しいな……ありがとう。」

「えっ？ 急にキルアビリしたの？」

「何でいきなりそんな事言つんだい？」

「ふ・・何でもない・・。」

「・・・キルア？」

フェイト達はキルアの作った料理を食べた後は寝て疲れを癒した。
・ そして次の日。時の庭園にてフェイト達はジュエルシードをプレシアに渡しに行つた。

「母さん、ジュエルシードを。」

「ちょっと待つてフュイト貴女に話しておく事があります。…それを聞いたら貴女は傷つくと思う。…だけど言わなければならぬい。…。」

「母さん。…？」

「フュイト。…連いて来て。…。」

フレシアはそう言つてある部屋に向かう。…隠されたあの部屋に。…。

フェイト達はフレシアに連いて行きその部屋へと入った。…そしてそこでフュイトは衝撃的なものを目の当たりにした。…ケースの中に入っている自分が同じ少女を。…。

「え。…？私？」

「この子はアリシア。…そしてフュイト。…貴女はこの子のク

ローンなの。…。」

「えつ。…！？」

フュイトはフレシアの言葉に動搖が隠せなかつた。

「私は最初は貴女をこの子の替わりとして産み出したわ。…。」

「そつ、そんな。…。」

「フレシア！アンタ！…！」

アルフはフレシアの言葉に怒りを抑えきれなかつた。…だがキルアがアルフを止める。

「何で止めるんだい！キルア！…！」

「話は最後まで聞くんだ。…。」

「私ね。…最初は貴女の事が好きになれなかつたの。…。」

フュイトはその言葉に肩をビクッと震わせた。

「でもね・・・私貴女を心のど」かでもう一人の娘として見ようと
していた気持ちがあつたの・・・フェイド・・・貴女の私に対する
貴女の愛情が余りにも純粋すぎたから・・・。」

プレシアはフェイドを優しく抱き締めた・・・。

「か、母さん・・・？」

「キルアのおかげでその自分の気持ちに気づけ素直になれた・・・
大好きフェイド・・・。」

「母さん・・・うん私も母さんが大好き・・・今の母さんの気持ち・
・・ちゃんと私に伝わったよ・・・。」

フェイドはプレシアに抱き締められプレシアが本当に自分をもう一
人の娘として愛してる事を理解した。

「嫌いにならないでくれてありがとう・・・フェイド。」

「嫌いに何かならないよ・・・母さん。」

「プレシア・・・フェイドはちゃんと受け入れてくれたな・・・。」

キルアは今の一見を見て本当の意味で一人には壁がなくなつたと感
じた・・・。

「所でジュエルシードとの子は関係あるのかい？」

アルフはジュエルシードの事とアリシアが関係あるのかをプレシア
に聞いた。

「ああわ・・・ジュエルシードはこの子を・・・アリシアを生き返
らせぬ為に集めさせたのよ。」

「「」の子を生き返らせるだつて…？」

アルファは人を生き返らせるところに驚きを隠せなかつた。

「正確に言えればジユエルシードを使ってアルハザードに行き「」の子を生き返らせる術を見つける為よ。」

「アルハザード？」

フェイトはアルハザードとは何だらうと思つゝ。

「アルハザードは失われた技術が眠る場所……そこには人を生き返らせる方法があるのかもしれないよ。」

「所でこの子を生き返らせたらフェイトはボイする氣なのかい！」

アルフは怒り気味にプレシアにそう聞く。

「そんな事は私はしない……「」の子を生き返らせるのは「」の子も含めて家族全員で暮らしたいからよ……。」

「本当だらうね！」

「アルフ、母さんは嘘なんかついてないよ。」

「……分かつたよ、フェイト。」

「母さん……この子は……アリシア姉さんは私の事を受け入れてくれるかな……？」

「アリシアは妹が欲しいと言つてたから貴女の事を大好きになつてくれるとと思うわ……。」

「母さん……私を産んでくれてありがとう……たとえ最初はアリシア姉さんの替わりに産みだされたとしても母さんが私を産んでくれたおかげでリニースやアルフ……それにキルアに会えたんだから……。」

「フェイト……。」

プレシアはフロイトの言葉を聞いて胸が温かくなつた・・・。プレシアはむしろフロイトに感謝していた・・・アリシアの替わりではなく・・・フロイトになつてくれてありがとうと・・・。

「母さんジュエルシードを・・・私も早く姉さんに生き返つてほしい・・・それで色々な事を話すの！」

フロイトは姉に色々と話したい事を思い描きながらプレシアにジュエルシードを全部渡した。

「フロイト・・・ありが・・・! おかしい・・・。

「え? 何がおかしいの? 母さん。」

「ジュエルシードは全部で一一個の箒なのに・・・一一個あるわ! ?」

「ほ、本当だ! ?」

ジュエルシードは突然激しく光り輝いた。

「これは一体! ?」

「フロイトーアルフー! プレシアー! アリシアを連れてこの部屋から・・・いや、時の庭園から出るんだ! 」

「逃げるならキルआも一緒に・・・。」

「俺はここに残らなければならぬ・・・何かが起こるなら俺はそれを止めるー! 」

キルआは固い決意でここに残ると宣言した。

「で、でも・・・。」

「フロイト、キルアは大丈夫よ凄い人だから……だから今はこの部屋から出ましょ！」

「分かったよ……母さん。キルア！絶対に無事でいてね！」

「分かつていいる！」

「キルア！」飯楽しみにしてるからね！」

「ああ！楽しみにしている！」

フェイト達はキルアにそれぞれ声をかけるとアリシアの入ったケースを持つて部屋から出る。

「何が起じる……！」

その頃アースラにて……。

「艦長！凄まじい魔力反応がありました！」

「何ですって！？場所は特定出来る？」

「はい、何とか……魔力の上昇は止まりません！」

「もしや……ジユエルシードか！？」

クロノは凄まじい魔力の原因をジユエルシードだと推測する。

「ジユエルシード……！？じゃあその場所にキルアさんがいるんだ……キルアさん大丈夫なのかな……？」

なのは凄まじい魔力の反応と聞いてキルアの心配をした……因みにならぬがアースラにいるのは時空管理局の仕事に興味を持ったからである。

「次元震や次元断層が起じるのか！？」

「とりあえず魔力反応がある場所へ向かってちょうどいい、クロノ！」

「分かりました、艦長！」

「私もその場所に行つていいいですか！」

「一般市民を巻き込むわけには・・・。」

「もしキルアさんの身に何か起こつてるとしたら私力になりたいんですね！」

なのはは覚悟を決めた田でクロノにそう言つた。

「クロノ・・・連れて行きなさい。」

「艦長！？」

「この子は揺らがない目をしているわ・・・本当に管理局の人員に欲しいわね・・・それに恋する乙女は強いのよ？」

「り、リンディさん！？」

なのははリンディの言葉に顔を赤くして恥ずかしがる。

「・・・危なくなつたらすぐに逃げるんだぞ？」

「はい！」

クロノ達はチームを引き連れ時の庭園へ向かうのだった。

そして現在キルアはジュエルシードの光が收まりジュエルシード？
を見ていた・・・。

「ジュエルシードが人の形になつた・・・！？」

「私ハジユエルシードガ集マリ願イヲ感ジタ時、現レル者テス。貴方ノ願イヲ叶エタクバ私ヲ倒シテクダサイ・・・貴方ガ負ケタ場合ハコノ世界ヲ全テ無ニ帰シマス・・・因ミニ戦ワナイ場合テモ貴方ノ負ケデス。」

「何だと！？」

「人ハ願イヲ叶エル為ニハソレ相応ノリスクヲ背負ワナケレバイケ
マセン・・・ソノリスクハ必シモ自分ダケノモノトハ限ラナイノデ
ス。」

「貴様を倒せばアリシアを生き返らせる事ができるのだな・・・貴
様を倒しアリシアを生き返らせる！そしてこの世界も滅びさせはせ
ん！行くぞ！」

「貴方ハ試練ヲ乗り越エラレルノデショウカネ？」

キルアとジュエルシードが一つになつたものとの戦いが始まる・・・
この戦いはどうなるのか！？

伝える真実・・・起る異変！（後書き）

作者「無印編クライマックスもあとちょっとです！キルアはジュエルシードが一つになつたものに勝てるのか！？」ジュエルシードが一つになつたものの力は一体どんなものなのか！？読者の皆様どうかこの小説をこれからもよろしくお願ひいたします！次回も見てください！」

激闘ジュノルシード（前書き）

キルアとジュノルシードの戦いが始まる！－！

激闘ジュエルシード

フェイト達は現在屋敷の外へと避難していた。

「屋敷が崩れしていくわ・・・」

「キルアは強いんだ・・・大丈夫・・・大丈夫。」

「キルア、無事でいて・・・」

三人はそれぞれキルアの身を案じた。

そんな三人の所にクロノ率いるチームがやつて来た。

「君たちこれは一体何が起こっているんだ！？」

クロノはフェイト達にそう聞いた。
フレシアがクロノの問いに答える。

「何が起きてるかは分からない・・・ただ・・・。」

「ただ？」

「とんでもないことが起こりつつとしている事だけは確かよ・・・。」

フレシアはジュエルシードのあの反応を見てそう思った。

・・・その時屋敷が完全に消し飛んだ！

ドゴオオオン！――

凄まじい轟音が鳴り響いた。

フェイト達は全員屋敷のほうを見た。

そこにはジュエルシードが一つになつたものと戦っているキルアが

いた。

戦っているキルアがいたと言つても全員キルアの戦いのスピードを捉えきれてはなかつた・・・そしてジュエルシードが一つになつたもののスピードも・・・。

「何が起こつている・・・？」

戦闘をしているのか・・・？」

クロノが戦闘をしていると感じたのはキルアとジュエルシードがぶつかりあう姿が一瞬見えたからである。

当然それは彼等の戦いの数多く一瞬の一いつでしかない・・・。

ぶつかりあう姿が見えた時にはもうぶつかりあつてないと思つていだらう・・・。

「全然追えない・・・キルアの動き・・・早すぎて氣もよく察知できぬい・・・。」

フェイトは田だけではなくキルアから氣で相手の場所を探る術を学んでいたがこのスピードが相手では全く意味がなかつたようだ・・・。

「キルアさん・・・加勢しに行かなきや。」

なのははそつ言つて戦いの渦の中に向かおうとするがフェイトが止めた。

「駄目だよ・・・」の中の誰もキルアの戦いの手助けにならない・・・邪魔になるだけ。

「フェイトちゃんはただ黙つて見ていいだけいいの！」

なのははやつフロイトにさしつがフロイトが拳を握りしめてるのを見て
て氣づいた。
この子が一番力になれて悔しいのだと……。

「私達にできるのは安全な場所に避難してキルアの無事を祈る事だけなんだ……。」

「フロイトちやん……。」

「避難するならアースラに来るんだ。」

クロノは安全な場所といつじび血分達と一緒になら即座に向かえるアースラをフロイト達に提案した。

「でもアンタらは時空管理局だし……。」

アルフは自分達は時空管理局にとって罪になる事をしていたので捕らえる氣なのでは?と警戒した。

「今は君たちを捕らえるとか言つている場合ではない!
早く一緒に避難するんだ!」

クロノは今は捕らえる氣はないとフロイト達に自分の意思を伝え早く一緒に避難するように叫んでいた。

「行こうアルフ……キルアの邪魔にならないためにも。」

「うん……。」

「母さんもいいよね?」

「勿論よ……時空管理局にさすもそもそもようつがあつたの……。」

「えつ?」

「何でもないわ……行きましょう。フロイト。」

「つしてフェイト達はアースラへと避難した・・・。

「むつ・・（避難したようだな・・・フェイト達）。」

「彼等ガ避難シテクレタオカゲテ全力デ戦エマスカ？」

「分かつてフェイト達を狙わなかつたのか？」

「私ニハ全力ヲ出シタ者ノ力ヲ受ケル義務ガアリマス。」

「変な所がしつかりしてゐるな・・・失敗した時のリスクは願いを叶える者以外も受けるのにな。」

キルアは妙な所で律儀な相手だと思った。

「全力ヲ出セナイママ失敗スルト悔イガ残リマスシ。」

「願いを叶えられなくとも悔いが残ると思うが・・・。」

キルアは全力を出しても願いが叶わなければ悔いが残るだらうと思つたが・・・。

ジュエルシーードはこう答えた。

「願イヲ叶エラレナカツタ時ノ悔イハ願イヲ叶エヨウトシタ者自身ノリスクデス。」

「願いを叶える者以外のリスクがでかすぎるな・・・。」

「人ノ心ニヨツテハ他ノ者ノリスクモ自身ノリスクト同ジテショウ

？」

「確かにな・・・。」

「喋ルノハココマテニシテ戦鬪再開テス。」

ジュエルシードはそう言つと超スピードでキルアに攻撃を仕掛けた。だがキルアはジュエルシードの放つた鋭い拳はガードした。

「ゴォン！」

（ガードはできたが重いな・・・。）

キルアはガードをしたもののがガード越しにダメージが伝わって来た。実力が近い証拠であつた。

「はあ！」

「バキヤア！」

キルアは攻撃をガードした姿勢から即座に蹴りを放つた。ジュエルシードは吹き飛んでいったが・・・。

「今ノハイイ蹴リデシタネ。」

すぐにキルアの元へ戻ってきた。

（蹴りは、まともに入つた筈だ・・何故ケロッとしている。）

キルアの蹴りがまともに入つた筈のジュエルシードはケロッとした

ていた。

まるで全くダメージがないようだ。

「技ヲ使イマシヨウ・・・ジュエルスプレッド。」

「ジード・ジード・ジード・・・」

ジュエルシードは自分の腕から大量の宝石の鋭い弾丸を撃つてきた。

「くつ、何で数だ・・・」

キルアはジュエルシードが放った弾丸の数に一瞬驚くがすぐに冷静に対処し弾丸の雨を掻い潜りながらジュエルシードへと近づいていく。

「ルリだ！黒龍拳！」

キルアはジュエルシードの懷に入ると黒龍拳を放った。
そして黒龍拳はジュエルシードにまともに入った。

ドガツ、ガツガツガツガツガツ！！

「オオウ！？」

ジュエルシードは黒龍拳はをまともに受けた・・・筈なのだが。

「凄イデス。今ノ技ハ今マテニ受ケタ技ノ中テ一番強カツタデスヨ。

」

ダメージを負つたような反応を見せなかつた。

(ニヒツ・・・!?)

キルアはさすがに自分の黒龍拳が通用しなかつた事には動搖した。だがすぐに落ち着き戦いに集中する。

「単発が効かないなら連続で攻撃を叩き込むまで!」

「貴方が連續デ技ヲ叩キ込ム暇ナドアリマスカネ?」

そう言つとジュエルシードは凄まじいスピードでキルアを撹乱はじめる。

(早い・・・!)

「ジュエルソード。」

ジュエルソードは宝石でできた剣を作り出すとキルアに凄まじいスピードで斬りかかる。

「トラエキレーマスカ?..

ザシユ!

「くつ。」

「マダマダ。」

ザシユ ザシユ ザシユ ザシユ!

「へつ・・・。」

キルアは攻撃を受けながらも動こうとしなかった。

「諦メマシタカ？ナラ止メトイキマシヨウカ。」

ジュノルシードは今までにないぐらいの力をこめキルアに対して剣を突き刺そうとした。

・・・キルアは避けよつとはしない。

ズシュ！・・・・

アースラ艦内・・・

「はつ！？」

「どうしたんだい？フェイト。」

「キルア無事だよね・・・。」

「なつ、何言つてんだいフェイト！？キルアは強いんだ無事に決まつてるじゃないか！」

「うんそうだよね・・・・無事だよね。」

フェイトは口で呟いても心の中でこう祈る・・・。

(キルア無事でいて・・・。)

時の庭園内・・・

ジュエルシーードにキルアは確かに突き刺された・・・だが。

「急所ヲズラサレマシタカ・・・デモ何故受ケタンデスカ?
貴方ナラヨケラレタデショウコノスピードハ?」

ジュエルシーードは今の攻撃は力を込めた分スピードが落ちたのでキルアが諦めていないなら避けられた筈だと思った。

キルアは急所をずらした・・・つまり諦めていない者となるのだ。なのに何故攻撃をわざわざ受けたのだとジュエルシーードは不思議でならなかつた。

「こつするためだ・・・。」

ズドオン!メキッ。

キルアはジュエルシーードの腹に自分の拳を突き刺した。

「オヤ・・・?」

「貴様は俺よりもスピードは早かつた・・・貴様を捕らえるにはこれが一番だと思ったのさ。」

「私ヲ捕ラエル為ニ貴方ハ危険ナ賭ケニ出タノデスカ?」

「貴様は異常に頑丈だ……そんな貴様を倒すには連續で攻撃を叩き込むしかない……スピードが早いから単発な強力な技はよけられるからな……。」

「確力ニソウデスネ……ソレニシテモ貴方ノ拳ハ抜ケマセンネ。」

メキッ・・

「そう簡単に抜けてたまるか……ジュエルシード貴様を倒す！」

キルアはそう言つと拳を突き刺したままジュエルシードに連續で攻撃を加える。

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ！

「オオウ！？」

「これで止めだ！」

そう言つてキルアは突き刺していた拳を引き抜き大技を放つ。

「修羅業波動拳！」

「ドオオオン！――！」

「グツ・・・カツ・・・・。」

ジュエルシードは粉々になり吹き飛んだ。

「終わったか……。」

アースラ艦内 ブリッジ

「艦長、巨大な魔力反応が反応が消えました…」

「そう、彼はやつたのね。」

「フェイト、キルアは無事みたいだよ…」

「やっぱりキルアは強いから誰にでも勝てちゃうんだ…」

「キルア…私、貴方が帰つてきたら…。」

プレシアはキルアが帰つてきたらある事を決意していた…。
しかしオペレータが再び慌て始めた。

「艦長！？再び魔力反応が！？」

「何故！？一度消えた筈なのに…？」

「キルア…無事だよね…。」

時の庭園内…

「残念デシタネ私ヲ倒セテナクテ。」

ジュエルシードは復活していた。

粉々になつた筈だが元通りになつて。

「全くだ…。」

キルアは刺された場所を押さえながらそつまう。

「第一ラウンドトイキマショウカ？」

「くつ・・・。」

一度は倒したかに思えたジュエルシード・・・。
だが奴は元通りに復活した。
今の傷ついたキルアでたおせるのか！？

本当の戦いはこれからだ！

激闘ジユエルシード（後書き）

作者「ジユエルシードとの戦いは次回で決着！
負傷したキルア。ジユエルシードの更なる力。
二人の戦いはどうなるのか！？
どうか読者の皆様！次回もこの小説を読んでください！」

激闘ジュノルシード 終結（前書き）

キルアとジュノルシードの戦い遂に終結！

激闘ジュエルシード 終結

一度はジュエルシードを倒したかに思えたキルア・・・。
だがジュエルシードは復活した。
そして再び戦いが始まる。

時の庭園内・・・

「魔力も元通りか・・・やはり魔力は減らないようだな。」

「エエ私ハ魔力減リマセンヨ。
今ノ魔力ヲキーPsi続ケマス。」

「粉々にしても復活するとはな・・・。」

「イヤー粉々ニサレル何テ初メテデスヨ。
貴方ハ本当に凄イデス。
私が今マデニ戦ツテキタ中デ一番デス。」

ジュエルシードはキルアを今までの中で一番だと褒め称える。
だがキルアはそんな言葉を気にせずに自分の今の状態を把握する。

(傷は痛む・・・だが戦えなくはない・・・気の量もまだある。)

キルアはまだ自分は戦えると判断した。

だが消耗はしているのでさつきよりも苦戦する戦いになると思った。

キルアがそう思考をしているとジュエルシードが光輝き光をキルアに向かつて放つてきた。

(しまつた！？)

キルアは光を浴びてしまつたが・・・。

「・・・攻撃じゃない？」

キルアはジュエルシードの放つた光を浴びたが全くダメージをおつていなかつた。

キルアは今の光は一体と思考するが・・・。

「フムフム・・・貴方ノ記憶ニハ凄イ情報ガ、タクサンデスネ。
魔法ヲ使ツテミマスカ。」

「記憶・・・魔法・・・まさか！？」

キルアは今の光の意味を理解したがもう遅かつた。

「天空ニ集マレ雷ヨ、雷ヨ荒ブル龍ノ形トナリテ我ガ前ニ立チハダ
カル敵ヲ喰ラワン。ドラゴボルディアス。」

ジュエルシードはキルアに向かつて魔導書の魔法を放つた。
キルアは予測していたため何とか避けることができた。

「やはり今のは記憶を読む光・・・。」

「ヒヒソノ通リデスヨ。」

ジュエルシードはキルアの記憶を読み魔導書の魔法を覚えてしまつたようだつた。

（中級と上級を読んでなくてよかつた・・・。）

キルアは初級の時点で高レベルだつたため中級と上級は読んでいかつたようだつた。

もし読んでいたら中級と上級の魔法も放たれていたのだ。

（だが初級でもあの魔導書の魔法が強力である事に変わりはないか・・・。）

キルアは初級でも強力な事に変わりはないので氣を引き締める。

「次ハコノ魔法ディコウ。

全テヲ切リサク裂ク銳キ風ノ双剣、ソノ銳キ刃テアラユル敵ヲ薙ギ
ハラエ、ワインダルティードブレイジ。」

ジュエルシードが魔方陣を描き呪文詠唱をおえると鋭き風の双剣が
キルアに襲いかかつた。

「くつ、業波動拳！」

キルアは片方を避けもう片方は業波動拳でかきけした。

「くつ・・・。」

「魔法ハ避ケラレテカキケサレマシタガ氣ヲ消耗シテシママイマシタ
ネ。」

ジユエルシードの言う通りキルアはダメージ受けはしなかつたものの業波動拳を放つことで気を消耗してしまった。

魔力が減らない敵に対してもうに消耗するのはまずい・・・キルアはそう思っていたからこそ最初ジユエルシードを危険な賭けをして一度粉々にしたのだ。

無駄になってしまったが・・・。

「最初ノ貴方ト私ノパワーノ差ハホボ互角デシタガ今ハ貴方ガ下デスネ。

サテドウ逆転シテクレマスマスカ？」

ジユエルシードはキルアはどう逆転するか期待をするような発言をした。

挑発だとは思うが・・・。

（無駄に氣は使えない・・・なら肉弾戦でいくしかない・・・効果的ではないだろうが。）

キルアは氣を放つ技は控え肉弾戦を重視することに決めた。

「はあー！」

キルアはジユエルシードに近づき拳を放つがジユエルシードは避けようとしてしない。

ギイン・・・・。

「魔導書の防御魔法か・・・くつ。」

キルアの拳は魔導書の防御魔法によりジュエルシードにはどしかなかつた。

「初級ナノニ凄イ魔法バカリデスヨネ。
アノ魔導書。」

（肉弾戦も通用しないのか今の状態では……どうすれば……。）

キルアは悩む気を放つ技は迂闊に放てない。
肉弾戦は通用しない。

何よりも奴は粉々にしても再生してしまうと。

（最初に残らずかきけせば……だが。）

キルアは完全にかきけしてしまったら願いが叶わないのではと躊躇してしまったのだ。

「力キケシテモ私ハ倒セマセンヨ?」

ジュエルシードはキルアの心を読んだかのようにそう答えた。

「貴方ハ私ヲ最初ニカキケセバ倒セタト考エテイルンデショウ?
ダガソレハ意味ガナイ考エデスヨ。」

（ならここはどうやって倒せる……。）

キルアはかきけしても無駄だと聞いてジュエルシードを倒す方法について悩んだ。

「私ヲ倒ス方法ハ貴方ノ中ニ、ニツアリマスヨ。」

ジュエルシードは何故かキルアに助言めいた言葉を言つ。

キルアはその言葉に対して一体奴は何を考えていると警戒した。

「一ツハ教エテアゲマスヨ。

一ツハ殺意ノ波動デス。

貴方ノ殺意ノ波動ハナニモカモヲ・・・死ガ想像デキナイカラ殺セ
ナイトカイウ奴デモ普通ニ殺セマスヨ?」

ジュエルシードは自分を倒せる力の一つを殺意の波動だとキルアに伝えるが。

キルアは当然、殺意の波動を使う事を拒否する。

「殺意の波動は使わない・・・貴様の言ひレベルは俺が殺意の波動を全開にした状態だろ?。貴様に勝つても自分に負けてしまっているし俺は殺意の波動に頼りたくない。」

自分が殺意の波動に頼つたがゆえの暴走をキルアは想像すると絶対に頼らないと心にきめる。

「暴走ガ嫌デスカ? アノ時ノヨウナ悲劇ハモウ嫌ダカラ?」

ジュエルシードはキルアの記憶を読んだためキルアの過去が分かるのでそんな発言をするが。

キルアは全く表情を崩さずにこう言った。

「ああ、その通りだ俺は暴走して新たにできた大切な人達を傷つけるのが怖いんだ。」

キルアはそう言った。

キルア自身の嘘一つない心からの言葉だ。

「自分ノ心ニ嘘ヲツイテ強ガリマセンテシタネ。
本当ノ意味、テ貴方ハ強イ人ダ。」

「ダカラモウ一ツノ答エニモ氣ヅイテホシイデスネ。」

ジュエルシードはもう一つの自分を倒す答えに氣づいてほしいとキルアに言う・・・。

キルアは何故ジュエルシードは答えに氣づいてほしいなどと言つんだ?・・・と思つた。

「オ喋リガスギマシタネ・・・戦イヲ再開シマショウ。」

ジュエルシードは再び戦闘体制に入る・・・。

ジュエルシードが戦闘体制に再び入るのを見るとキルアも身構える。

(次はどう来る・・・?)

ジュエルシードは次はどのような攻撃を放つ?・・・と警戒するキルア。

ジュエルは詠唱をせずに魔方陣だけを描き始めた。

(あれは!まことに・・・あれを成功させたら大技を食らってしまう。
・・今のうちにたたみかけなければ!)

キルアはあの魔方陣がある術の発動魔方陣であることが分かつたた

めジュエルシードが魔方陣を描くのを食い止めようとする。

しかし・・・

「邪魔ハ、サセマセンヨ? ジュエルファントム。」

ジュエルシードがそう呟くとジュエルシードの分身が現れキルアに向かっていく。

キルアはそのジュエルシードの分身をすぐに倒しジュエルシードの元へ向かいたいがジュエルシードの分身一人一人の力はジュエルシード本体よりも劣るが数が多くて先には中々進めない。

「くつ・・・仕方ない修羅波動拳!」

キルアは拳や蹴りだけでは時間がかかりすぎるので修羅波動拳でジュエルシードの分身をかきけした。
しかし時すでに遅し。

「魔方陣完成テス。結界魔法ダストリアルプリズン。」

ジュエルシードは結界魔法を発動させ結界の中にキルアを閉じ込める。

「サテコレテアノ魔法ガ当タリマスネ。デハイキマスカ。
灼熱ノ業火ヲ纏イタル魔神、確実粉碎ノ斧持チ手現レヨ、魔神ヨソ
ノ斧ヲフルイテ敵ヲ粉碎セヨ。イグニティアジンアクセウ。」

灼熱の業火を纏いし魔神がキルアに向かつて炎の斧をふりおろす。

スピードが遅い魔法なのだがキルアは結界に閉じ込められているため回避することができなかつた。

「オオオオオン！！！」

結界は粉々に砕け魔法はキルアに確実にヒットした。スピードが遅い分、威力が異常に高い魔法なのでキルアが大ダメージを受けるのは必須だった。

「はあ・・・・はあ・・・がふつ。」

キルアはまだ生きていたが今の一撃で気を大量にけずられた。今のキルアは体のあらゆる部分に火傷を負い胴着もボロボロになっていた。

しかしキルアはまだジュエルシードを倒す事を諦めてはいない。何故ならキルアの目はまだ勝つことを諦めていない者の目をしていたからだ。

「マダ諦メテハイナイヨウデスネ？」

「これぐらいで諦めてたまるか・・・これ以上の窮地でも俺を救ってくれたあの人は諦めなかつた・・・だから俺はこれぐらいで諦めはしない！！」

自分を救つてくれた人はこれ以上の窮地でも諦めなかつた。だからキルアは諦めないと言つているがキルアが諦めない理由はそれだけではない。

「それに俺が負けたらこの世界が・・・フェイト達が貴様に消され

てしまふからな・・・。」

そうキルアは自分に出来た新たな大切な人達の為に負けられない。

その気持ちがキルアを諦めさせない一番の気持ちだ。

「ソウデスカ・・・大切な人達ヲ守リタイナラ私ヲ倒シテミナサイ。

」

「言われなくとも！」

キルアは力を振り絞りジュエルシードに向かっていく。

（オヤ？ サツキヨリスピードガ・・・）

ヒュッ、ガーン！

キルアの拳はジュエルシードの防御魔法を突き破りジュエルシードを捉えた。

「パワースピードガ最初ヨリ上ガツテイル・・・マサカ？」

「俺の記憶を読んだから分かっているようだな。」

「貴方ガ殺意ノ波動ヲ抑エルタメニマワシテイタ貴方ノ氣ヲ戦鬪一
マワシタノデスカ？」

ソンナ事ヲスレバ貴方ハ・・・。」

「今の俺は力ずくで殺意の波動を抑える必要はない・・・心の力で

全てを抑える！」

キルアは今まで修行によつて培つた氣の力で殺意の波動を抑えていた面があつた・・・だが今の彼にはもうそれは必要なくなつたようだ。

「フフ・・・イイデショウ。ナラ貴方ハ最高ノ私ノ技テ倒シマショウ。」

「何・・・？」

ジュエルシードの体が激しく光輝く・・・。

「これは・・・」

「ジュエル・・・」

「まずい！？」

キルアは直感でこれが異常に危険な技だと判断しすぐさま避ける体制に入る。

「ジエノサイズ！――！」

「ブイイイイイン！――！」

ジュエルシードの体から尋常じゃない密度の魔力の光線が放たれた。

しかしキルアは避ける体制に入つていたためその技を避ける事が出来た。

「あれは当たつたらヤバイな・・・。」

キルアはあの技に当たれば自分は確實に負ける・・・そう思った。

キルアはジュエルシードの放つ光線を見ていたがすぐさまにジュエルシードの方へと視線を向きなおした。

「避ケラレマシタカ。」

「予備動作があれだけ大きければ無意味。」

「デスヨネー！ テモアレガ私ノ最高ノ技ナンデス。」

「最高の技とて当たらなければ無意味。」

「デハ他ノモ技モオリマゼマショウ。ジュエルスプレッジ。」

「その技はもう効かない！」

キルアはジュエルスプレッジはもう見切っていたので宝石の弾丸の雨を搔い潜りジュエルシードに鋭い突きを食らわせる。
しかしジュエルシードは攻撃を受けても全く消耗しない。

キルアはすぐさま距離をとつた。

迂闊に近づいたままのは危ないからだ。

「攻撃してもやはり効かない・・・奴に弱点はないのか？」

キルアはジュエルシードの弱点は何かと思考するが。

「考エゴトシテルト危ナイデスヨ?」

ジュエルシードが激しく光輝きジュエルジェノサイズの発射体制になっていた。

「くつ。」

キルアは思考を止めすぐさまにジュエルジェノサイズを避ける体制に入る。

「ジュエルジェノサイズ！..！」

ジュエルシードは再びジュエルジェノサイズを放つがキルアはそれを避けた。

キルアはジュエルジェノサイズを避けたあとジュエルジェノサイズを放っているジュエルシードを見てることに気がつく。

（奴はあの技を放っている時・・・色が変化してる？）

そうジュエルシードはジュエルジェノサイズを放っている時、体の色が青色から灰色へとわずかな間だがえていたのだ。

そして技を放ちおわると体の色の変化はなくなり青色のままだ。

（・・・・。）

キルアはあることを思い出していた。

ある人が戦いについてあるアドバイスをしたことを。

『なあ、キルア。普通に倒せねえ奴がよ、とんでもない技を放つて
きたらどうする?』

『一度退いてその相手を倒す方法を調べます。』

『いや、そうじゃなくてさ……退けない戦いの場合だよ。』

『……負けてしまつのは?』

『あのなあ……技に突っ込んで相手に向かうんだよ。』

『何故自ら大ダメージを受けに?』

『普通に倒せねえ奴は何か大技放つたあと特別な隙ができるかもし
れねえじゃねえか。』

『隙ができなかつたら?』

『そんときやそんときだ。』

『……。』

あのアドバイスはかなりあれだったとあの時は思つたが今は感謝す
るキルア。

(あの色の変化は別に意味などないかもしけない……だが賭け

るしかない。）

ジュエルシードがあの技を放っている時に攻撃を仕掛けるには攻撃を受けながら突き進むしかない。

避けてから攻撃をしようとなれば途中で技を中断しそれ以降技を使わないかもしないからだ。

（チャンスは一回・・・奴の体が灰色の時に技を叩きこむ）

そう今のキルアの最高の技・・・少し前までは殺意の波動を使わずとも放てたが殺意の波動に響いたあの技を・・・。

今ならキルアはあの技を使っても全く殺意の波動に響かないだろう。

「マタ当タラナイカー。デモ私ハ魔力無限ダシイイカ。
デハモウ一回。」

ジュエルシードの体が激しく光輝く・・・ジュエルジェノサイズの体制だ。

キルアはそれを見るとジュエルシードに突っ込んでいく。

（技ニ当タリニクルナンテ・・・自棄ニナリマシタカ？ソレトモ氣
ヴィタノカ・・・デモタイミングヲアワセラレマスカネ？）

ジュエルシードの体の輝きが最大まではげしくなると。

「ジュエルジェノサイズ！-！」

ジュエルシードは最高の技を放つ。

キルアはジュエルシードが放つ魔力の光線を潜り抜けジュエルシードに近づく。

(ぐつ・・・凄まじい威力だ・・・意識が・・・だが!)

キルアは凄まじい魔力の光線の中をどんどん進む。

(負けられないんだ! ! !)

キルアは遂にジュエルシードのすぐ近くまできた。
そしてジュエルシードが灰色になつた瞬間に攻撃を仕掛けようとする。

(・・・今だ! 瞬獄殺!)

ドガガガガガガガガガガガガガッ! キイン! ! !

キルアはジュエルシードに対して瞬獄殺を放つ。

ジュエルシードに瞬獄殺は決ましたが果たして本当に灰色の時にやれたのか・・・。

もし決まっていなかつたらこの世界は終わる・・・。

アースラ艦内・・・

「艦長！魔力反応が消えました！」

「今度こそ終わったの・・・？」

リンディは一度魔力反応が消えても一回再び反応が復活したので警戒する。

しかしつまでたつても魔力反応は復活しない・・・。

「やつた・・・キルアが勝ったんだ！！」

フェイトはキルアが勝ったと喜ぶ。

同時にキルアが帰つてくると思つとさうに嬉しくなつた。

そして当のキルアは・・・

時の庭園内・・・

「復活しない・・・完全に勝つたんだな・・・。」

キルアは粉々になつたジュエルシードの前に極限まで疲労した状態で立つっていた。

「・・・願いはどうなるんだ？」

ジュエルシードは勝てば願いが叶つと言つたが倒しても特に何も起

「こらない・・・と思つていたら粉々になつたジュエルシードが光つた。

「まだ終わつてないのか・・・？」

キルアはまだ戦いが終わつてないと思い身構えるがジュエルシードは復活をせずに粉々になつた欠片から光が離れその光がキルアに語りかけてきた。

「オメデトウゴザイマス。貴方ハ見事ニ試練ヲ乗り越エマシタ。」

「貴様はジュエルシード・・・なのか？」

「アツ、ハイソウデス。」

光はキルアに自分がジュエルシードである事を伝える。

キルアはジュエルシードがおめでとうと言つたのが気になった。

「おめでとうと言つたがまるで願いを叶えて欲しい様な口振りだな？」

「ハイ、叶エテ欲シカツタンデスヨ。」

ジュエルシードはキルアの問いにそう返してきた。

キルアはそれを聞いてジュエルシード更にある事を聞く。

「では何故願いを無条件で叶えないんだ？」

「私が、ソウ作ラレタカラデス。

無条件ニ様々ナ願イヲ叶エルヨウニスルト多大ナ歪ミニヲ生ムカラデス。」

キルアはそのジュエルシードの言う多大な歪みに少し心当たりがあった。

「なるほどな・・・それで願いは?」

「ハイ、一ツダケ叶エテサシアゲマショウ。」

「では、アリシアを・・・プレシアの家族を生き返らせてくれ。」

キルアがそう言つとジュエルシードはキルアにある事を聞いた。

「貴方ノ家族ハイインデスカ? 試練ヲ乗り越エタノハ貴方デス。貴方自身ノ為ニ願イヲ叶エナクテイインデスカ?」

ジュエルシードはそう言つがキルアは迷いのない目で再びジュエルシードに言ひ。

「アリシアを生き返らせてくれ。」

「・・・イインデスカ?」

「俺はフレシアに家族を取り戻して欲しいんだ。
それに父も妹も俺がそう願う事を望んでいるだろ?」

「・・・確力ニ貴方ノ父サント妹サンハ、ソウ望ムデショウネ。貴方ノ記憶ヲ見タカラ、オ二人ガドウイウ方カハ分カリマス。」

「分かっているなら何故無駄な質問を?」

「貴方自身ノ心ヲ確カメタカツタノデス。

願イヲ叶エルノハ貴方デスカラ。

貴方自身ガ、プレシアサン達家族ノ幸セヨ一一番願ツテイルノデスネ。

」

「俺自身が一番か・・・そうだな。」

キルアは確かに父がとか妹がとかの前に自身が一番そう望んでいる事を理解する。

「デハ願イヲ叶エマシヨウ。」

ジュエルシードは願いを叶える。

そうプレシアの家族を取り戻すと言う願いを・・・。

アースラ艦内・・・

「アリシアー!?」

プレシアはアリシアが入ったケースが光輝くのに驚いた。

そして光が収まるときースからアリシアが消えていた。

「アリシアー!? 何処!?!?」

フレシアはアリシアの姿がケースからなくつたのに慌てる。

フレシアはフロイトが自分の後ろを指差して「ことじて」といふべく

「か、母さん……。」

「どうしたのフロイト?」

「うひ、後ろ……。」

「後ろ?」

「アリシア姉さんが立つてゐる。」

「えつー?」

フレシアが後ろを振り向くと綺麗な服を着たアリシアが立っていた。

「お母さん……?」

「アリシアー!」

フレシアはアリシアの元へかけよう優しく抱き締める。

「アリシア……生き返ったのね。」

「お母さん……うん……私は今ここに生きてゐるよ……。」

アリシアはフレシアを優しく抱き締め返した。

「アリシア姉さん。生き返つてよかつたね……。」

フロイトはアリシアが生き返つてよかつた。
これで姉さんと色々な話ができると喜んだ。

フロイトがそう思つてゐると後ろから誰かが話しかけてきた。

「フエイト、私もいますよ？」

「この声は…？」

フェイトが後ろを振り向くと大きな光があった。
その大きな光が止むと……。

「リース……？リースなんだね！」

「ええ、リースですよ。フェイト。

プレシアもアルフも久しぶりですね。」

プレシアとの使い魔契約を解除して消滅したはずのリース……彼女がフェイトの目の前にいた。

「私もジュエルシードの力のおかげで生き返ったんですよ。」

「でも、リース……貴女何故使い魔の時の姿なの？」

プレシアはリースが生き返るとしたら元々の普通の猫の姿になるのでは?と思ったが。

「ジュエルシードのサービスですよ。
アリシアの服もそうです。」

「ジュエルシードのサービス?」

「ジュエルシードは結構気前がいい人でしたよ。」

ジュエルシードって気前いいのか……ヒリースの話を聞いた皆は思つた。

「そろそろ彼も来ますね・・・。」

リースがそう言つと目の前に光が現れた・・・光が収まるときルア
がその場にいた。

「キルア！無事だつたんだね！」

「ああ、体はボロボロだけどな・・・。」

「じゃあ早く治療しないと！？」

フェイトはキルアを治療しなきやと意氣込む。

「プレシア、ちゃんとアリシアは生き返つたか？」

「ええ生き返つたわよキルア・・・。」

「そつかよかつた・・・。」

キルアはアリシアが無事に生き返つた事を確認するとその場に倒れ
た。

「キルア！？」

「大丈夫だ・・・安心したら気が抜けただけだ・・・。」

キルアは倒れたが気を失つてはいなかつた。

「キルアさん。プレシアを救つてくれてありがとうござります。」

「・・・誰だ？」

「初対面でしたね私はリース。プレシアの使い魔です。」

私は一度消滅をしましたが貴方のおかげで今ここにいるんですよ。」

「どうことだ・・・? ジュエルシード。」

キルアがそう言つと光が現れたその光はジュエルシードだ。

「ダツテ貴方ハ、プレシアサンノ家族ヲ取り戻シテ欲シイト願イマシタカラ、リニスサンダツテ家族デショウ?」

「ふ・・なるほどな。」

キルアは少し笑いながらなるほどなと理解した。

「貴方、今その光をジュエルシードと言つたけど・・・」

リンティはキルアが光に対してジュエルシードと言つたことが気がなつてキルアに光の事を聞いりとするが。

「私ハ、ジュエルシードテスヨ。」

ジュエルシード自身が先に答えた。

「アツ、因ミニ私モウスグ消エマスカラ。」

そのジュエルシードの言葉を聞いたユーノはジュエルシードの力はこの世からなくなると安心しキルアに感謝した。

「約束を守つてくれてありがとうございます。キルアさん。」

「別に俺は礼を言われる事はしていないさ・・・。」

「しかしこの人がジュエルシードを集めなければあんな異変は起らなかつたんじや？」

一人の局員がそう言つた。

「ソレハドウデショウカ？」

私ハ集メラレ願イヲ感ジルト一ツ二ナツテ発動シマスカラ貴方達ガ集メテモ異変ハ起キマシタヨ？」

そうジュエルシードが局員に向かつて言つた。

「では僕達が集めていた場合は……。」

「私ニ敗レテノノ世界ガ消エテマスネ。」

クロノはそれを聞くとゾッとなつた。

ジュエルシードから感じた魔力は大きいということは分かるが自分達の理解を越えて大きかつた。

自分達が集めていたら確実に手におえない事をクロノは理解していだ。

「それじゃあジュエルシードの件を解決したのはキルアさんだね。」

そうなのはが言つと局員の者達は全員頷くしかなかつた。

「世界を守つてくれてありがとうございます。キルアさん。」

リンディがキルアにお礼を言つた。

成り行きはどうであれキルアは結果的に世界を守つたのだから。

「最初、フェイトにジュエルシード探す協力を頼まれた事……それが今繋がつただけなんだがな。」

「じゃあ世界を守ったのは、ある意味フェイトだね!」

アルフがそう言つとキルアは軽く笑みを浮かべながら確かにそうかもな・・・と思つた。

「世界を守つたのは私じゃなくてキルアだよ~。」

「きつかけを『えたのはフェイトだ。だからフェイトが守つたと言つても過言じやないな。』

「キルアまで~。」

「世界を守つた妹がいるなんてお姉ちゃんとして鼻が高いよフェイト。」

「アリシア姉さんまで……あれ妹つて?アリシア姉さん私の事……」

「知つてるよ天国から見てたから……私の可愛い妹フェイト。こんなにちは、そしてこれからよろしくね!」

アリシアは笑顔でフェイトにそう言つた。

フェイトはアリシアの言葉からアリシアが自分を受け入れてくれる事が分かつた。

「アリシア姉さん。ありがとう……うん、よろしく姉さん!」

フェイトも笑顔でアリシアに言葉を返した。

フレシアはそんな二人の微笑ましい光景を見て笑っていた。

自分にとって最高に幸せな光景だつたから・・・。

フレシアはキルアも無事に帰つて来たので決心したあることをする事にする。

「時空管理局の艦長わん。」

「何でしちゃうか? フレシアさん。あと私はリンディでいいですよ。」

「リンディさん・・・私、自首します。」

フレシアのその言葉にフェイトは驚いた顔をする。

「母さん! ?」

「フェイト・・・私がジュエルシードを集めた事は結果的に死人や大きな被害は出さなかつたわ・・・でも立派な犯罪なの。」

そう確かにロストロギアを勝手に集め利用することは犯罪になつてしまつ。

「でもそれなら私だつて集めるのを協力・・・」

「フェイト、貴女は私に集めさせられた。そういう事でいいの・・・リンクティさん。どうかフェイト達の事は・・・。」

「分か・・・」

「ちょっと待つてくれ。」

キルアがプレシアとリンクティの会話に割って入った。

「ジュエルシードを最終的に利用したのは俺だ。

願いを叶えたからな・・・プレシア達は俺が願いを叶える為に利用された被害者だ。」

「キルア貴方は何を言つて!?」

「プレシア。お前がフェイト達の側から離れるのは駄目だ・・・フェイト達が寂しがるだろ!つ?」

キルアはプレシアがフェイト達から離れるのは駄目だと思い自分が罪を被るのとする。

キルアはリンクティの方を見る。

「俺が世界を守つたと言つなら俺が罪を全て背負う事でプレシア達を無罪してくれ頼む・・・」

「・・・分かりました。上層部に掛け合つてみます。」

「艦長!?」

「クロノ、何か言いたいことが?」

リンクティはクロノが上層部に掛け合つ事に反応したので何か言いたいことがあるのかと聞く。

「・・・僕は彼等を無罪にしてもいいんじゃないかと思います。」

リンクティはクロノの意外な発言に驚いた。

「ロストロギアを集め力を利用する事は確かに罪です。」

しかし僕達がジユエルシードを集めていたとしたら世界は滅んでいたんです。

彼は成り行きはどうであれ世界を守りました。

そしてその彼が罪を背負うのはおかしいと思います。世界を守つた彼が彼女達の無罪を望むならそれを配慮していいのではないかと僕は思います。」

クロノがそう言つてリンティは、ふと笑つた。

「クロノ、貴方変わつたわね・・・私はそもそも彼等を全員無罪にする氣で上層部に掛け合つつもりです。」

リンティは上層部に最初から無罪にする為に掛け合つ氣だった。

それはキルア達がどう考えたって悪人ではないからだらつ。

「世界を守つてくれた人とその人の大切な人達を罪人にしてしまつては私も寝覚めが悪くなつちやつしね。」

「リンティさん・・・ありがとうござるー・キルアさん達を無罪にしてくれて。」

「なのはなちゃん。まだ気が早いわよ。

頭の固い上層部の連中をどうにかできるかしらね・・・。」

リンティは無罪にするつもりで上層部に掛け合つと言つたものの頭の固い上層部をどうにかできるだらうかと歎んだ。

「まあ、とつあえず貴方達は自宅待機してて。」

リンディはキルア達にそう言った。

「リンディがキルア達を拘留せずに自宅待機と言つのはキルア達を信頼しての事だろ?」

「……いいのか?」

「貴方達は自宅待機中に逃げたりしないでしょ?」

「それはそうだが……」

「いいから帰つてゆづくじ休みなさい。」

「……分かった。」

キルアがリンディの言つた自宅待機を了承するヒュエルシードがキルアに話しかけてきた。

「ソロソロ、オ別レデスネ。」

キルアサン私ノ願イヲ叶エテクレテアリガトウゴザイマス。」

「お前の願い? そんなもの叶えたか……?」

キルアはヒュエルシードの願いなんか叶えたかと思ったが、ヒュエルシードがその事について答える。

「私ノ願イハ願イヲ叶エテアゲルコトデスヨ。ダツテ私ハ願イヲ叶エルタメニ作ラレタモノデスカラ。」

「そつか……。」

「テハ、サラバテス。」

そつとジュエルシードは消えていった。

「・・・完全に消滅したな。」

キルアはジュエルシードは、別に悪い奴ではなかつたなと思つた。
だつてサービスと言い負傷した自分をここまで運んでくれたのだから。

「キルア。帰ろつ私達の家へ。」

「ああ、そつだな・・・と言いたいが体が負傷していて動けないな。
・・・」

キルアはジュエルシードとの戦いのダメージが体に溜まつて動けなくなつていたため歩けなかつた。

「仕方ないねえ・・・アタシが抱えるよ。」

「すまないな・・・。」

「キルアさん。帰つたら私とお話してくれる?
私、フェイトがキルアさんと楽しそうに話しているのを見たら一緒に喋りしたくなつたんだ。」

「別にいいが・・・俺と話すのは、そこまで楽しくないと思つが?」

キルアはそつアリシアに言つがアリシアは笑いながらキルアに「

三。

「話してみなきゃそれは分からなーよ。」

「さうか?」

「でもまだ傷を癒さないとねキルア。」

「確かにな・・・フヒイト。」

「キルア。」

「何だ? プレシア。」

「本當に・・・本當にあつがとう。」

「別に礼を言われるほどの事はしていないなー。」

「そんな事はないわ・・・。」

「・・・それより帰つて俺は休みたいな・・・。」

「ふふ、ボロボロだものね。」

「君達そろそろ送るだ。」

クロノはキルア達をそろそろ家であるマンションがある世界に送りうとする。

「ああ、分かった。」

「あのキルアさんー！」

キルア達が帰るとすると、なのはがキルアに喋りかけてきた。ユーノも隣にいる。

「あの私を・・・」

「僕を・・・」

「何だ？」

「「鍛えてください！！」」

二人の突然の頼みにキルアは少し驚く・・・そしてキルアは何故二人が自分に鍛えてほしいのか聞く。

「私、強くなりたいんです。キルアさんみたいに・・・」

「僕もです。キルアさんみたいに強くなれば色々なものを守れるから・・・」

「・・・分かつた。別に構わないぞ二人とも・・・ただし無罪になつたらだけどな・・・」

「キルアさんは無罪になります！」

「キルアさんは寧ろ世界の危機を救つたんですから。」

「ふ・・そう言つてくれると嬉しいな・・・またな二人とも。」

「『はい』」

キルアは一人にまたなと言つとフェイト達とともに家へと帰つて行つた。

キルア達は果たして無罪になるのだろうか？

激闘ジユノルシード 終結（後書き）

作者「無印編の終わりも本当に近くなりました・・・。
無印編が終わつたら次のA、S編では凄い事を最初に起しそつもり
です。」

それが何かは言えませんが・・・。

この小説を読んでくれた読者の皆様！

どうか次回もこの小説を読んでください！

これからもよろしくお願ひします！」

フハイトのお礼（前書き）

作者「投稿やつとでももした。無印編最終話です！」

フロイトのお礼

ジュエルシードとの激闘から一週間がたつた。そして現在そのジュエルシードと戦い結果的に世界を守った、次元を渡り歩く旅の格闘家キルアは、

「ふう、はつ。」

軽く体をならしていた。彼は激闘のあとベッドの上に縛りつけられていたからである。本当は激闘があつた次の日。

『ちよっと修行に行つてくる。』

などと言い修行に即座に行つとしたのだが

『なに言つてるのキルア！まだ傷は治りきつてないでしょー。』

『アンタ死ぬ気かい！？』

『昨日今日でいくらなんでも無茶よ！？』

『無理はダメだよ？キルアさん。』

『それにそのボロボロの胴着で外に行くんですか？ダメですよ不審者と間違われますから私が同じのを作つてあげますからそれまで休んでください。』

などと言われたあとに縛りつけられたのだ。あとリースは胴着を作るのをわざと一週間もかけた。キルアを休ませるために。

「ふう…体は鈍っていないか…むしろあの一戦で成長したようだ。…そもそも帰るかあまり長くすると叱られるからな。」

キルアは笑いながらそう言った。帰りを待つものがいるのは嬉しいのだろう。

そしてキルアが帰るとアリシアが飛びついてきた。

「お帰りキルアさん！無茶してないよね？」

「無茶はしないが…アリシアが飛びついてきてあたつた場所が傷口…なんだが…？」

キルアは痛む箇所を押された。するとアリシアは慌ててすぐに謝る。

「うわ、ごめんなさい！」

「大丈夫だ。もう痛みは引いたからな。それにこれぐらいは謝られるレベルじゃないさ。」

キルアはそう言ってアリシアの頭を軽く撫でた。
アリシアはくすぐったそうに手を細めた。

「そろそろかな…。」

キルアはそうボソリと呟いた。その言葉は時空管理局での自分達の処分をどうするかをリンクダイがそろそろ言っていくんだりといふ意味だろう。

「俺は罪に問われも構わんが…プレシア達は……そう言えば…？」

キルアはあることを思い出す。困ったときに開けると言われたもの。の事を…。

キルアはすぐに自分の荷物袋の元へ向かう。アリシアもなんとなく

ついて行つた。

「あつた。」

キルアが荷物袋から取り出したもの…それは『天才科学者発明セツト』と書かれた箱だつた。

「パスワードは確か…『僕超天才科学者』」

そうキルアが入力すると箱はカチッと音をたて開いた。

「すぐ変わつたパスワードだね…？」

「確かにあれなパスワードだが…本当に天才科学者なんだこれを作つたのは…。」

アリシアのパスワードの事を言われるとキルアはそう返した。確かにこれを作つたのは天才科学者であるから…。

「中には何があるの？」

「T・HAKASEの技術ノートと鞠花の技術ノートか。あとは…色々な発明とパーツか…。」

「そのノートなに?面白い事が書いてるの?見せて!」

アリシアがそう言つとキルアは鞠花のノートだけを渡した。

「そつちのノートは見せてくれないの?」「アリシアは見ない方がいい…。」

アリシアはキルアが真剣な顔でそう言つものだからもう一つノートの事は気にせず鞠花のノートを読み始めた。

「…」のノート…手紙が挟まつてゐるな…でもこの手紙は『キルアは開けるなこのノートを渡す相手に開けさせん』…と書かれているな…何でだ?」

キルアがそんな事を考へてゐると玄関から聞き覚えのある声が聞こえたのでノートを持ったまま向かつた。

キルアが玄関を開けると表情を暗くしたリングディがいた。

「どうした…。」「

キルアはどうしたかを聞くが大体の事は分かつていて。そしてリングディの声が聞こえたのでプレシア達も玄関に集まつてきていた。

「リングディさん…やはり駄目でした…?」

そうプレシアがリングディに聞くと無言でリングディは首を縦に振る。

「そう…ですか…。」「

プレシアは暗い表情になる。自分達が無罪になる確立が低い事は分かつていた…だがやはり希望は抱いていたのだ…しかしその希望はうち碎かれてしまった。

しかし…。

「リングディ、少しすごい手段かもしけんが…これを交渉の道具で
きないか？」

キルアはリングディにあのノートと手紙を渡す。

「これは…？」

「天才科学者の技術ノートだ。間違いなく時空管理局のもちえる技
術よりも遙かに上のものが書かれている。あと手紙は上層部にとり
あえず渡してくれ。」

リングディはノートを開き田を通す…すると驚愕の表情を見せる。や
はりあのノートの技術は凄まじいものようだ。

「凄い…この技術は上層部は間違いなくほしがるわ…確かに交渉の
手段に使える。……使えるけどページごとに『馬鹿な人にも分か
るよつに説明すると』と書かれているのが気になるわ…」
「……すまない…そういう科学者なんだ…。」

キルアはノートに書かれている失礼な事について謝る。書いた科学
者が明らかに悪いが一応仲間だからだろう。

「これを持つてもう一回上層部の所へ行ってくるわー！」

リングディは上層部の元へ向かつて行った。

「うまくいくかな…？」
「いくといいんだがな…。」

フュイトとキルアはそう呟いた。

そして時空管理局上層部。リンディは緊張した面持ちで上層部の面々の前に立っていた。それは一回かけあうのに失敗したのにまた再びキルア達の無罪をかけあいにきたのだ。また失敗すればクビになるかもしないからだ。しかしリンディは勇気をだして立ち向かう。

「……これを。」

リンディは上層部の一人にノートを渡した。

「これはなんだね？」

「とりあえず見てください。」

リンディにそう言わるとノートを渡された上層部の一人はノートをめくつて内容を見ていく。

…すると次第に驚愕の表情になっていく。

「所々にムカつく事も書いてあるがこれは素晴らしい技術書だ！こんな凄いものを見たことはない！」

「キルアさんから渡してもらいました。彼らを無罪にすればその技術書は貰えるそうです。…彼らは実際に被害はだしていません。だから無罪にしてください。その技術書があれば今後の我々時空管理局の活動もより良好なものになるでしょう。」

リンディはこれで交渉は成立…と思つたが。

「……これは罪人の物だろう? しかも出身も分からぬキルアという者だから証拠物件として預かろう。」

その衝撃の言葉にリンディは驚く。

「ちょっと待つてください! ? そんなのおかしいです!!」

「いいから君はここから去りたまえ。クビになりたくなかつたら。」

リンディはくつと唇を噛み締めた。… そう言えば自分は渡していいある物があるのを思い出す。手紙だ。リンディはこんな物を渡してどうなるかは分からぬigaとりあえず渡すこととした。

「()の手紙も彼の所有物ですから渡しておきます。証拠物件とやらでしょ?」

「とりあえず中を見てみるか。」

手紙を開けると何も書いてなかつた。上層部はそれを見てただのゴミかと思うが、突然手紙が光だした。… そして映像が目の前に現れたオレンジ色の髪に眼鏡をかけ白衣を着た男の映像が。

「何だこの映像は?」

上層部の奴がそう思つていると映像の人物は喋りだした。

『やあ、お馬鹿な諸君達。僕は超天才科学者のチャタインでーす。』

とメチャメチャ相手を馬鹿にした言葉を最初にだした。そして映像の人物チャタインは喋り続ける。

『交渉とかのために僕のノートが渡されたと思つけどそれを変な理由で交渉を蹴つていただこうとした場合、君達を解体するぞ！…違う場合はメンゴネね。』

怖い雰囲気とおちゃらけた雰囲気をだすチャタイン。上層部の奴らはもちろんリンクディもポカーンとなる。しかしチャタインの顔は急に真面目になる。

『僕の仲間が本当に悪い事をした場合は本当に罪に問いてもいい。…まつ、悪いことしないと思つけどね。…そして実際に被害を出した訳でもないのに罪に問つと言つのなら、…僕達は…おそらく相手は組織だと思つから…おひつじ…貴様ら組織を解体…いや…ぶつ潰すよ？』

威圧感を込めてチャタインはそう言つが上層部は。

「何が潰すだ！我々時空管理局を嘗めているのか…！」

「ふてぶてしい態度だ！」
「ふざけるな！」

チャタインに向かつて各々言葉を吐くが。チャタインは映像なので意味がない。そしてチャタインはまだ喋り続ける。

『言つとくけど僕達の世界のレベルは凄いよ？…だって多次元を滅ぼす敵なんかざらに戦つてきたからね。』

その言葉を聞くと上層部はヒヤッとなつたがすべ。』

「『テタラメを…』

と否定した。だがリンクディーは上層部に向かつて言った。

「チャタインという人の言う事は本当だと思います。…なぜなら前に報告した通りキルアさんは大きいという事が分かるだけで計測は不能の魔力をもつものを倒しているからです。」

リンクディーのその言葉を聞くと上層部の連中は黙つた。理解をしたのだろうか？

「し…しかしだな…」

『あつ、因みにこれ映像自体、力はないけど一応魔法なんだよね。メインは手紙だね。君達の回答を感じとり大爆発するんだ?まつ、キルアが本当に悪い事をしてたらしないけどね……でも逆に君達が彼を陥れようとするなら普通にドツツカーノン…!…つてなるけどね。』

チャタインがそう言つと手紙が光つていた。

「まつ、まさか本当に…?」

「すつ、すぐに処理を!」

『銀河規模の爆発だからね。すぐに処理なんて無理無理…あと十秒前』

チャタインは行動を読んでいたのみならず、上層部は慌ててこの言つた。

「分かつた！ キルアとキルアが無罪を望む者達は全員無罪でいい！」

『

『…………まだ僕の言葉を聞いていると云ふことは無事のよつだね？ そしてキルアは無事に無罪へと言つといひだねえ…………ふつ……くく……はははははは……爆発なんて嘘だよーん。』

「何ー？」

『…………と云ふのが嘘です。僕はマジでやる派だからね。…………僕の話しあはこじまで、あと次元を渡つたときに君らキルアになんかしてゐるを見たらマジで潰すから。じゃあね～。』

そつとチャタインの映像は消えた。

「……上層部の皆さん。キルアさん達は無罪、確かにそつとましたね？ 今更言つた事を変えませんよみーね？」

リンディは笑顔だが明らかに威圧感を漂わせる表情で上層部の連中にそつと言つた。……上層部の連中は何も言わない……つまりキルア達の無罪は確定と言つことだ。

「では私は彼ら無罪を伝えて来ます。いいですね？」

「う……うむ。」

上層部はただ了承するしかなかった。

リンティはキルア達の元へ来た。そして無罪を訴える。

「…あなた達は全員無罪になりましたー！」

「……やつたあ！！」

「キルア、無罪だよ。やつたねえー！」

「ああ、そうだな！」

「フロイト達が罪に問われなくてよかったです…。」

「皆、無罪で本当によかったですね。お母さん。」

「これにて一件落着ですね。」

キルア達は全員無罪になつた事を喜ぶ。リンティはそんなキルア達を見てふつふつふと笑いながらある事を言つ。

「皆さん、無罪になつた、お祝いに旅館で宴会をしまじょう！ー！」

「それいいねー！」

「『馳走が食べられるねえ！』

「確かにいい考えねー。一番頑張った人の労いも込めてね。」

「ああ、フロイトの事だな？」

「お母さんが言つたのはキルアさんだよ？」

「いや、一番頑張ったのは…」

「キルアさん。貴方ですよね？」

キルアはリースそう言わるといや、フロイトが…と嘗めたりする
がリースから威圧を感じたので言えなかつた。

そして場所は変わり旅館へ。ここにいるメンツはキルア達をもちろんとして。リンティ、ハイリヤ、クロノ、ユーノ、なのは、であつた。

そして各自、飲んだり、食べたり、話したり、楽しんでいた。
そしてキルアはその現状を見て少し物思いにふけつていた。

(… ここの空氣、懐かしいな…… あの人達ともこんな感じに騒いだな
…… いや、あつちはちょっと荒々しいか…。)

キルアがそんな風に思つてゐるとフロイトが話しかけてきた。

「キルア…。

「何だ? フロイト。」

「ありがとう… 私と一緒にジュエルシードを集めてくれて… キルア
がいなかつたら今のこの幸せな状況はなかつんだよ?… 本当にあり
がとう。」

キルアはフロイトにそつと言わるとふつと笑いつづけた。

「別に礼を言われるほどのことはしていなさい。」

「キルアはいつも通りだね…… ねえキルア… お願いがあるの…?」

フロイトは手を潤ませ頬を赤く染めながらキルアにそつと語つた。

「お願ひつて 一体なんだ?」

「目を閉じて…。」

「…？分かつた目を閉じればいいんだな。」

キルアは何故フェイトが目を閉じてなどと言つたのかは分からないがとりあえず目を閉じる事にした。…そしてキルアが目を閉じたあとフェイトはキルアの唇に自分の唇を近づけ…重ねた。そしてフェイトはすぐにキルアから離れた。…顔を真っ赤にして。

「キルア…」これが私からお礼…」

「唇にやわらかい感触がしたが何をしたんだ？」

フェイトはキルアの言葉にポカーン…となつた。
それはそつだらう普通はあるシチュエーションなら誰でもキスと思うだらう。

「キルア？普通このシチュエーションなら、ああ思つよね？」

「あつて何だ？」

「……キルアだから仕方ないか。」

普通は納得いかないだらうがフェイトはキルアだからと云つ事で納得する事にした。

しかし後ろでフェイトだけがキルアとキスした事に納得いかない女性達が目を光らせてキルアを見ていた。

「ど、どうしたんだ？アルフ、プレシア、なのは…。」

キルアは三人の妙な迫力に思わずたじろぐ。

「キルア？アタシもお礼するから目を閉じて？大丈夫だから。」

「何が大丈夫なんだ？」

「娘に先を越されたままと言つのはね…。」

「プレシア何を言つてているんだ？」

「キルアさん！お願いだから目を閉じてくれませんか？」

「なのは、目だけ笑つてないんだが？」

三人はジリジリとキルアに近づいてくる。
そしてキルアは…

「何だか分からぬが今は逃げるときだな。」

そう言つてこの場から走つて逃げた。

しかし三人は逃げるキルアを全力で追いかける。

「「「待て～～！！！」」」

「ある意味ジュエルシードとの戦いよりも迫力があるぞ！？」

「世界を守つた人も恋する乙女には敵わないのね。」

「一人乙女と呼んでいい年か怪しい人がいますが？」

「クロノくん。それあとでプレシアさんに伝えてもいい？」

「それはやめてくれないか…？」

「いや～それにしても楽しい宴会だわ。世界を守つた人のたじろぐ姿が見れたんですもの。」

「そうですねえ～艦長。」

「キルアさん。助けなくていいのかな？」

ユーノがそう言つとクロノはユーノの肩に手をポンと置くと。

「君はあの三人を相手にして平氣なのかい…？」

と言つた。ユーノはそう言われる何とも言えなかつた…。

「三人とも何でそんな目で追いかけてくるんだ！？俺は何かしたのか！？」

「いいからキルア止まつてよ？」

別に怖い事はないわよ？

卷之三

一
断
る
！

キルアは三人から逃げ続ける。

そして三人はぎらついた目でをしてキルアを追いかける。

ジユエルシーの一件は賑やかな追いかげつこで完全に幕を閉じた。

しかし、この世界にはまだ驚異はあるかもしない。……。

だが……今は幸せな一時が流れるのを彼らは楽しむべきだつ……。

フロイトのお礼（後書き）

作者「無印編終了です！」

キルア「とりあえず無事に終わつたようだな。」

フロイト「皆、最後はハッピーでよかつたよねー！」

作者「そうですね。…………あと一人に言つておくことがあります。」

キルア「何だ？」

フロイト「何？」

作者「次回から数話ほど無印キャラクターやフロードアウトします。出番は無じです。」

フロイト「ええー？」

キルア「やうか。」

フロイト「キルア。もつと気にしようよー！？主人公なんだよー。」

キルア「出番がいっぱいほしいとか別に思つてはないしな。」

フロイト「欲がないんだねキルアは。」

作者「まーまー、数話たつたら出られるんですから。あとやうやう。

」

フロイト「読者の皆様この小説をここまで読んでくださいがありがとうござりますー！」

キルア「次回からはA、S編だ。これからもこの小説をよろしく頼む。」

作者「ではまた次回ー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5695y/>

その者の拳は滅殺の拳

2011年12月30日22時49分発行